あらせられたり。

布衣の微臣たる私もこの大式典に參列する光榮に浴したることは感激の至りなり。二三日前より天氣定まらず、その日の晴雨を案じ居たる人々はその日一點の雲もなき大空を仰ぎて、今更神國日本の祥瑞に感動せざるものはなかりしならん。何よりも何よりも臣民として嬉しかりしは、われわれのすめらみことの彌御健かにおはします御影を遙ながら拜し得たることなり。又畏くも勅語を賜はりし瞬間は身もしびれるばかりなる感激なりき。五萬五千の臣民は霞の如くひそまり返れり。直立不動一齊に心もち頭を下げたるまゝ咳聲一つ聞かれざりき。感泣とはかゝる刹那の崇高なる魂の內面的躍動ならん。私はわが身ともなく熱きものが眦から流れむとするを覺えたり。

われわれ日本臣民には脈々二千六百年不變のもの二つあり。それは建國の理想と一君萬民の血潮のながれなり。

大亞細亞建設の皇國の理想は、云ふまでもなく神武の聖業の繼承なり。二千六百年來の大業を茲に一段階世界的に踏みのぼらんとするなり。血潮は、われわれの身內を流るゝ血潮こそは、生々と建國以來の脈音をなほ現實の現し身に脈搏てるなり。この血に問へば日本とは何か自分とは何か臣道とは何か翼賛とは何か、答へのなきものは一としてなし。

全員再起立して國歌を奉唱せり。近衛首相の發聲に從ひ、八紘にひゞけよとばかり、萬歲を三唱せり。この聲こそ大和民族が今日の信念を世界に告ぐるの聲なり。殷々たる皇禮砲のひゞきと共に式はめでたく閉ぢられたり。

翌十一日の祝典には再び優渥なる勅語を賜りたり。五萬數千の參列者が忝くも兩陛下の御前に盃をあげ祝ひまつる光榮に浴し、われわれは一碧清澄の秋空の下に、畏くも兩陛下と同じき野戰料理をひらきあうて、式場中央の舞臺に樂人たちの舞ふ古樂の振や音樂に神々しき中古の御式の樣を偲びつゝ、和氣靄々昭代の聖恩に心からなるありがたさを讃へ合ひしなり。陛下におかせられても、　龍顏晴やかに親しく五萬餘の臣民と共に、そのあひだ御杯をいくたびか御唇にはこばせられたるやう拜せられたり。君臣ひとつに完く溶和したるかゝる光景こそ世界のいづこにも見られざるなり、わが日本地上に於てのみ見得る眞の美しさならずや、人類最高の理想はかくの如く高き想念のなかに潔く樂しく和樂することにあるものを、いつの日か大亞細亞圈內の民みなにこの幸をこの偉大なる幸福を頒け與ふることを得べき。

わたくしは日本臣民のひとりと生れし幸を思ふと共に、廣く大きく、更にそれを思ひてその日の來るべき達成へ、ひそかに明日への誓ひを思ひ固めずには居られざりき。

紀元二千六百年奉祝式典に參列して

金光教長崎東部教會長　長田信男

◎感激の胸は先づ踊る

昭和十五年九月十七日、近衛內閣總理大臣並紀元二千六百年奉祝會長公爵閣下より、式典並に奉

祝會への、御招待狀を拜受した時、既に感激の胸は、先づ高鳴るのであつた。

此の感激は、今日も亦、今後永劫にも、動脈を流るゝでありませう。否な、恐らく、その響きは、家より村に、町より市に、日本國中に、八紘に、將た永遠の歴史に燦として輝くことであらうと思ひます。

◎反　省

どうして、この不德な者が、かゝる光榮に浴する事が出來たであらうか？

貳拾有餘年、縣下の教育事業に從事させて頂いた爲めであらうか、信仰生活に入つて三十五年、神道教師として現職に在る事、本年で滿廿年、この紀元の佳歳に當つて、やつと心許りの感謝祭を奉仕したばかり、是とて平素、縣市當局の御手厚き御引廻しを蒙り、百卅萬縣民各位の御世話に預る身にして、何の御報恩も出來ない、不甲斐なさを、全く恐縮して居る許りですのにと、反省するのであります。

◎早速縣へ出頭して

御禮を申述べ、宿舍の件をお願した。在京の恩師、舊知の訪問すべき個所、多々あれども此の大任を果す爲めには、分宿して勝手の行動を取つては、當事者に迷惑を掛くる恐あるを以て、合宿方をお願した。

◎軈て出發の當日となつた

此の間諸般の準備、縣當局の御苦心は、實に容易ならぬ事であつた。

◎十一月八日午後三時三十分長崎驛集合

ヤー〳〵！　お久しう!!　お目出度う！

右も左も知人の多いこと、何れも颯爽たる出立、水筒を肩に掛けたりして、全く小學生の遠足のやうで、嬉しさが漲つて見える。各班長の號令で、四列縱隊に整列して、

◎祝典參列特別列車

に分乘した。長崎縣は七班に分れて七車、佐賀縣が四車、すべてで十一車連結の長蛇陣を、一機關車が牽引するのであつた。午後四時十五分長崎驛出發。澤山な見送の人が、帽子を上げ、ハンケチを振るのであつた。

途中諫早、山口、佐賀、博多で、兩縣全部が滿員!!　互に久濶を敍し、健康を祝し、近狀を語り親話、歡談、笑聲、とても盡くる所を知らず。こんな嬉しい、睦しい列車が、又何處にあらうか？

◎同年輩多數

何れも年輩者多數で、中には七十歳八十歳の長老もあつた、自分は年長者と思つてゐたが、まだ若輩であつた。最も、教員時代に御教育申した、校長先生や村長さんや局長さん方が何人も挨拶をされるので、又餘程勇氣を取戻した。

◎此の慶祝列車こそ

家族列車と申しませうか、眞に一億一心列車で、只管、歡喜と和樂とを運ぶのであるが、全國各地方より帝都に向つて馳る祝典列車の光景は、各地皆此の通りであらうと思ふ時、何たる雄大な計

劃であらうか、何たる御稜威の輝きであらうか、全く驚愕、驚喜せざるを得ないのであります。

◎列車内の隣組

班長殿の肝煎で、列車内に隣組が編成された。お茶の配給、辨當のお世話、老人は果物や、お菓子の買入までして下さるので、又着京、集合、起臥等に至る迄、尋常一年生に噛んで哺めるやうに指示して下さるので、往復共全く大船に乘つた心地、旅といふ念は全く忘れた旅であつた。右にも左にも、「名班長だ!! 部長級だ」といふ噂が聞えたのは、嬉しかつた。

◎式典、奉祝會

二千六百年の歴史に、全く類例のない盛典であり、又我々の父祖が、曾て浴し奉つた事のない盛儀に、會ひ奉つた自分を顧みた時、恐懼感激、只々感涙に咽ぶ外はありませんでした。

◎式場内外の裝飾、森嚴、宏大、莊美

五萬五千全國代表の嚴肅なる座席、前後になき兩日の快晴、「もう日本は心配は有りません」との感激のさゝやき。式場委員「こゝを室内と心得て軍人の方も帽子を取つて下さい……」全く、入、紘一宇の式場!!

◎兩陛下出御

天地聲なし、我等は、兩陛下を正面に仰ぎ奉り、兩陛下は、我等萬民を、目前にみそなはし給ふ。此の一瞬時の天地は、天地開闢の天岩戸の昔も斯くと思はれて、感涙禁ぜざりき。

◎賜饌

兩陛下の御前に於て、御饌壹箱、副饌、神酒、パン並に御果物、記念珠玉「列聖珠藻、聖德餘光」を拜戴す。兩陛下玉盃を擧げさせ賜ふ、勿体なしとも、辱なしとも、有難しとも言ふ所を知らず。勇氣を鼓し、盃を起し、神酒を盛り、先づ神樣に、陛下に、祖先に、恩師に心から奉献して、お下りを頂きました。此の有樣を、兩陛下も御覽じて、いかばかり御嬉しく思召された事であらうかと拜察致しました。

◎還御

百一發の祝砲、殷々と大内山にコダマして、百鳥一時に抃舞する裡に、還御ましませば、いつ迄も御後を見送り奉りぬ。

◎退場

一歩〳〵感激の歩を踏締め、滅私奉公、臣道實踐の固き覺悟と決心とを誓ひつゝ、幾度か、宮城を仰ぎ拜しながら、馬場先御門を退場しました。

◎聖德感話

十一月十四日夜九時半、無事歸縣、十五日信徒一同、町内全部を會同して、奉祝式典の狀況を報告し、御饌を頒ち、一同、皇室の彌榮を祝禱し奉つた次第で御座います。

私は本年六十六の老齢に達しました。十一月は光輝ある聖紀二千六百年の式典が擧行せらるゝのである。此の千載一遇ともいふべき盛典に萬一參列の光榮に浴するを得ばやと思ひ、大膽にも八月宗秩寮に參列の申請を致しました。處が九月十四日式典及同奉祝會に參列すべき有位者總代に決定の旨御通知に接し、全く夢かとばかり、此有難き恩命に感泣したのであります。同月十九日內閣總理大臣並に奉祝會長より、式典並に奉祝會參列の御案內狀を拜受し、十月二十八日奉祝會委員長より參列證鐵道乘車證を拜受、引續き東京市電乘車證をも受領、至れり盡せりの御計ひを得て、十一月八日勇躍出發、午後四時過ぎ肥前山口にて長崎班奉祝列車に乘車し、一路帝都に向つたのであります。九日夕刻東京驛に着きました。

明くれば十日、これぞ紀元二千六百年の歷史的式典、畏くも　天皇　皇后兩陛下には親しく宮城外苑の式場に臨御遊ばされ、尊き大御姿を拜し得るのであります。この佳き日に惠まれたる奉祝日和を禮讃して、私は坂下門外の北入口より參入致しました。

深綠の大內山を背景に、式場は誠に神々しく、中央金屛風の前に玉座御座が拜せられ、式殿左右には日月八咫鏡、金鵄、桐花の紅旛が劍の柱に建てられはためく。十時五十分儀仗隊の喇叭嚠喨と響けば、二重橋上　兩陛下の自動車鹵簿が靜かに軌つてゐるのが拜せられました。やがて式場に着御遊ばされ、　兩陛下には皇族殿下並に顯官を供奉せしめられ、玉座御座に着かせ賜ひ、崇高の氣式場に充つ。近衛首相開式を奏上、總員最敬禮、感激籠めて君が代を奉唱、　兩陛下には立御あらせ給ひて御受け遊ばされました。再び近衛首相は恭しく御前に進み、謹で聖紀の壽詞を奏し奉る。その音聲明朗、式場の隅々まで響き渡り、感動こよなし。畏れ多くも　天皇陛下には特に勅語を賜はり、五萬の參列者は忝なきに寂として頭を垂れ、深き感動に咽ばぬものとてはなく、熱涙頰を流れたのであります。感激今や最高潮に達し、近衛首相は双手を擧げて、　天皇陛下萬歲を奉唱すれば、諸員歡喜に溢れ三度び唱和す。時に午前十一時二十五分。全國民も一齊に　聖壽萬歲を奉唱、彌榮を稱へ奉つたのであります。こゝに曠古の盛儀は終り、　兩陛下には天機並に御機嫌麗しく、總員奉送裡に還幸啓遊ばされました。

十一日。今日は盛儀第二日、紀元二千六百年奉祝會の日、前日と同じく、天高く澄み渡つて一片の雲なき肇國晴れ、前日拜受の記念章を胸に、午後零時半參列者全員續々と參入、喜びに滿ちて着席する。卓上には記念品の「聖德餘光」「列聖珠藻」を初め、粉味噌、御重詰、乾燥牛肉、乾麵麭、戰力餅、航空元氣酒など戰線を偲ぶ軍用携帶食の折詰、清酒、勝栗、干鱈、スルメ等の副饌、蜜柑、興亞パンが配列されてありました。一時四十八分花火が打揚げられ、　兩陛下宮城發御を知らす。前日御同樣の御次第を以て式場に行幸啓、重ねて　龍顏を奉拜、光榮に感泣したのであります。近衛會長開會を奏上、總員最敬禮、君が代の奉唱を終れば、高松宮殿下には秩父宮殿下の御代理として、御前に進み奉祝詞を御奏上遊ばされました。金枝玉葉の御身を一億民草に代らせ玉ひ、皇謨の雄大を稱へ、聖代の彌榮を祝し給ふたのであります。殿下の御聲は我々の胸を貫いたのでありま

す。　天皇陛下には重ねて勅語を下賜遊ばされ、此有難さに胸迫つたのであります。かくて君臣和樂の饗宴が開かれ、參列者一同祝杯を擧げて大御代を壽ぎ奉りました。同時に舞樂臺には宮內省樂部の奉祝舞樂「悠久」が始まり、續いて陸海軍軍樂隊の吹奏及奉祝讃歌、全國學生生徒總代の奉祝歌ありて、聖域の饗宴酣はでありました。かくて高松宮殿下には御前に進ませ玉ひ、御双手を高く、天皇陛下萬歲を御發聲、全員感激に溢れて萬歲を唱和し奉り、こゝに諸員最敬禮、近衛會長恭しく奉祝會終了を奏上、　兩陛下には三時五分會場發御、還幸啓遊ばされ、茲に芽出度曠古の盛典を終つたのであります。

嗚呼この昭代に生を享け、この盛儀に列する光榮を得、遠く想ひを肇國の昔に馳せ、光輝ある歷史に顧み、宏大なる御稜威の下、國恩鴻大、誓つて聖旨を奉戴、聖恩の萬一に應へ奉らねばならぬのであります。

左の歌寔に感激に堪へませぬ

古　歌

皇民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へは

佐々木信綱

み民吾ら生ける驗ありかしこくも紀元二千六百年のよき秋にあふ

古　歌

すゑの世の末の末までわか國はよろつの國にすぐれたる國

曠古の盛典に列して

長崎水上警防團長　中部悅良

實にあの日、草莽の一微臣にして畏くも　天皇　皇后兩陛下の尊き御姿を咫尺に拜し奉りしのみか、優渥なる勅語を賜るの光榮を擔つて、感激に身をふるはせましたのは誠に恐れ多い極みながら私の生涯を通じ最高最大の感銘でありまして、唯々「有難さ」の二字に盡きるのであります。

何時にても眼を閉づれば、直ちにアリアリとあの盛儀の光景が瞼に浮び出ます。私は縣下警防團長代表として、この曠古の盛典に參列する光榮を得たのでありますが、この光榮も日本人なればこそでありまして、廣大無邊の聖慮に應へ奉るの道は唯一つ滅私奉公にあるのみであります。百の理窟より先づ一の實行、臣道の實踐に挺身するの覺悟は云はずもがなであります。

式典參列の感想は唯々恐懼、筆舌に盡すを得ません。

光輝ある紀元二千六百年に生れあはせた、日本人としての喜び、然もこの曠古の式典に參列するを得たるの光榮に浴し、家門の譽として、ひたすら感謝感激の涙にむせぶのみならず、この宏大無邊の　皇恩に對し奉り、たゞたゞ粉骨碎身、層一層滅私奉公の誠を捧げたいと存じます。

中村嘉一郎

川柳町長　中村不二男

「大日本は神國なり」

この大文字が虚空に現じ、この大音聲が天地に轟きわたつた、大莊嚴です。

近衛首相の壽詞「一系連綿正に紀元二千六百年を迎ふ國體の尊嚴萬邦固より比類なし　皇謨の宏遠四海豈匹儔あらんや」です。

この萬邦比類なき國體の尊嚴と、四海に匹儔なき皇謨の宏遠とによつて凝り成つた一大精神が、式場に搖曳するを觀ました。限りなく貴く强い皇國の姿です。

百僚衆庶の慶祝の至誠を嘉尙せられ、優渥なる勅語を賜はる凛乎たる英姿、

今ヤ世局ノ激變ハ實ニ國運隆替ノ由リテ以テ判ルル所ナリ

と啓示し給ひ、更に

我ガ惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚シ以テ人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアランコトヲ期セヨ

と命じ給ふ朗々たる玉音を拜し、異常の感激に打震ふ民草五萬五千の胸中、たゞ有るは忠誠一途の日本國民の眞心のみです。そこに邦家の艱險を克服し盡すべき國民的決意が火と燃え上つて居ました。

君が代の齊唱、萬歲の奉唱、　聖上の御前に、吾等の赤誠を聞召せとばかり、あらん限りの力をこめて、思ふ存分に唱へ奉ることを得た嬉しさ、　陛下の御民たる吾々日本國民にのみ許さるゝ特權です。

奉祝會總裁御代理高松宮殿下は、祝詞を奏上せられて、

臣宣仁謹ミテ言ス

と仰せ給ひ、

天皇陛下　皇后陛下ノ臨御ヲ仰キ、紀元二千六百年奉祝ノ會ヲ行フ、瑞雲靄靄トシテ宸闕ノ上ヲ繞リ、和氣洋々トシテ禁苑ノ外ニ溢ル、普天率土、手ヲ額ニシ聲ヲ同シウシテ此ノ盛事ヲ謳歌セサルナシ

と奏せらる。君民和樂の大饗宴に、吾等民草を代表せらるゝは、畏くも皇弟の宮殿下なり。正に一君萬民の國體の顯現、嗚呼何たる有難さぞ。塞き兼ぬる涙、押へ得ぬ嗚咽。その中に生れた吾等の誓ひ、殿下の奏上せられた祝詞に、

臣等和衷協同　皇猷ヲ贊襄シ時艱ヲ匡濟シ以テ天恩ノ萬一ニ報イ奉ランコトヲ期ス

とあるもの、吾等の强き誓ひです。

次の紀元二千七百年の奉祝式典の莊嚴盛大を思ひます。更に二千八百年、九百年、三千年、五千年、一萬年、萬々年、限り知らぬ悠久彌榮の神國日本です。勿論吾々の人間としての生命は、次の二千七百年すら待ち得ないものですが、宇宙の大生命の中に、永遠の日本國民として、將來の國運の隆昌を壽ぐ樂しみと誇りとを持ちます。

紀元二千六百年奉祝祝典に參列して

長崎縣民總代　中本倍吉

草莽の臣中本倍吉、日本歴史の一頁を飾る曠古不滅の紀元二千六百年奉祝祝典に、はからずも長崎縣民總代として參列の光榮に浴し、胸の血潮の湧躍するを禁じ能はざるなり。

聖壽の萬歳を奉唱せし一瞬、日本國民としての有難さと誇らしさに胸迫る感激にふるへ、日本の眞の姿を感得し、我が國體の尊嚴さ神秘さに自づから襟を正し心を強く擊たれたり。

此の感激感銘正に終世忘るゝ能はず。

更に國運の隆替のわかるゝこの重大時局に際して、思ひを　神武天皇の創業に騁せ、皇圖の宏遠にして皇謨の雄深なるを念へとの優渥なる勅語を賜はり、日本は全國力を擧げて、世界新秩序の一環をなす東亞新秩序建設の聖業に邁進しつゝあるの秋、大御心を仰ぎ奉り、只々恐懼感激あるのみ。この上は父祖の遺せる偉大なる歴史を繼承し、更にこれを發展せしめ、即ちこの未曾有の國難を突破し、以つて次代の日本國民に讓り渡すべく臣道實踐を期す。かくしてこそ大御心を安んじ奉り、日本建國の精神に添ひ得ればなり。

式典參列の感激

北松浦郡南田平村　西　遞次郎

私は選に與つて縣民總代として、皇紀二千六百年記念式典の曠古の盛典參列の光榮に浴することが出來まして、全く感謝と感激とに終始した次第であります。

式典當日は誠に此の盛儀に相應しい、且此の盛典を壽ぐが如く、天氣いとも晴朗にして、集合所たる日比谷原頭に集ひ寄つた各縣參列者の各々が皆感激に滿ちた晴がましい面持であります。彼の式場の廣大さ壯嚴さ、並居る參列者の肅然たる、式の進行に連れて昂まるその感激、流石に曠古の盛典であります。

勅語を下し賜はるいとも朗らかな　玉音を拜しました時には、何としても涙禁じ難いものがありました。氣が付いて見ると、邊りには嗚咽の聲さえ耳に入つて來ます。寔に此の聖代に生れ合せ、今此の盛典に參列するを得た身の幸を染々と感じたのであります。

式典參列に當りまして政府の御取計ひ、さては縣の御斡旋、殊に引率者たる縣廳員諸氏の親切極まる御世話には一同感謝措く能はざるものがありました。

吉井村長　野村　淳

紀元二千六百年の式典に參列するの光榮に浴しまして、　龍顏麗しき　兩陛下を仰ぎ奉り、聖壽の無窮と帝國の彌榮を祈願し奉る事を得ました事は、私の終世忘るゝ事のできない感激で、只此の上は、益々粉骨碎身職域奉公の誠を盡しまして、　聖恩の萬一に酬いなければならぬと思つ居ります。

長崎職業紹介所長　畑　島　好　松

皇統連綿、茲に悠久二千六百年、單に之だけで既に一種言ひしれぬ感激に胸の高鳴るを、まして夢想だにせざりし莊嚴極りなき曠古の盛典に親しく參列するをさし許されて限りなき光榮に浴す、其の感激、其の喜び、其の有難さ忝けなさは只全身打ち顫ひ自然に頭の下るのみにて到底筆舌に盡し難く、殊に自らの拙なき筆を以てしては如何にしても之を表現する能はざるを眞に遺憾とする。

蓋し世紀の大式典は實に大日本皇國の彌榮の表徵にして、更に我等一億赤子をして思ひを肇國の古へに馳せしめ、國體觀念を益々明徵にし、億兆一心愈々奉公の誠を致し、非常時克服の決意を彌が上にも牢固たらしめ、以て皇運扶翼の意を擧げしむるに預つて力の大なりしこと今更申すまでもなく、一層有難くも亦力强き極みである。

式場に充てられたる宮城前の廣場は、大內山の松の翠もいと濃まやかに映へて神々しさ限りなく、全國より、更に遠く海外より、感激の面を輝かせつゝ馳せ參じたる一億同胞の代表五萬三千餘名、しかもこの大衆が一堂に會しながら、入るにも出づるにも肅として一糸亂れず、滿堂寂として聲なく恰かも水を打ちたるが如き光景は、流石に大國民の襟度にして其の規律あり統制あり、悠揚迫らざる態度は東亞の盟主としての重み充分なるを窺はしむ。而してかくも神々しき式場に　兩陛下の御親臨を仰ぎ奉り、まのあたり御勅語を賜ひ、此の身この耳に　玉音を拜す、この心情は如何にしても筆にも言葉にも表現することは絕對に不可能である。只涙!!　涙であり、眞に一生を通じての最大にして最深最高の感激であり、瞑しても尙忘れ得ざる感激である。

しかしこの榮えある感激は、直接參列の光榮に浴したる者のみ私すべき感激でなく、齊しく一億同胞の感激であらねばならぬ。從て參列の光榮に浴したる者は層一層自肅自戒、衆を率ひるの氣概を以て自ら率先臣道の實踐に範を示し、皇恩に應へるところがなければならぬと思ふ。

尙この聖典が更に萬邦に與へたる影響は極めて至大なるべく、即ち世界史に曾て見ざる廣域に聖戰の駒を進めて既に四年、しかも尙餘裕綽々この世紀の大典を擧行せらる。國民亦日夕忠誠を盡しつゝ心底より之を壽ぐ、實に圖り知るべからざる皇國の偉大性を如實に顯示せるものにして「日本眞に怖るべし」「日本眞に賴るべし」の感を深めたるもの敢て蔣介石乃至援蔣第三國のみにあらざるべく、萬邦の齊しくするところ、思ひを茲にも馳せて日本臣民たることの有難さを今更の如く痛感する次第である。

所懷

萩原太郎治

私は今度皇紀二千六百年の御聖典に列するの光榮を得て上京することが出來ましたが、何分にも遠路で、老いの身の汽車汽船その外旅程の苦勞を覺悟してゐましたが、何から何までの　陛下の大御心づくしを辱うして、只だ有難さに感泣した次第であります。

只今日本は有史以來の大變局の中にあつてのこのありがたさ、皇恩の無窮に、民草として私は日本臣民であることの喜びを幾度か繰り返し繰り返し語つた事でした。

殊に式當日は　陛下の御聖姿を拜し、日章旗のはためきをみつめて、皇運の偉大さに胸のあつくなるのを覺えた次第であります。

日本は偉くなつた。もつともつと偉くなつて、　陛下の御鴻恩に報いねばならない。自分は老軀で物の御役には立たぬとも、せめて御盛儀の有難さを鄕黨につたへて、「出せ一億の底力」そして大政に翼贊いたしたいと存じます。

由來長崎の地は日本の發展に大變に深いゆかりを持つてゐる。昔を想起して、一入古人におとらない今後に處する覺悟を固めなければならないと存じます。

御盛儀に參列しての所懷をのべさせていたゞき、光榮を新にして筆を擱きます。

崎針尾村長　長谷川秀志

十一月十日、赤誠に燃ゆる全國民が、津々浦々に至る迄、擧つて皇國の御榮を壽ぎ奉る佳き日、宮城前に展開されんとする曠古の盛典、紀元二千六百年式典參列を差し許さるるの光榮に浴した私は、云ひ知れぬ感激と喜びを胸中深く秘めて着京、安らけき帝都の夢に車中に於ける總べての疲勞を慰し、黎明未だ明けやらぬ午前五時、枕を蹴つて起床、先づ大空を仰ぎ見れば、二三日前から氣遣はれた天氣が、今日の大式典を心密かに祝福するかの樣、碧空一點の雲なく正に快晴、思はず鳴呼神國日本なるかなを叫ぶ。齋戒沐浴心身共に清淨潔白を誓ひ、宮城を遙拜して、天津日嗣の彌榮を祈念し奉り、一切の準備を了り、六時宿舍出發、指定集合地日比谷公園に着く。此處に待つこと暫し、漸くにして時到り、隊伍堂々式典場へと急ぐ。

當日參列者の服裝はと見れば、軍服ありモーニングあり國民服あり或は紋服等にして多樣なるも、國民としての同じ思ひを胸に秘めたるは、今日の感激と聖代に生を享けし喜びの外に何物もなかつたであらう。斯くて沿道、はためく日章旗の中、疾走し來る自動車の警笛に驚かされ、怒濤の如く押し寄する人の波に危く隊伍を持しつつ、田舍者の私には騎馬警官の穿ける赤袴も珍らしく、早くも馬場先門に到着。此の日青雲棚引く大内山の御濠の水も最も靜かに、清淨其のものゝ姿、そして日本のシンボルたる老松之に映じたる樣は、今日の盛典を壽ぐものゝ如く、又式場參入口奉祝塔兩側に設けられた花壇には白黃色とりどり大小の菊花馥郁たる中に我等を迎ふ。定めの席に到り、式

殿はと見るに、大内山を後に紫宸殿を偲ぶ寢殿作りの典雅な建物、杉皮葺きの屋根は美しと云はんより、限りなき神々しさ、畏くも我が民草の上に垂れさせ給ふ大御心もて　天皇　皇后兩陛下の臨御遊ばされる玉座並に御座はと拜すれば、兩面金四曲屏風一雙の前、錦燦めく御卓被を掛けられたる御机二つ。錦簾は緩やかにはためき、式殿に張られたる紫縮緬御紋付の幕は微風に輕く搖らぎ、一入其の奥床しさを覺ゆ。

時愈々迫り、一同起立、肅然たる中に、遠く微かに流れ來る嚠喨たる喇叭の音と共に、老松の中を辷るが如く進み來る御召自動車は、軍樂隊の君が代吹奏裡に御車寄せに着御。暫し御休憩の御後兩陛下御打揃はせられ、玉座及御座に着かせらる。嗟呼此の時である、私は私の体の中に動いてゐる凡ての機關が一時停止するのではないかと思ふまで、我と我が身を危んだ、押へんとして押へ切れず、秘めんとして秘するを得ない感激と興奮に、恰も電氣にでも觸れたかの樣、怪しき迄に打ち震ふ体を何としても靜止する事の出來なかつたのも此の時である。嚮て最敬禮、君が代奉唱、此の間全く空虛な体となつてゐた私は、マイクを通じて命ぜらるる儘に、殆ど無意識の中に動き無我夢中で、併し戰く心を押へ、將に杜絶えんとする聲を僅かに持しつつ、辛うじて君が代の奉唱を了へ得た事を微かに記憶に止めてゐる。其れ程迄に私は感激に打たれ興奮してゐたのである。併し此の感激興奮は只に私一人ではなかつたであらう、屹度參列者五萬人凡てが共に打たれた感激と興奮であつたに違ひない。斯くて漸く我に歸つた時、始めて悠久二千六百年、皇統を繼ぎ給ふ貴き兩陛下の御姿を玉座に遙か乍ら拜する事が出來た。此の時に於ける參列者の胸中はどんなであつたらうか、茲に記すに余りに畏き事乍ら、私が臣下としての最大の喜び、其は我等の　天皇の益々御健かに渉らせ給ふ事を目前に拜し得た事であり、之も只私一人の持つ喜ではなく、參列者一同否一億同胞の凡てが持つ絶大の喜である事を確信するものである。時刻愈々進み、近衛首相一億同胞の總意を披瀝して壽詞を奏された後、　陛下には勅語を賜ふたのであるが、私の席は玉座から余りに遠くして微かなる玉音を拜する程度ではあつたが、誰一人として聲を發する者なく、咳聲一つ聞く事の出來ぬ靜肅さであつた。感泣とは正に斯くの如き息詰まる刹那の情景を云ふのであらうか。私は生れて始めて感泣と云ふことの眞意を明らかにする事が出來た。そして　陛下が玉座に着御遊ばされ、我に歸つた私の眼鏡には露ならぬ雫一滴、之が感激の熱涙でなくて何であらう。再び込み上げて來んとする或るものをぐつと耐へ、ともすれば又してもにじみ出んとする涙を押ゆるに懸命の努力を拂つたのである。

萬歲の時は來た、正に十一時廿五分、近衛首相は正面マイクの前に進み、　天皇陛下萬歲と双手を擧げらるれば、五萬の參列者之に和し、咽喉も破れよ大地も裂けよとあらん限りの聲諸共に、大君の御前に民草の赤誠を唱へ奉り、嚴かなる式典は閉ざされたのであつた。

噫此の光榮に浴した私共、昭和の聖代に生を享け得た喜び、それは私の永劫忘るる事の出來ない最大のものである事を感銘すると共に、一億一心萬民翼賛の誠を致し、以て皇恩の萬分の一にも報い奉らんの決意と覺悟を更に新たにする次第である。

光榮に輝く一瞬

花田寅造

あゝ遂に迎へた輝く日。榮ある光を身に受けて、曠古の盛典を擧げる東京に、長崎縣代表の一人として參列させて貰つた私は、日本に生れた喜びの昂奮をどうしても押へることが出來なかつた。

これは恐らく、大和島根に生きる一億同胞の心に描いた境地であらうと思はれるが、わけても宮城外苑の清高、崇嚴な式典を眼のあたりに凝視した、五萬人の參列者の一人としての私には、一入感銘深いものがあつた。そして盛典の感激を何から先に披攄してよいやら、拙い筆では到底書き現はすことが出來ない。

十一月十日の朝である。私は四谷區愛住町の親戚の寓宅から、胸に榮ある「參列章」を輝かせて式場である宮城外苑にある長崎縣代表の參列位置を心に描きながら、かねて私共の豫備集合所になつてゐる日比谷公園から馬場先門に向つて式場に急いだのである。

見あぐれば崇嚴な式殿のあたり、瑞雲靜かにたな引き、馬場先門の高い二つの大奉祝塔の頂上に配した「射光の玉」が朝日に照り映えて、それだけでも既に胸に高鳴る感激の波を押へる事が出來なかつた。——午前七時のことである。歡喜と感激の沸騰した中に次から次へ、式殿へ式殿へと足が運ばれ、やがて所定の位置に着いたわけであるが、午前十時三十分ごろと思はれる時分、大內山深く谺して、嚠喨とした喇叭の響が外苑一帶に靜かに流れてきた。

天皇　皇后兩陛下の式場に着御遊ばされるのお待ち申し上げる御時間である。滿場肅として兩陛下の着御をお待ち申し上げるうち、やがて聖駕を二重橋の彼方、鐵橋上に拜して間もないころ式殿南北の兩翼に整列した陸海軍二個大隊の儀仗隊によつて、莊重な「君が代」の喇叭が吹奏され間もなく、御料車は正門二重橋から式場に着御あらせ給ふた。

この歷史に輝く光景は次から次に連續されて行つた。

やがて、式殿の中央「萬歲額」を上に見て、御紋章も清き紫の幔幕に包まれた大奧、金屏風の光り燦と輝くあたり、　天皇陛下には御軍裝に大勳位副章をはじめ各種勳章を御佩用、　皇后陛下には御麗しき御洋裝に勳一等寶冠章副章を佩された御姿が網膜の中に映じ出された。——生けるしるしあり、皇國の民の幸の幸こゝに限りなく、瞼はうるんだ。

咫尺の間に　兩陛下の御英姿を拜した私は五萬余の參列者の一人として、滿腔の感激に涙して、近衛總理大臣の奏上する開式の聲を耳にしたのである。

一齊に最敬禮申上げた。漏れ承れば、畏くも　兩陛下に於かせられては、この時立御遊ばされ、禮を受けさせ給ふたと伺ひ、叡慮の御深きにたゞたゞ御聖旨に副ひ奉らんこと、寶祚の彌榮を壽ぎ奉らんことを心に誓つたのであつた。寶祚の彌榮を祈念し奉つて近衛總理大臣の壽詞が一句一句熱を帶び、光榮に打ち顫ふうちに終了した後、　天皇陛下には玉音朗々と有難き勅語を賜はつた。限りなき聖恩に報い奉らんと私の誓は愈々固く、低く低く頭は垂れた。

「大わたつみの、八潮のめくり行きあふ、八紘」

莊重に沸き上る東京音樂學校生徒並に全國中、小學校より選拔されたる光榮の兒童合唱の頌歌が式場から全國津々浦々に流れて行く樣だ。この時、近衛總理大臣の天も割けよと熱誠込めた「天皇陛下萬歲」の奉唱が響いて來たのである。これに和して、參列者一同は聖壽の萬歲を三唱したのであるが、この歡喜のひとときは、私の生ある限り永劫に忘れ去ることが出來ないのである。

かくて、盛典第一日目は感激の一つ一つを綴つて寓家に歸つたのであるが、更に第二日目の世紀を壽ぐ大奉祝會は極みなき「生の歡喜」「民族の誇り」を痛烈に感じ、殊に十一日午后二時四十九分高松宮殿下の御發聲による天地に轟く「聖壽萬歲」の御聲はいま尙、耳朶について離れないのである。

「末の世の末の末までわが國はよろつの國にすくれたる國」と繰返して歌ひ、舞はれた優婉勇壯に踊る「悠久」の舞は文武兩道の武士道精神を象徴するものとして、その舞技の千古に秘められた民族の誇りを顯現させたものを眺めては、聖戰の意義も亦ここにあるものと思つた。

私の退京は仕事の都合で、少々後れたが、この聖なる式典に參列させて頂き、皇國の光榮と共に永久に拭ひ去る事の出來ない恐懼と感激に胸も熱く、つきない感銘で一杯である。

榮ある皇紀二千六百年式典祝典に參列して

馬場正美

皇紀二千六百年の盛典擧行せらるるに當り、近衛總理大臣よりの案內に依り、感謝し、即日參列の回答をなす。

彌々期日も迫り、十一月八日、集合時刻長崎驛前に參集し、知人の挨拶に盛典氣分漲る。長崎縣第二班の列に入り、長崎市傷痍軍人分會長加藤九市氏と同列し、市內同志の見送りを受け帝都に向ふ。車中森班長より團体行動につき注意事項數回、九日定刻東京驛に下車、宮城を拜し宿舍に落着く。翌十日日比谷公園に參集し、宮城外苑の式場に向ふ。道の兩端に見送る人數知れず、式場入口の綠門に皇紀二千六百年の筆蹟朗麗にして人目を惹く。神勅に搖ぎなく、輝く皇紀二千六百年、秋空高く一點の雲なし。この日長くも　兩陛下の行幸啓を迎へ奉り、君民一体この佳き日を祝ぎ奉る。

御一代　神武天皇より歷代の天皇は國民に無窮の仁慈を垂れさせ給ひ、我等の祖先も亦御稜威の下に盡忠報國の精神を捧げ奉りたる、其精華を偲び、生を昭和の聖代に享けたる吾等國民の幸福、曠古の盛典に會ひ聖勅を奉戴す。靜にして聲なく、動じて天地を搖がす、あの一億萬民の聖壽萬歲の聲、實に世界無比なる我が國体の尊嚴なること、誠に恐懼感激に堪へず。

神勅無窮にして限りなく、牢固として搖がず、世界の狀態如何に變化すとも、國是は不變、八紘

一宇の精神に則り、時局の認識を深め、東亞新秩序の建設を目標に、一億一心、軍官民の三者擧つて己が天職に根限りの奮闘を續けてこそ、重なる難關も突破され、この意義ある盛典を擧げられたる精神に副ひ奉る所以なりと確信す。吾等傷痍軍人は、御稜威の下に愈々再起奉公を誓ひ、新体制に率先順應しつゝ努力健闘、責務を全ふして輝く次の盛典を念願す。記念に戴きし聖書二卷を家寶とし、否五萬五千を國寶とし、長久に全員の子孫に傳へたい。

大神のみのり尊や　大君の
　　み代のさかえを仰かさらめや
盛典の庭に侍へりて　大君の
　　きはみなきよを仰くけふかな
身にうけし痛手忘れて　みめくみに
　　わか身限りのちからつくさん
秋高し　帝都の空や　瑞氣みつ
盛典に侍へると子らの神詣で

盛儀參列の光榮に浴して

島原第一尋常高等小學校長　林　銑　吉

我が國は今や國力を賭して、新東亞建設の聖業を起し、既に四箇年の久しきに及んでゐる。一面國内諸般の新體制を樹立して、大政翼賛の實をあげようとする運動が勃然として興り、方に國運の一大轉換機に臨んでゐるのである。丁度この時、皇紀二千六百年を迎へたといふことは、偶然といへば偶然だが、之れは正さしく我が國の將來に對する、天の與へた示唆ではあるまいか。我々國民たるもの、國を擧げて大いに之れを記念し、之れを奉祝すると同時に、その克く二千六百年を迎へ得たる所以を考へて、此の示唆に對へなければならぬと惟ふものである。畏くも今回宮城外苑に於て、　兩陛下の臨御を仰ぎ、國民の代表五萬五千が集合して、曠古の盛儀が擧げられた事も、全く此の義に外ならぬものと考へる。吾れ幸にも此の盛世に生れあひ、眇たる一小學校長の身を以つて選ばれて此の盛儀に列し、親しく　陛下の御前に額づき、聲を限りに　聖壽の萬歳を奉祝し、畏れおほくも　陛下と倶に饌を戴き、あまつさへ優渥なる勅語を、玉音そのままに拜し得た光榮、その歡び、到底言葉に現はすことは出來ない。只々感泣するばかりであつた。

陛下は曩きに紀元の佳節に當り、「爾臣民宜シク思ヲ神武天皇ノ創業ニ騁セ　皇圖ノ宏遠ニシテ皇謨ノ雄深ナルヲ念ヒ和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ以テ時艱ノ克服ヲ致シ以テ國威ノ昂揚ニ勗メ

祖宗ノ神靈ニ對ヘンコトヲ期スヘシ」と御訓へ遊ばされた。吾れ今回の盛儀に列して、　陛下の御前に立ち、神代ながらの尊い御姿を拜した時、身もいつしか神武の古へに奉仕するかに覺えて、今更ながら　陛下の御訓へが、しみじみと心肝に響き渡るのであつた。

陛下は又過ぐる十月三十日教育に關する勅語　渙發五十年式に於て、「今ヤ國際ノ情勢ハ曠古ノ大變ニ際會セリ爾臣民其レ世局ニ鑒ミ億兆心ヲ一ニシ時艱ヲ克服シテ大訓ノ聖旨ニ副ヒタテマツリ以テ德輝ヲ四表ニ光被センコトヲ期セヨ」と仰せられた。吾れ今　陛下に咫尺して己れの職責を顧みる時、その任の重且つ大なるを深く自覺せずにはゐられなかつた。

式典第一日、宮城前大廣場にしつらへられた古風な式殿の正面に、　兩陛下の御姿を拜した時文武百官を初め五萬五千の民草代表、闃として聲なく、やがて奉唱する君が代の歌も、感激に打ちふるへ、中には嗚咽の聲さへ傳はるの光景、實に我が國ならではと、誇らしくも又嬉しき極み、之れを異邦の人に見せばやとの念切なるものがあつた。近衛首相恭しく御前に進み壽詞を奉れば、間もなく　陛下優渥なる勅語を宣らせ給ふ。玉音風のまにまに朗々吾等の耳朶に響けば、一同首を垂れて何れも感涙に咽ぶのであつた。而もその中には矢張り「今ヤ世局ノ激變ハ實ニ國運隆替ノ由リテ判カルル所ナリ」と、いとも時局を御軫念遊ばさるる叡慮を拜すること、洵に恐懼に堪へなかつた。

第二日には同じ場所で奉祝の盛宴が開かれて、矢張り　兩陛下臨御の下に饌を戴いたのであるが有り難いとも勿體ないとも感極まつて、「義ハ君臣ニシテ情ハ父子ヲ兼ヌ」の御言葉が胸にせまり、何れも感泣の外はなかつた。殊に高松宮殿下が祝詞を奏上せられた其の御聲、それに又　陛下御懌びの玉音、恐らく參列者一同生涯忘るることの出來ない感激であつたらう。

あゝ憶へば感激の二日、我が一億の同胞が、心から奉祝する熱誠の迸る處、天も亦之れに感應したのであらう。秋たけた帝都の空は、不思議な程晴れ渡つて、日本晴れと言はふか、祝典日和といはふか、全く天人一體の奉祝日和であつた。詩經に所謂「天保ニ定爾」、俾ニ爾戩穀」、罄無ㇾ不ㇾ宜、受ニ天百祿一、」といふのは此の惠まれた吾等の環境を指すのではあるまいか。

かくて一同は何れも、此の光榮に、此の感激に、益々肇國精神顯揚の信念を固め、愈々時艱克服に邁進して、一日も速かに　陛下の宸襟を安んじ奉らん、との決意を眉宇に浮べながら退散したのであつた。

紀元二千六百年聖典參列の感激

長崎市勝山小學校長　早田隆次

昭和十五年十一月十日、悠久紀元二千六百年の式典、翌十一日、奉祝會兩日共、畏くも天皇、皇后兩陛下臨御の下に、いとも嚴肅に、莊嚴に宮城外苑の聖域に於て擧行されました。何といふ嚴かな又和かな光景か、萬國に比類なき國體を有する皇國の民草としての誇、君民一体の情景の展開であつたか、今尚眼前に髣髴たるものがあります。

私は幸運にもこの式典と祝宴に參列するの光榮を得て、筆舌に絶する感激に打たれました。茲に聊か當日を顧みて、身に餘る幸福に感謝致します。

私はこの日を一日千秋の思で待ちました。十一月八日縣當局の配慮で特別列車で上京、やがて其の日、天空一碧全くの日本晴で、翌十一日も同樣でした。何たる瑞祥でせう。

私共はこの天日、この聖域に於て皇國の彌榮を壽ぎ、感激の極、嗚咽の中に　聖壽の萬歳を奉唱し奉つたのであります。

式典に於ける近衛總理大臣の嚴かな壽詞に感激したのみならず、殊に總裁宮御代理高松宮殿下の奉祝詞に感泣し、又特に式典に當り、奉祝會に於て賜つた　勅語を拜して恐懼感激措く所を知らなかつたのであります。申す迄もなく式典に於て下し賜つた　勅語には　陛下の世局に對して御軫念あらせらるゝことの深き、又萬邦と共に協和し給はんとする大御心の厚き、唯々恐懼感激の外はありません。

この聖旨の程を拜察すれば、一億の國民協心戮力以て叡慮を安んじ奉らんとの覺悟がひしひしと胸に迫つて參ります。私の如く國民教育に從事する者は、茲に全く覺悟を新にして、兒童の悉くを御國の爲に働く民草たらしむることが今回の光榮と感激に酬ゆる唯一の道だと信じます。

聖紀の聖典に參列の感想

早水金二郎

一、式典日和

十一月十日は、一億の國民赤誠籠めて彌榮を壽ぎまつる、紀元二千六百年の歴史的式典日なり。我長崎縣の代表一行が、着京の際の天候は今にも雨を見んとする空模樣なりしに、翌十日の朝の天候は嬉しくも、前日の密雲一夜に晴れ、秋天高く一點の雲なく、尚翌十一日も夕刻まで同じ天候を續け、曠古の盛典滯りなく終了せられたるは誠に誠に慶祝の極みなりき。

二日とも秋天高く晴れ渡る
式典日和と人は言ひけり

二、悠久無限の皇運を慶祝し奉る

昭代に生を享けた、民一億のはち切れんばかりの歡喜を以て、聖紀の祝典の日を迎ふ。恰もこの日は　今上陛下御即位大禮記念の佳き日に當る。宮城外苑一萬三千坪の式場内はすがすがしく清められ、午前九時前後には、五萬の國民代表が相次で式場に參入着席、午前十時四十八分、場内擴聲機の告知にて總員起立、儀仗隊の喇叭嘹喨と響けば　天皇皇后兩陛下には側近の重臣を供奉せしめられて式場御車寄に着御、御便殿に入らせられ、かくて十一時八分ごろ、軍樂隊の國歌吹奏のうち

に出御、正面の玉座につかせ給ひ、各皇族殿下方御並列、崇高の氣式場に充ち滿ち、近衛首相は式殿南階段を下りて、　兩陛下に對し奉り、これより紀元二千六百年式典を開始致しますと奏上、まづ敬虔なる總員の最敬禮があり、感激籠めて全員「君が代」を奉唱、　兩陛下には立御してこれを御受け遊ばさる。近衛首相は正面階段を昇り、恭しく御前に進み、謹んで赤誠溢れる聖紀の壽詞を奏し奉る。その聲高らかに式場の隅々まで響き渡り、皇國民の喜びをこだまさせたり。

天皇陛下には天機一しほ麗しく拜され、侍從長の奉る勅語書を御手に、玉音朗々有難き勅語を賜はつた。五萬の參列者は一瞬忝なさに心打たれ、寂として頭を垂れ、深き感動に咽ばぬものとてはなかつた。湧くが如き紀元二千六百年頌歌の調べ、其の他の莊重なる奏樂、大內山の綠に融けて行く感激最高潮に達したる時、近衛首相は再び階を下り、正面階段下のマイク前に立つて、双手を擧げて「天皇陛下萬歲」を奉唱、總員歡喜にふるへて萬歲萬歲萬歲と三たび唱和す、時に午前十一時廿五分。近衛首相は、皇禮砲とどろく中に、式殿下にてこれを以て式典を終了致しますと奏上、ここに曠古の盛儀は終り　天皇陛下には近衛首相の御先導にて御便殿に入御、　兩陛下には同十一時三十五分諸員奉送裡に還幸啓遊ばされたり。

日の本の精華宇內に輝けり
いやまし勵め一億の民

三、君臣和樂聖紀の祝典

十一月十一日、五萬の國民代表は聖紀の記念章を胸に定刻入場、　天皇皇后兩陛下には午後一時四十八分宮城發御式場御便殿に入御、高松宮殿下の御先導にて再び式場に出御あらせ給ふ。　龍顏を重ねて奉拜するの光榮に感激おかぬ參列者一同は力强く「君が代」を奉唱、　兩陛下には立御のまま國民代表の赤誠を嘉させ給ふた。高松宮殿下には御前に進ませられ、奉祝詞を奏上遊ばさる、御聲淸らかに會場に響き渡り、次いで外國使臣首席グルー米國大使恭しく御前に參進、聖紀奉祝詞を奏し奉つた。

天皇陛下には侍從長が奉る勅語書を御手に、優渥なる勅語を下賜あらせ給ふ。朗々たる玉音會衆の耳に徹し、ただ有難さに胸迫る。　兩陛下には御椅子に着御、諸員も復席して、ここに君臣和樂の饗宴が開かれ、奉祝舞樂（悠久）、軍樂（大歡喜）並其の他雄渾なる數々の樂調にて、參列者を醉はせ、かくて高松宮殿下には舞樂台中央に進ませ給ひ、御双手を高く「天皇陛下萬歲」を御發聲、前例なき皇族殿下の萬歲御發聲に床しき君民一體の光景を目のあたりにした全員が、感激に咽喉も裂けよと唱和し奉る「萬歲萬歲萬歲」の力强さ、一億の底力もかくやとばかり、ここに諸員最敬禮

近衛會長式殿下に進み、恭しく奉祝會終了の旨を奏上すれば、　兩陛下には御感殊の外に拜され各皇族殿下を供奉せしめられて御便殿に入御遊ばされ、ここに二日にわたる曠古の盛典は滯りなく終り、

兩陛下には同三時五分會場發御還幸啓あらせらる。

此の日參列者一同は記念品として「列聖珠藻」「聖德餘光」を初め、戰線を偲ぶ軍用携帶食の折詰に淸酒の德利、奉祝會マーク入の盃、勝栗干鱈等の副饌を拜領したり。

感激に咽喉も裂けよと唱和せし
君臣和樂万歳の聲

四、帝都市民の歡喜高潮に達す

堰を切つた歡喜のどよめき、帝都の夜を彩る提灯の群、銀座の人波花電車を埋む。
國母陛下と御直宮樣方には二重橋より赤子の提灯行列に應へさせ給ひしとのことを漏れ承る。
奉祝の夜は火の海二重橋
銀座人波花の電車で

五、富士の祝裝

祝典終了の夜帝都は雨、富士は降雪となる。
式典を祝ふ姿や富士の峰
秋空高く雪の盛裝

記念式典奉祝會參列の感激

茂木町長　原口寅吉

嗚呼昭和十五年十一月十日十一日の兩日は、宮城外苑二重橋前廣場に於て、畏くも

天皇皇后兩陛下の行幸行啓を仰ぎ奉り、光輝ある紀元二千六百年記念式典並奉祝會が擧行せられた
る歴史的佳き日である。天佑なるかな、當日は天氣晴朗空に一片の雲もなく秋光麗かなる小春日和
誂へ向の奉祝日和であつた。參列者は全國各層の代表者と友邦獨伊滿華代表者等五萬餘名にして、
特定の人を除く府縣代表は一應日比谷公園に集合して順次馬場先門より參入、何れも威儀を正して
式場定めの位置に着く。曠古の式典開始の時間は刻々に迫りて、嚴肅の氣漲るの時、場内備へ付の
擴聲機は　兩陛下の宮城發御を報じ、儀仗隊の吹奏する敬禮ラッパ嚠喨と鳴り響けば、總員起立、
兩陛下には自動車鹵簿にて側近の重臣を供奉せしめられ、御先着の各皇族殿下近衛首相以下各國務
大臣の奉迎裡に式場御車寄に着御あらせられ、暫く便殿に御休憩の後、陸海軍軍樂隊の國歌吹奏の
中に玉座に着かせ給ふ。參列者一同　兩陛下の尊い御姿を目の邊り拜し奉り、心からなる最敬禮を
行つた後、力强く感激籠めて全員君が代を奉唱せしが、　兩陛下には立御あらせられて之を御受け
遊ばされたのである。實に吾々は感極まつて胸塞がり我知らず流れ出る涙にハンカチをぬらしたの
である。國歌奉唱後、近衛首相は恭しく御前に進み、臣文麿謹ンデ惟ミルニ皇祖國ヲ肇メ統ヲ垂レ
皇孫ヲシテ八州ニ君臨セシメ錫フニ神勅ヲ以テシ、授クルニ神器ヲ以テシタマフ云々と、赤誠溢る
ゝ聖紀の壽詞を奏上せられたが、　天皇陛下には天機一入御麗はしく拜され、畏くも玉音朗々と有
難き勅語を賜つたのである。　至尊の御聲を直接拜聽せる五萬の參列者は餘りの忝なさに寂として
頭を垂れ、深き感動に咽ばぬものとてはなかつた。紀元二千六百年頌歌の調べの餘韻漂ふ中に、近
衛首相發聲の　聖壽萬歳に和し、總員歡喜にふるへて萬歳を三唱し、式は閉ぢられた。

翌十一日も亦同じく、一旦日比谷公園に集合したる後、式場に參入して開式を待つたのである。大空に轟く一發の號砲に依り、　陛下の宮城御出門を知るや一同俄に緊張、肅然として襟を正し、着御を御待ち申上げたのである。やがて　兩陛下には諸員奉迎裡に奉祝會總裁御代理高松宮殿下の御先導にて式場に御出ましになり、近衛首相の開式奏上に依つていよ〳〵慶祝の盛儀は開始され、參列者全員の君が代の齊唱終るや、高松宮殿下は恭しく御前に御進みになり奉祝詞を奏上遊ばされたのであつたが、紀元二千六百年奉祝會總裁代理臣宣仁謹ミテ言ス云々と、其朗々淀みなき御發聲を拜した、吾々はたゞ〳〵何とも言へない感に打たれ目頭が熱くなるのを覺えた。殿下の奉祝詞奏上に次いで、外交團代表としてグルー米國大使の奉祝詞奏上があつて後、又再び勅語を下し賜つた。御雄渾極りなき玉音はひれ伏す吾等の上に颯々として御力强く遍く拜し奉つたのであるが、畏くも一段と御力强く御結びあらせられた御餘韻に、吾々參列者一同は低く頭を垂れ感激の涙に咽んだのである。暫くして開かれた饗宴の主饌副饌は共に前線將兵を偲ぶ野戰料理の折詰にて、壓搾口糧に乾燥肉戰力餅や興亞パン其他荒鷲偲ぶ航空元氣酒航空葡萄酒があり、白磁の德利盃等であつたが、宴半に式殿御前の舞台にて奉祝舞樂「悠久」が演奏せられ、次いで陸海軍軍樂隊に依る奉祝樂、全國學生兒童三千余名の齊唱する奉祝頌歌、二千六百年の唱和等ありて、儀式は最も嚴肅且盛大に進行し、最後に高松宮殿下の御發聲にて　天皇陛下の萬歲を三唱して閉式となつたのである。畏れ多くも　兩陛下と御共に等しく御酒饌を頂き、舞樂を拜見するを得たるのみならず、有難き勅語を直接拜聽する等、吾々の身にとり終生忘るること能はざる光榮と感激であつた。

二日間に亘る此の盛儀に參列して、世界に誇る我が國體の忝なさを今更ながら痛感したのであつた。今や我が國は前古未曾有の大國難に直面し、內外頗る多事多端である。　陛下には夙夜時局を御軫念あらせらるる御由漏れ承る。我等は此光榮此感激を深く肝に銘じ、此後一層聖旨を奉體して國難打開の爲め粉骨碎身臣道實踐に努め、以て大政を翼贊し奉らんことを期する次第である。

式典に參列して

鶴鳴高等女學校長　原田アサ

皇紀二千六百年式典に、本縣代表の一員として、輝く盛儀に參列の光榮に浴しまして、宏大無邊の皇恩を仰ぎ奉り、聖代に生を享けました歡びに、今尙目の當り當日の御模樣を思ひ浮べつゝ、特に感動しました二三の事を申上げる事に致します。

此の曠古の式典の御模樣を一口にて申しますれば、實に壯嚴にして典雅、而も雄大と言ふ言葉に盡きるでありませう。

參列者五萬餘人等しく、たゞ歡喜と感激とに胸躍らせ、今後更に更に御奉公の希望に奮ひ立たれたことゝ思ひます。

十日の日、私達は日比谷公園に一先づ集合致しまして、これより馬場先門より式場へと整然として歩いて行つたのであります。

前も後も禮服に威儀を正した參列者の行列の流れでありまして、而も各人誰もがこの無上の光榮に感激しつゝ緊張した面持を以て、如何にも歩武堂々恰かも今更ながら皇國の有難さを感じ、一歩々々皇國の大地を踏みしめるが如くに、肅然として進み行く樣を眺めました時に、私はあゝこれが我が皇國の前進の姿であると、思はず强く感じたのであります。

我國は二千六百年、はるけくも此の肅然として堂々たる足取りを以つて歩み來り、亦これが皇國日本の未來永劫への渝るなき前進の歩調であると考へまして、大内山の松の色濃き綠を背景に、お濠の水に影をうつしつゝ、菊花香る順路を蜿蜒として進み行く樣を眺めまして、何とも言へぬ感に打たれたのであります。式殿の典雅なこと、參列者一同の肅然たること、見るもの感ずるもの、たゞ總てが莊嚴の極みでありました。

御軍裝凛々しき　天皇陛下、御洋裝の神々しき　皇后陛下　兩陛下を目のあたり拜し得た時の有難さ、餘りの尊さに深く頭を垂れるのみでございました。

玉音朗々と優渥なる御勅語をお下し賜はつた一瞬、滿場たゞ感動の極みでありまして、五萬餘の參列者寂として聲なく、餘りの有難さに胸もつまる思ひでありました。いつしか感涙に目頭が熱くなつて參りまして、近衛首相の天にも徹れと奉唱する　天皇陛下萬歳に唱和致します時には、我知らずポト〳〵涙を流しつゝ万歳を唱へ奉つたのであります。何と言ふ感激何と言ふ有難さでございませう。

十一日の祝典に於きましては、私達六名の婦人代表は縣の方の御好意に依り、前日より一層目近かに　兩陛下の御尊顔を拜し奉ることを得まして、一入感激を深くしたのでございます。此の日式場は前日と變つて五色鮮かな裝ひに變り、十日の式典を莊嚴と申しますれば十一日は實に莊麗とも申す可き感じでありました。

朗々とよどみなく奏上遊ばされる高松宮殿下の奉祝詞はよく拜聽致すことが出來まして、あの御軍裝凛々しき御態度、あの莊重なる御聲を拜しました時には、亦新たな感激に身も締まる思ひでございました。

開宴になりましても、私達は餘りの有難さに卓上の白布包みの神酒食饌を押し戴くのみで、自分一人にて戴くのは餘りに勿体なく、一人にても多く此の餘慶に浴させ度い氣持から、其の儘手をつけず戴いて歸つたのであります。

此の宴半ばに、式殿御前の朱塗りの鮮かなる舞臺にて、奉祝舞樂「悠久」が演奏されたのでありますが、これが如何にも平和そのものと言つた感じでありまして、拜します我々も何となく實に平和な、のびやかな雰圍氣に包まれたのでありますが、畏れ多くも　兩陛下と御共に五萬の代表等しく御酒饌を戴き舞樂を拜します時、實に君臣和樂とも申しませうか、一大家族が和やかに融け合ふが如き有難き氣持に、遂我知らず眸のうるまるのをおぼえたのであります。

この有難い有難いと思ふ氣持のかたはら、私の胸奥から油然として湧き起つて來る氣持がひしひしと感ぜられたのであります。これは私のみならず、參列者一同が感ぜられたことゝ思ひますが、歸りの汽車の中に於きましても、歸つて來ました現在に於きましても、尙一層此の氣持が增して來

るのであります。即ちそれは熱き報國の誓ひであります。全力を盡して働かねば、尙一層、いや驚れるまで御奉公の誠を盡して聖恩に應へ奉らねばと言ふ一念の燃え上つて來るのを禁じ得ないのでありまして、此の感激此の氣持こそ、私の生涯忘るゝことなく、堅持して行き度いと存じて居る次第でございます。

當日咏める駄作三首

天地の神もうけかひ給ふらむ
くまなく晴れし今朝の大空

悠久のみ國のさかえ類なき
今日の盛儀にはへる歡ひ

仰きみるひしりの御前に涙して
明日の誓ひを立てし吾かも

紀元二千六百年聖典參列の感想

平田早苗

一、參列前の感謝

皇國民として紀元二千六百年の聖典を迎ふる歡喜の情に於て變りなかるべきは勿論なり。然れど其實質と分量に至つては、其人により境遇により、大に異なる處あるべきこと亦言ふまでもなし。私は本年一月三日福岡市岩田屋に開催されし紀元二千六百年展覽會を見るに及び、之に對する歡喜の情が忽ちにして一種の感激に變れるを體驗し、百聞の一見に如かざるを痛感せり。私は此感激を更らに私の信仰にまで强化せしめたき見地から縣民代表に選ばれ、曠古の大典に參列するを得るに至れる果報を衷心より感謝しつゝ、大なる希望と期待を以て又となき光榮の日を待望せり。

二、式場に於ける感激

待望の昭和十五年十一月十日午前十時式場に參入す。先づ以て私の眼を奪ひ心を躍らせしは、式殿の中央高く設けられし玉座と之を中心とする典雅燦爛の裝飾にして、式殿越しに近く浮き立つ聖域大内山を拜せし感激こそは到底筆舌の能く盡す處にあらざるなり。此光景に醉へる中に天皇皇后兩陛下臨御あらせ給ひ、麗しき　龍顏を目のあたり仰ぎつゝ君が代を奉唱す。吁々何たる光榮ぞ、私は生來初めて肇國の電氣に觸れし感激を覺えたりき。近衛首相奏上の壽詞に、一層の歡喜と覺悟を新にしたる私共の感激は　天皇陛下玉音朗々優渥なる勅語を下し賜ふに及び、まさに其絶頂に達し、齊唱隊が紀元二千六百年頌歌を歌ひ出すに至つて遂に爆發、參列全員感激の嬉涙にハンカチを絞らざるものなし。斯くて皇禮砲殷々たる中に　兩陛下を奉送申上げ感激の式場を退出す。吁々誰れか生を昭代に享けたる慶幸と日本臣民たる矜恃に感激せざるものぞ。

三、會場に於ける歡喜

十一日午后一時奉祝會場に參着し、各自机上に積み並べられたる御賜の御酒御饌及記念品を前に

して列立せる、光榮の五萬餘人の歡喜や如何、　玉座御座を見守りつゝ臨御を奉待する參列者の至情益々强きを加ふる中に、　兩陛下出御あらせ給ふ。想へば一億國民中吾等五萬有餘の參列者のみ此の殊遇を辱ふし、今日重ねて　龍顏を拜するの光榮に浴す。特に祝宴間　兩陛下御躬ら御酒を酌み御饌を召させられ、參列者一同と御慶びを共にし賜ひ、再び優渥なる勅語を下し賜ふ。聖慮深遠誠に恐懼の至り勿體なさの極みなり。

祝宴中演ぜられたる舞の古典的なる樂の神秘的なる、覺えず神武天皇御創業の昔を偲び、今更ら悠久二千六百年の歴史の神聖と我皇室の尊嚴に打たれずんばあらず。聽て　兩陛下には高松宮殿下の發唱し給ふ萬歳に和する五萬餘人の赤誠を受けさせられ、　龍顏殊の外麗しく宮城へ還御あらせ給ひ、茲に世紀の祝典終了す、吁々何たる盛事ぞや。

四、終了後の所感

百年一遇の聖典に列するを得たる、私の無上の光榮無限の歡喜譬ふるに辭なく、感極つて言ふ處を知らざるなり。只此上は、宜しく此感激を信仰化し、終生肝に銘じ、現聖戰下に此聖典を迎へしめさせられたる嚴肅なる神意を體して、世界に冠絶する我國體精華の宣揚に努め、大政翼贊の實を擧げ、以て至誠臣道實踐を誓はんのみ。

紀元二千六百年奉祝式典に參列して

平田周三

紀元二千六百年の奉祝式典に參列の光榮に浴したる事は一門の譽此の上無之候。殊に莊嚴なる式場に於て、　聖上皇后兩陛下の御玉姿を拜し、聖躬御自ら玉音朗々優渥なる大詔を降し賜ひて、國民の響ふ處を御明示遊ばされたる事は、洵に恐懼感激措く能はざる極に有之、今更皇恩の有難さ筆に盡し難く、只々滅私奉公の念を一層深め、以て皇恩の萬分の一に報ひ奉らんことを堅く期したる次第に有之候。

紀元二千六百年奉祝式典並奉祝會參列感想

深江壽滿雄

千載一遇の紀元二千六百年奉祝盛典に參列し、一家一門子々孫々に到る迄の光榮感激に堪へず。本縣參列者一行四百四十余名、一列車内に一家一族の如き團欒旅行を以て東上す。是れぞ國家の一大要部たる長崎縣を背負ふ非常時日本打開力の合成たるの感湧く。途東海道を過ぐる時、靈峯富士が暗雲に閉され其勇姿を見る事能はず、明日の天氣の程も氣遣はれしも、式典當日は朝來晴天鱗片

の雲さへ無く、正に黎明日本の將來を明示するものの如く、心の底より云ひ知れぬ明朗なる希望に滿さる。

式に參列せる五萬數千の人々は凡べて是れ非常時日本を背負ひ推進の意氣に燃ゆる代表にして、祖國に襲ひかゝる現在並將來の國難を鎧袖一觸の意氣に燃ゆる一大强力なる團結であつた。

天皇皇后兩陛下式場に臨御遊ばさるるや、參列者一同肅然として聲なし、是ぞ祖國の眞姿であり縮圖であり祖國の力の源泉である。此森嚴なる雰圍氣の中に勅語を拜し、祖國に生れたる國民の有難さと皇國の尊嚴さを、今更乍ら身にしみじみと深からしめた。高松宮殿下の奉祝詞御奏上に當り、「臣宣仁」と仰せられし御聲を耳に拜せし時は唯感激、眼底のあつくなるを覺えた。殿下の「天皇兩下萬歳」の御聲に和する奉祝者五萬餘人の心の底より迸り出でし聲は、國威を海外迄も宣揚せし感を與へ、全身の筋骨一時に引締るの感を覺え、益々感激、有難涙を禁じ得なかつた。此氣此感は各自其鄕土に移植し、明治以來侵潤せる西洋思想を追放し、皇國の眞姿を顯現すべき任務を自覺し、以つて國民を率ひ、今日の難局打開に邁進せん事の決意を益々强からしめた。

紀元二千六百年奉祝式典參列の光榮と感激

福田多八

光輝燦然たり、聖紀二千六百年の意義深き盛典に、身は草莽の臣として參列し得た無上の榮光と感激、夫れは只恐懼感激其のもので胸一杯、之は恐らく一生涯に於ける千載一遇の最高榮譽であり、又一大記念であつて、實に聖代に生を享けた生甲斐ある幸福に思を致す時、歡喜更に躍如たるものがある。

最初此の光榮に浴する事の出來やう等とは思はなかつたのに、凡ゆる階級各層から選ばれたので而も參列の往復共に臨時列車の增發、之亦容易に浴する事の出來ない恩惠で、恐らく一生の中絶後であらう。鐵道關係者は云ふまでもない、縣關係引率者各位の心盡しに感謝しない者はなく、榮ある參列の喜びに尙更喜悅に滿されたのであつた。

愈々全國から遙々以上の歡喜と氣持で帝都目指して參集する者實に五萬餘名、空前の盛觀たるを失はない。夫れに日比谷公園から整列して肅々として其の式場たる宮城外苑に繰り込む途上には、此の盛儀を拜せんと參集せる者幾數十萬であつた。軈て定まつた席に着いた。此の時著しく感じたのは五萬餘名の參列者が僅か一時間餘りで何等の滯りも事故もなく秩序整然として着席し得たのは緊張し切つた赤誠の現れでもあらうが、常態とは思はれない程であり、退場の時又同樣であつた一事である。中でも一億の全國民が一入心配したのは、其の日の天候であつたが全く天佑、其の日は一點の雲さへ止めない澄み切つた好天氣、瑞祥滿ち溢れる宮城の松の綠もいと濃く、式殿は悠久二千六百年前の昔を偲ぶ建築に、周圍を飾る模樣も亦典雅な古式で、森嚴壯重の感自ら胸に迫るものがあつた。

參列者は謹嚴と赤誠募る中に、敬虔な態度粛然たる姿で、式殿上を拜すれば、仄かに光る金屏風を御背に　玉座、御座、次第に純眞な精神に立還り、片唾を呑んで晴れの神々しい臨御を御待ち申上ぐる。軈て流れ出る「君が代」の奏樂の音につれて總員起立、威儀を正し寂として聲なく、尊嚴極まりなきを感じ、仰ぎ拜すれば御軍裝凛々しき　天皇陛下、清楚なる御裝ひの　皇后陛下の畏くも御神の如き　龍顏を咫尺に拜し、其の有難さ限りなく自ら頭の下るを覺えた。そして　龍顏いとも御麗しく、玉音朗々優渥なる大詔を賜ひ、國民の響ふところを御明示遊ばされた。最高潮に達した森嚴なる此の一瞬、深く頭を垂れた參列者の胸奥には熱き報國の誓が自ら湧き上るのを禁じ得なかつた。此の決意は一時的のものではない、恒常的永遠的なより新な臣道を完ふせねばならぬ忠誠の誓であつて、「君が代」の奉唱に依つて更らに一種異樣の尊さと偉大な感に打たれ之を强めるのであつた。斯くて近衛首相は鞠躬如として壽詞を奏上する、其の朗々たる音量と引締つた聲音に恍惚たるものがあり、而して聲を限りに大地も搖がす　聖壽萬歲の奉唱に和して、玆に君民一体の我光輝ある國體の有難さが今更の如く全身に湧き出て表現されたのであつた。

榮ある第二日も申分のない祝典日和の好天氣であつた。これは決して偶然の現象として見逃すことは出來ない。畏れ多くも我皇室は天佑を保有し給ふのであつて、其處に或神秘的な神の守りの存在があり、宇宙を支配すること無限、世界に比類なき我獨特の國體であると云ふ信念が湧き出、限りない尊嚴さを思はしめたのであつた。

陛下の出御を奉拜し、場内は再び沈默と謹嚴な態度に立還り、森嚴な雰圍氣に滿され、參列者一同は有難い忝けないと云ふ純眞無垢な氣持に打たれ、胸は込み上げ感涙熱涙止めもあへぬものがあつた。特に仰ぎ奉る高松宮殿下には御軍裝凛々しく、敬虔其のものゝ御態度で、御前に進ませられ奉祝詞を奏上あらせらる。マイクを通じて場内は勿論全國津々浦々まで響き渡る御聲は莊重にして朗々、御英姿颯爽たる御高德を拜して、感激に身は慄ひ呼吸も止る程であつた。

陛下には龍顏いとも御麗しく、神酒食饌を御手づから取らせ給ふを奉拜し、申すも畏き極みであるが、參列者に賜つたくさぐさの御品と同じであつた事を拜承し、誰しも此の重ね重ねの光榮に感泣するのであつた。そして此の榮光豐かなるくさぐさの御品は、皈鄕の上で聖壽の無窮を壽ぎ奉ると共に、廣く頒たんと、いとも鄭重に持ち歸るのであつた。皈鄕後は此の歷史的光榮を家族親族隣友知己に頒つに際し、我國體の尊嚴さと聖慮の深遠を縷々說き、斯る光榮に浴する事の容易でない旨を强調し、益々盡忠報國の誠を捧ぐべきだと特に家族に教訓を與へたのである。

思を遙かに遠く　神武天皇肇國御創業の昔に馳すれば、何たる光榮であり感激であらう、之は只一家一門の光榮のみでなく、廣く鄕黨の榮譽であり、我一億の大日本帝國民は大和民族の高貴な重大使命に向つて更に決意を新にし、世界の新秩序建設に邁進し、平和克服に無限の努力を拂ひ、鴻大無邊の聖恩の萬分の一に應へ奉り、大御心を安んじ奉らなければならぬと深く信ずると共に、此の曠古の盛典を記念し、後世不朽に止めねばならない。思へば此の日の感激は生涯を通じて永久に忘るゝ事の出來ないのであつて、之を深く銘記して子々孫々に至るまで傳へ、以て家門の譽れとする次第である。

爲石村長代理　福丸定之

皇紀二千六百年記念の式典に參列の光榮に浴しまして、只々恐懼に堪へません。大日本帝國の國民であればこそと深く深く思ひ廻らす時、一入の喜びと感謝感激の涙に咽ぶのであります。此の宏大無邊の皇恩に對し奉り、粉骨碎身臣道實踐の誠を盡さねばならむと、神かけて御誓ひ申して居る次第であります。

紀元二千六百年奉祝式典並奉祝會に參列して

藤崎三九郎

悠久にして限りなき、大日本帝國に君臨し給ふ、萬世一系の　天皇陛下には、皇祖皇宗の御聖勅を御繼承遊ばされ、八紘一宇の天業御推行のため、征戰萬里、世界を睥睨しつゝ、陸に海に空に砲煙轟く中に、紀元二千六百年を迎えさせられ給ふたのである。吾等國民此聖代に生を享け、一億臣民一體となりて、此意義深き世紀を奉祝するため、實に昭和十五年十一月十日十一日の兩日、天氣晴朗、一點雲なき宮城外苑に於て、擧行せられたる、奉祝式典並に奉祝會に參列の光榮に浴し、親しく　兩陛下の御親臨の下に萬歲を奉唱し、畏くも御勅語を拜し奉りたることは畏し。

我等一生の光榮として、永久に記念すべき事柄である。皇祖天照大神が、畏くも天孫をして、我豐葦原の瑞穗の國を肇國し賜ひしより、吾等の祖先も亦我國土の何處にか居住して神恩を感謝しつゝ生存して居たる事は空想でない。尙遠く尋ぬれば幾百萬年の大古、地球上に生物の生存し始めたる時より、遠き祖先のある事は是又想像に難からぬ事である。此の時より吾等の祖先は必ず天恩に浴して以て今日に至りたるものである。此間に於て幾多の天變地變に遭遇するも、能く生物生存の法則に從ひて、一定の軌道を辿りつゝ、畏くも人皇第一代　神武天皇の御德化に浴し奉つたのである。以來吾等の祖先は代々御歷代の天皇の御稜威により、如何なる治亂興亡の際にも、常に御德化に浴し、吾等萬民を赤子の如く慈み給ひ、萬民又身命を賭して、各々自己の職責を盡し、　天皇の御大政を翼賛し奉り、開闢以來一度も外國の侮を受けたることなく、國威は隆々海の內外に輝き、以て今日に及べることは、是又光輝ある我二千六百年の歷史に照して明瞭である。今や我國は大東亞新秩序建設の大使命達成の爲め、幾百萬の將士は、陸に海に空に幾多の尊き生命と、幾百億の財貨を犧牲とし、國民亦能く銃後を守り、所謂國家總動員の下に聖戰四年、皇軍の向ふ所敵なく、着々其の目的を達成しつゝありとは言へ、時局は益々擴大し、將に全世界の大戰と展開し、あらゆる大國を相手として戰はねばならぬ、實に國運隆替の岐路である。吾等此國難に處して、身命を賭し一億一心此の重大なる時局を克服し、紀元二千六百年式典に拜し奉りたる勅語を奉體、以て金甌無缺の皇運を翼賛し奉らんことを誓ふものであります。

億兆の心を打つて彈となし
勅のまゝに仕へまつらん

參列感想

藤田敏治

其の日は一點の雲なき日本晴れ、天の惠みの下に、莊嚴なる式典を擧行せらるゝに當り、一億民草の代表として參列の光榮に浴し、　兩陛下の麗はしき御尊影を拜し奉り、玉音そのまゝ奉聽し、又君民席を共にせられ、貴き饌を戴きたる時は、無我無心感慨無量の外なく、苟も三千年來傳統の祖國、大日本帝國の血潮を汲む、吾等の幸福は他國人の夢にだも知らざる處であると思ふ。又此の尊き國體の下に、我等の祖先はあらゆる國難と戰ひ、君國の爲め、直に我身を捧げて來たのである。今にして我々が祖國の急に奉ずることなくば、いつの日か君國に忠誠を盡す秋があるであらうか、我々は今一億擧つて祖國日本のため起たなければならない。その秋は今であると胸底に銘じたのである。

紀元二千六百年奉祝式典參列所感

長崎縣學校營繕技手　藤野米夫

神武天皇建國以來茲に二千六百年を迎へ、皇統連綿として萬世一系の　天皇を戴き、世界に比類なき我が尊嚴なる國體の精華と、光輝ある國史の成跡とは、世界各國の齊しく驚歎渴仰措く能はざる所であります。殊に明治維新以來、我が國運の隆昌發展は未曾有のものあり、今や帝國は世界最强國の一として、御稜威世界に遍く、今亦東亞永遠の平和確立のため、之が聖戰遂行の途上にあり て、國を擧げて斯の大業の完遂に邁進しつゝあるのであります。此の秋に當り、意義極めて深き、紀元二千六百年記念式典を擧行せらるゝに當りて、圖らずも參列の恩命に浴しました事は、無上の光榮でありまして、皇恩に感泣し、恐懼感激して參列致し、一億同胞と共に奉祝申上げた次第であります。

本縣關係參列者は之を七班に編成し、私は第七班副班長として任務に就いたのでありますが、十一月八日特別列車に依つて長崎驛を發車、一路東上し、以來全員肅然として、奉祝の赤誠に滿ち、不自由を意とせず、規律整然として、九日無事東京着、宿所に向ひました。

十一月十日式典當日、各地方關係參列者は豫備集合地なる日比谷公園廣場に向つて各團旗を先頭に押立て集合し、差しもに廣大なる廣場も參列者を以て埋まり、一大壯觀を呈し、軈て各地方別に配置された本部接伴員の先導に依り、整然として式場に參入したのであります。其の沿道には、日比谷公園前より馬場先門電車停留所附近に至る間、奉祝參觀者を以て埋むるが如き壯觀を呈して居つたのであります。

式場は宮城前廣場に設けられ、玉座は紫宸殿風の建築で本殿並兩翼を有し、本殿の天井は特に採光の爲碁子張りと爲し、其の裏面に白紙を貼り、天井裏より電燈を點じ、本殿の前方左右には御具

錦旗を建並ぶ。式場は無蓋、机、椅子を裝置しあり、此の机及之に造り付けの椅子は其の脚を打立て上部板張りにして、縦に一列十六人掛け、一人當り一尺五寸割りとなし、式場の周圍には天幕を張り、紅白幕を張り繞らす。

軈て顯官參殿し、各皇族方御參殿あらせられ、奉祝の號砲を合圖に、國歌奏樂裡に天皇　皇后兩陛下玉歩を進めさせ給ひ臨御あらせらる。參列者一同謹みて奉迎申上げ、全員感激の裡に式典を執行せらる。軈て內閣總理大臣公爵近衛文麿閣下謹みて壽詞を奏上し奉りたるに、畏くも　天皇陛下は優渥なる勅語を給ひ、一同恐懼感激、措く能はざる所であります。無事式典を終了し、　天皇　皇后兩陛下には、一同の奉送裡に、恙なく入御在らせらる。續いて各皇族方御退下あらせられ、一同退場し、本部輸送班の指揮統率に依る車輛にて各宿舍に向ひました。

十一日祝典當日、前日同樣の盛觀にして、本日特に感じた事は參列全員の參入統制振りは正に列車の運轉の如く、秩序整然たる統制振りであつたことです。軈て國歌奏樂、全員奉迎裡に、天皇　皇后兩陛下出御し給ひ、全員感激の裡に、祝典を執行せらる。軈て紀元二千六百年奉祝會總裁の宮殿下並在本邦外國使臣首席奉祝詞を奏上し奉りたるに、　天皇陛下には再び優渥なる勅語を給ひ、一同恐懼感激措く能はざると共に、上み　天皇陛下の御德の廣大無邊普く御稜威を仰ぎ奉ると共に皇室の御榮へを壽ぎ奉る次第であります。又開宴に入りては、下も萬民と共に酒肴を採らせ給ひ、大和の範を垂れ給ひました事は洵に有難き極みでありまして、自から熱涙の湧出づるを禁ずる事が出來なかつたのであります。斯く致しまして、紀元二千六百年式典並祝典を無事、而も有意義に終了せられました事は洵に慶祝し奉る次第であります。

今回の式典に參列して感じました事は、政府の吾々國民代表と云ふ意味に於ける參列者に對する態度及措置の眞に徹底せるを痛感した事であります。即ち最善の努力と實行に依つて、言外の大いなる意義の存する所を深く考へさせられたのであります。

今や帝國は、東亞の恒久的平和確立の爲に、聖戰を敢行しつゝあるのでありまして、既に過去三ヶ年の日子と多くの人命と資材を失つて居るのでありますが、猶今後斯の聖戰が幾年續くとも、又は第三國の如何なる壓迫があらうとも、儼然斷乎として、聖戰の目的完遂を要するのであります。刻下我が國が最も困憊せる點は資材の不足であつて、之は其の中最も重要資材たる鐵、石炭、石油等が、從來其の多くを外國より輸入し、之に依つて需給の均衡を保つて居つたのが、最近漸く外國よりの輸入は殆ど杜絶の狀態となり、緊急且つ絶對的に自主的生產力の維持擴充を圖るを要する事となつたのであります。斯る急迫せる情勢に於て、吾々全國民が愈々責任の重大なるに徹底し、時艱を克服し、以て國難に報じ、皇謨を翼贊し奉る可く、全國民が蹶起し、新體制下に於て、各々職域奉公の誠を致し、日本精神を發揚し、以て各部門に於ける業績を顯現し、以て聖戰の目的達成上遺憾なからしむべきことを痛感致した次第であります。

大日本傷痍軍人會長崎縣支部
北高來郡分會長　藤　原　貞

此の度圖らずも、紀元二千六百年の御盛典に、私の如き者が御召しの光榮に浴しました事は、傷痍軍人であればこそと只々感激と感謝の念に搏たれた事で有りました。

十日午前七時前に宿を出て、市電にて日比谷に行き、其處に集合し、式典場に參りましたが、廣大千萬な會場が人で埋まつて居る。我々着席の處に杉の板が在つて、腰掛も其樣で、其板の上に物が置れる樣に成つて居る。かうして時の來るのを待つて居つたのであります。私として感じました事は、式場に於て、口々に日本は神國ぢやナア、生きた神樣で在らせられるナア、　兩陛下も嘸々御嬉しい事であらせられる事であらうナアと曰ふ聲が聞えた事であります。

勅語は私共の所ではどのやうな事を仰せられて居るかはわかりませぬが、今勅語が下つて居るので在ると曰ふ事と、其玉音の音波が私の耳朶を打つ感じははつきり受ける事が出來まして、直かに天皇陛下の玉音の響きを臣の一人として頂くと云ふ感激に打たれたのであります。縣民代表として又傷痍軍人關係の一人として召され、斯樣に　天皇陛下が勿體はせられる其御前に、御民の一人として立たせて頂くことは眞に傷痍軍人の五訓の方面の御用に立たせて頂かねばならぬ今日、之れより外にないと信じて居る、御奉公に專念させて頂かうと更に覺悟を新にさせられたのを深く感じたのであります。

夫れから萬歲も　陛下に直かに申上げる、之迄も萬歲は唱へてゐた。夫れでも届く譯ではあるが、此日は直かに、殊に第二日目にも同じ場所で、奉祝の宴が開かれた譯で、高松宮樣が祝詞を御奏上、臣宣仁と力强く而かも朗々御讀上げ遊ばされた時は、一層感極つて涙に咽びました。此日天氣も前日と同じく、御出ましは午後でありましたが、我々の宿を出ましたのは午前で、前后の時間は此日の方が長かつたのであります。此日は前日の森嚴な神々しさの限りとは模樣が變り、一種打らくつろいだ氣持で、之れは後で拜承した事で在りますが、同じで在つた由であります。御料理も其儘持つて飯り、關係の人々と頂だかうかとも考へたので在りましたが、偖てさて　陛下の御前で頂くのが本當であると考へ、盃を擧げて頂いたのであります。陛下の御召上る御前で夫れを頂き、夫れを　陛下が見て居て下さる、誠に命は食なりと云ふが、一切の源を斯樣な有難い次第柄で頂く事の出來るのは、我國の有難い處であります。日本の國の本當の力が茲から湧き出てゐるので在る事と、何とも云ひ樣のない感激を覺えたのであります。

舞樂も又古雅で單純で莊重で氣品の高いもので、夫れが　陛下の御前で奏せられるのを皆一同に拜觀する。大演習の際、其他の場合の陪食と云ふ事はあつても、斯樣な國民各階層の人々が會すると云ふ事は有り得ない。陸海軍の奏樂も共に聞かせて頂いたのであるが、共々と云ふ事に特殊の感じを覺へたのであります。

今一つ私の特に有難く感じましたのは、首相や高松宮樣が御前に出ていらつしやらない時、誰方も何もしていらつしやらない時、何も式場に行はれて居ない時、さう云ふ時、兩日共に一度ならず

あつたのでありますが、さう云ふ申さば空白の時間、我々は　陛下を拜み奉り、　陛下は我々を顧はす、只夫れ丈けが出來て居る、其時こそ殊に有難かつた。　陛下は國民よ國民よと仰せ下さつて居られる樣で、何んとも表現しやうがない。直かにと云ふ感じを強く強く頂いたのであります。斯樣に十一日も相濟み、心から有難く勿体なく、皆口を開けば其事を申した次第でありました。此曠古の御盛典に浴しまして、終生忘れる事の出來ない感激であります。申す迄もない肇國の精神を顯現し、時艱克服に邁進し、一日も早く　陛下の宸襟を安んじ奉らんとの決意を眉宇に浮べつゝ退散した次第でありました。

紀元二千六百年記念式典に參列して

佐世保中學校長　堀口太一

此の度紀元二千六百年記念式典並に奉祝會に參列するの光榮に浴しましたことは、一家一門の最大の榮譽であり、私の終生忘れることの出來ない無上の歡喜であります。

時は　今上陛下御即位の大禮の行はせられた十一月十日と翌十一日、所は聖域宮城前の廣場、天皇陛下の神々しい御英姿、　皇后陛下の御仁慈に富ませ給ふ御姿を拜し、剩へ勅語を戴いた此の喜、日本臣民として何物も之に加ふるものはありません。

前日來曇り勝ちで或は雨かと危ぶまれた天候も、此の兩日は一點の雲影だになく、全くの日本晴であり、所謂　行幸日和であつたのに、第二日の晩から雨が降り出す等、どこ迄我が皇國には天佑神助があるかと泌々と考へさせられたのであります。併し先人の訓にもある通り、「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」で、只拱手天佑を待つて居てはならぬ。審さに國體の本義に徹し、深く自らを省み、臣道實踐に遺憾なきを期せねばならぬと痛感したのであります。

式典は、嚴肅なる君が代の奏樂裡に、　兩陛下を御迎へ致し、五萬有餘の參列者全員胸打ち震はせながら、而も心の底から君が代を奉唱致しました。近衛首相の「臣等生ヲ昭代ニ享ケ」と云ふ壽詞、實に感涙のはふり落つるを禁ずることが出來ませんでした。勅語は、玉座から百米以上も離れて居る私にも、かすかに玉音を拜することが出來、力强く「期セヨ」と仰せられて漸く我に歸つたやうな次第であります。

我ガ惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚シ以テ人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアランコトヲ期セヨ

と仰せられ、又第二日の勅語には、

平和ノ日ナラズシテ恢復セラレ萬邦ト俱ニ其ノ慶ニ賴ランコトヲ望ム

と宣らせ給ふた大御心、何といふ有難いことでせう。私共は皇恩の宏大無邊なるを拜し、今更ながら只々感泣の外ありません。

第二日の奉祝會には、秩父總裁宮殿下の御代理として高松宮殿下が大役を勤めさせ給ひ、一天萬乘の　天皇陛下に對し奉り、一億臣民を御代表遊ばされて奉祝詞を奏上させられ、　天皇陛下萬歲の音頭をとらせ給うたのは、誠に畏き極みに存じます。此の日は實に我が國ならでは見られない君

民和樂の奉祝會であり、全國津々浦々から馳せ參じた全國民の代表は、心から　聖壽の無窮を御祈り申し上げたのであります。當日賜はつた勅語に、

朝野ノ代表者ト歡ヲ罄クシ樂ヲ偕ニスルハ朕ノ深ク懌フ所ナリ

と仰せられ、畏れ多くも、私共參列者と同樣の酒饌を召させ給ふたと承りましては、臣民と苦樂を共にせさせらるる御聖慮、否先憂後樂を旨とせさせ給ふ大御心を拜察して、ただただ感激に堪へない次第であります。

肇國悠遠にして皇統一系、義は君臣にして情は猶父子の如き、尊嚴にして親和なる此の皇御國に、而も此の聖代に生を享けたる私共は、彼の萬葉歌人の「御民われ生ける驗あり」の歌は、さながら、私共の現在の仕合はせを歌つて吳れたもののやうに切實に感じたのであります。

私はこの曠古の盛典に列して、二千六百年前の　神武天皇御創業の御辛苦を偲び奉り、八紘一宇の大詔を肝銘し、　陛下の聖諭を奉體して、一意職分に恪循し、以て　大御心の萬一にも對へ奉らなければならぬと、强く覺悟を固めたのであります。

紀元二千六百年奉祝會參列者感想

西彼杵郡高濱村長　本田伊勢松

曠古の御大典、紀元二千六百年奉祝式典のその日、十一月十日は秋風なごやかに靡いて洵に御大典の行はせらるゝに相應しい天候の中に、宮城外苑の式場には全國より集つた代表五萬有餘の人々が、晴れがましく、肅然として整列してゐる中に、私もその一人として、曾つて夢想だにする事の出來なかつた、今回の光榮に感激しつゝ、　陛下の出御をお待ち申上ぐる。やがて莊重なる「君が代」の奏樂流れて、はつと緊張する裡に、　天皇陛下　皇后陛下には出御あらせられました。最敬禮の後、恭しくはるか前方を見奉れば、畏し　天皇陛下には凛々しき御軍裝を召され、　皇后陛下には御すがすがしき御洋裝にて玉座御座に着御遊ばされました。　兩陛下の御神々しさ、あまりの尊さに、我等一億國民の父母として仰ぎ奉るには、あまりに畏れ多い次第であると感じ、今ぞ御尊體の御前に御召によつて咫尺してゐる光榮を意識して、思はず感激に目頭が熱するのでありました

次いで近衛總理大臣が御前に參進して、壽詞を奏上し奉れば、　天皇陛下には玉音朗々と勅語を賜ふ、その神聖崇嚴なる光景はたうてい言葉を以て表現し得ないのであります。悠久二千六百年の皇統、天照大神より一直線の御子孫であらせられる　天皇陛下を戴く國體、かゝる國體の有難さ、日本人として生を享けたるものゝ歡喜は申すまでもありませぬが、このときの光景を見奉つて、更に更に確つかりと腦髓に刻まれたのであります。

翌十一日も祝福された好天氣でありました。この日の奉祝會には、參列者に對して、御食饌を賜はりました。畏くも　天皇皇后兩陛下には前日よりも更に長時間臨御遊ばされ、約一時間十分間に亘らせられましたが、その間に參列者一同と御共に御食饌をとらせ給ひました事はたゞたゞ畏き極みで御座いました。日常側近に奉仕する方や高位高官の方々ならばいざ知らず、我々草莽の者が、

いかに多數同列とは申しながら、　陛下より御陪食を賜りました事は洵に破天荒の光榮で御座いませう。

かくして君臣和樂の裡に、古式の御舞「浦安」を拜觀し、やがて高松宮殿下には御祝詞を奏上遊ばされ、　陛下より再び勅語を下し賜り、次いで高松宮樣の御發聲に從つて、天地も裂けよとばかりに、天皇陛下の萬歲を唱和し奉つたのでありますが、瞬間無我夢中たゞ一すぢに　聖上の萬歲皇室の萬歲を祈り拜むのでありました。

私は一村長であるが故に、曠古の大典紀元二千六百年奉祝式典に、榮えある縣民代表として參列の光榮に浴したのでありますが、畏くも聖恩を一村吏の身にまで垂れ給ふを憶ふとき、餘りのかたじけなさにたゞ感泣するのみであります。私はこの榮譽を子孫に傳ふると共に、機會ある毎に、謹んで村民に披露し、以て聖恩の廣大無邊なるを相傳へたいと念じて居ります。

聖儀參列の光榮に浴して

瀨戸町長　本田榮松

光輝ある紀元二千六百年の佳き年を壽ぎ奉るため、誠心こめて整へられた、宮城外苑大式場に於て、意義深き吉辰十一月十日、曠古の式典を擧げられ、翌十一日又空前の奉祝會を催され、不肖町民を代表して五萬五千餘の參列者の端に加へられ、此の嚴肅壯大なる歷史的聖典に列するの光榮に浴しましたのは、生涯に忘れることの出來ない感激の極みであります。

此日秋空晴れ渡り、瑞氣帝都に滿ち、一億蒼生の擧つて抃舞雀躍奉賀の赤誠を捧げるに相應しい絕好の日和である。　天皇皇后兩陛下には天機並御機嫌いとも御麗はしく、親しく民草の奉壽を受けさせ給ひ、剩へ玉音朗々優渥なる大詔を賜はりて、國民の嚮ふべきところを明らかにせさせ給ふ、實に君民一體の慶典盛觀であります。微臣にして畏くも　龍顏を拜し、　玉體のいよいよ御壯んなるを目のあたり仰ぎて、恐懼感激措くところを知らず、今更ながら皇恩の宏大無邊なるを切々感佩し、御民われ生けるしるしありの歡びと勿體なさに心をどり感涙にむせびながら、高らかに　聖壽の萬歲を頌し奉りましたが、尙遠く想を　神武天皇の御創業に馳せ、悠久連綿の國史の成跡と世界に冠絕する國體の精華を慶祝し奉ると共に、時局愈々重大の秋、八紘一宇の國是を貫徹せんがため、一億一心大政翼贊の臣道實踐を深く肝に銘じ、ますます職域奉公に全力を傾け、銃後自治の完璧を期して、一路邁進粉骨碎身の誠を效すべきことを固く神明に御誓ひ申上げました。

奉祝式典參列記

鄕社橫瀨神社社司　本田多聞

み民吾れ生ける驗あり天地の榮ゆるときにあへらく思へは　犬養海岡麿

曠古の式典に參列の光榮に浴した私は幾度か此歌を繰返した。世紀の感激歡喜は此歌以上の表現

は出來ない。輝かしき皇紀二千六百年を迎えた一億國民凡ての氣持ちも此歌に言ひ盡されてゐる。參列々車長途の旅に一向に疲れも感じぬ程の歡びで一杯だ。富士驛を過ぐる頃、神代ゆかけて千古の雪を戴く不二の靈峰を仰いだが雲低くして其の靈容に接するを得ない。私共は明日に迫る式典の天氣を憂へた、明日の聖儀が雨だつたら……しかし其の不安は一掃された、十日は晴朗一點の雲もない。

年々に天長節の日和かな

の句がフト思ひ起されて、今更ながら神國日本の神秘が沁々と感じられた。豫定の參集場たる日比谷公園に、入場を俟つ各縣代表五萬餘人の禮裝の胸には、何れも綠色の參列章がつけられ、歡喜に溢れる許りの晨である。張り廻らされた青白二色の幔幕、樹て竝べられたる大小の旌旗、塵一つなく掃き清められたる、宮城外苑の大廣場に敷きつめられた玉砂利の音も一層吾等の敬虔の念をそゝる。壯麗なる寢殿作りの式殿を遙かに仰げば、懸け廻らされたる御幌、菊花御紋章の紫の幕、中央四曲雙の金屏風を御背に、玉座が拜される。時に十時四十八分儀仗兵の喇叭の音が響く、一瞬吾等の心は引き締められた。軈て十一時十分、君が代吹奏裡に　皇后陛下より入御、今こそ現御神と大八洲治食す我が　大君を正面に拜し奉る、吾等の心は感激に燃ゆるのみ。

大君は神にし坐せは雨雲の雷の上にいほりせるかも

大君は神に坐し坐す大君は神に坐し坐す尊きろかも

私は心の內で此歌を繰り返しつゝ、心行く許り君が代を奉唱した。正面八段の階を靜かな足取りで、　陛下の御前に參進した近衛首相の莊重なる壽詞は、一語より一語と力强く吾等の耳朶に響く、一億の民の眞心を代表した言葉である、終つて玉音朗々として勅語を賜ふ、森嚴なる一瞬、吾等は唯忝なさで一杯である。ソヨ吹く風にも心を靜めて、玉音を聽き漏らさじと息をつめた、感涙が止めどなく溢れる。御叡慮安く思召せ、草莽の微臣誓つて大御心に應へ奉るべしと、報國の丹心自ら湧き出るを禁じ得ない。二千六百年のそのかみ　神武天皇の御即位式に當り、天種子命が群臣に代り天神の壽詞を奏したと古典にあるが、その大古と現代とを結ぶ悠久二千六百年の一貫した歷史の流れを憶ふ時、私等の心は感激におのゝく許りである。

吾を吾としろしめすかや大君の玉のみ聲のかゝる嬉しさ

と詠じて、闕下にひれ伏した高山彥九郎の日本人としての熱情が思ひ出される。近衛首相の發聲天皇陛下萬歲の奉唱、六萬人の心否一億民の心は一つに溶け合つて、津々浦々四海をどよもし天地に響いた事であらう。吾等の目頭は熱くなつた、一君萬民君民一体の情誼麗しき國體を今更乍ら讃美して止まぬ。二千六百年肇國の古も、吾等の祖先は　皇祖の御前に此の歡喜の聲を擧げて、瑞穗の國の彌榮を高らかに唱和した事であつたらう。殷々たる皇禮砲の轟く中を、一群の小鳥は此の瑞祥を壽ぐものゝ如く宮城の空をかけ、天には一點の雲も無い、感激の內に十一日を迎えた。賜つた式典記念章を佩用して肅々として坂下門より參入する。式場は昨日の裝を一變し、式殿前を飾る多彩な五色旗、紅白の幔幕に美しい朱塗の勾欄を輝かせた典雅な奉祝舞樂の舞台が式殿の眞正面に設けられて、參列者のための白木の卓上には、奉祝會からの記念品や酒饌が備へられてある。小春日

和のやうな温い陽射しが燦々と輝くうち、午後一時四十八分、宮城御出門、再度の臨御を仰ぎ奉つた。奉祝會總裁宮殿下御代理高松宮殿下のお若い清々しき凛たる奉祝詞奏上のお言葉が吾等の耳朶に響く。臣宣仁謹ミテ言ス……私はハツトした。　陛下の御弟の宮様ながら、我國では　上御一人であらせられる　陛下の御前では、高松宮様も御臣下に坐すのだ。君臣の分明らかに定つてゐるのが我帝國の國體である。感激の涙が流れる。再度の勅語を賜はる、御雄渾極りなき玉音はひれ伏す吾等には力強く拜された。陽光燦たる野天の饗宴は、畏くも　兩陛下を拜して開かれた。主饌も前線將兵を偲ぶ野戰料理、畏くも　兩陛下の前に奉祝の盃を擧ぐる光榮に感泣しない者は無い。古典的な悠久の舞樂が始められた。君民和樂の境地、唯感激の念で一杯だ。允文允武御壯年盛りの聖天子を戴き奉り、陸の秩父宮様、海の高松宮様、又陸の三笠宮様を仰ぎ奉り、二千六百年の輝しき聖代にあへる吾等日本國民は仕合せだ、有難い事である。私共は榮えある此の式典に列し、一層御奉公の實を擧げて聖旨に應へ奉り、八紘一宇の肇國の大理想を顯現して　皇祖皇宗の御遺德に酬い奉らねばならぬと確く心に誓つた。

紀元二千六百年式典並奉祝會に參列して

大正村長　本田文雄

十一月十日十一日の兩日　天皇皇后兩陛下の行幸行啓を仰ぎ、紀元二千六百年式典並に奉祝會が宮城外苑に於て擧行されると云ふ案内狀を、内閣總理大臣公爵近衛文麿閣下から戴いた其の一瞬、感謝感激に心臓が高鳴り、目頭が熱くなつた。そして公僕たる現實にある我が身の幸福さと喜びを、泌々と感じさせられ、過分の光榮、一家一門の譽だ、是が非でも參列の光榮に浴させていたゞきたいと云ふ氣が反射的に脳裡に浮んで來た。愈々樂しき日は到來した。長崎縣參列者五百餘名は、西尾事務官統率の下に、八日午后四時十五分長崎驛發、感激を胸に秘めて車中の人となり、式典列車は汽笛一聲黒煙を殘して晴の壯途へついた。車中懇切なる縣係員の慈母の樣な御芳情に浴しつゝ、九日午后七時半頃憧れの帝都へ着いた。明くれば十日だ。日本晴の上天氣である。日比谷公園に集合、隊伍を整へて、青地に白の長崎縣と染めぬいた小幟を先頭に、肅々として馬場先門より入場、天を摩する綠門、色とりどりの菊の植込、崇高の感に打たれつゝ式場定席へ着いた。正面中央に木の香も新らしい寢殿造りの式殿に連なり、大矢幕萬歳旗のはためき、一入皇運の彌榮を想はしめ、遙か大内山の松の綠濃くはえて　聖壽を壽ぐやに見える。五萬餘の參列者は息詰る緊張の面持である。午前十時半、君が代奏樂裡に　兩陛下は式殿中央の金屏風を背に玉座に着御、颯爽たる御英姿を拜し奉らうとして、項垂れた全員は君か代を奉唱、實に一億一心誠心の迸りである。大内山に木靈して老松之に對へるやに見え、莊重の雰圍氣は式場に漲る。近衛首相の壽詞はマイクを通じてひしひしと胸に迫るものがあり感極つた。玉音朗々と勅語を賜ふ。皇恩の宏大無邊なる、森々として森嚴の氣式場に溢れ、身は硬直して、止めどもなく感激の涙は頰を傳ふて流れる。嗚呼何たるシーンぞや。之こそ我等日本人のみ感得し得る最大の光榮と感激であらう。奉唱隊の齊唱する紀元二千

六百年頌歌は肇國精神を振起せしめ、思はず拳せしめ、彌が上にも式典の意義を深めた。近衛首相の發聲に和して、震天動地の熱烈なる至誠を込めた萬歳の聲は地軸を搖がすかと思はれた。君が代奏樂裡に還御。意義深き式典の一日を終へた。

十一日奉祝會の日、より良き秋晴れの天氣である。政務御多端の折柄　玉體いとも御健かに渡らせられて、今日の佳き日に連日の行幸啓遊ばされ、其の光榮に浴する參列者は勿論、一億國民の光榮である。此感激は筆舌の盡す所でない。只勿体ないと云ふ外はないが、それさへに口にする事は出來ない。靜寂を破つて奉祝會總裁宮御名代高松宮殿下の奉祝詞奏上、御健康其ものゝ如き御聲は朗々切々としてマイクを通じ、五萬餘の參列者をして襟を正さしめた。在邦外國使臣主席の祝詞奏上は現下の混沌たる國際情勢を調整するやに領かれた。愈々有史以來の家族的國家の一大祝宴開始である。紀元二千六百年奉祝舞樂、大歡喜、頌歌行進曲、奉祝讃歌、吹奏樂の妙なるリズムは大內山に吸ひ込まれて、古今未曾有の大奉祝典の大繪卷を展開して、奉祝氣分は滿場に溢れ、聖壽萬歳皇運無窮國運隆盛の歡喜こもる祝盃は秋の陽光を浴び、記念品に野戰料理の折詰に、歡喜と感激に慄えて見入るのみである。三千有餘の全國學生生徒代表の奉祝國民歌は高らかに場內に響き渡り、實に歡喜と興奮の坩堝と化した。畏くも高松宮殿下のお元氣な力强き萬歳の御聲に、五萬有餘の全身全靈より迸る萬歳の聲は澄み渡つた秋空に轟き、感奮興起歡喜莊重の渦は一君萬民家族國家の實態を具現して肇國精神を昂揚し、全員起立、君が代奏樂裡に入御。儀仗隊の吹奏する嘹喨たる君が代の喇叭は皇運の隆盛と國運の進展を讃ふ、感激胸に迫り自ら低頭した。

回顧すれば昭和三年十一月、所を同じくして在鄕軍人を御親閲の光榮に浴せしに、再び斯る盛儀に列するの光榮に浴して、聖代に生を享けし身の幸福に熟々感激を新にし、公僕として與へられし職分の重大なるを痛感し、職域奉公の誠を竭さん事を堅く誓ふ心の切實さを感じた。聖戰茲に四ヶ年、空に海に將又陸に、赫々たる戰果を收めつゝありとは云へ、頑迷なる蔣政權は依然として英米依存を楯に抗戰を續け、世界情勢は混沌として暗雲低迷し、世界大動亂の萌刻々として迫るやに想ふ秋、偸安を許さず、日本民族の眞に自覺興起、重大時局に對處し、大御心を安んじ奉るべきである。興亡の歴史を持つ外國のそれに比し、我が國の歴史は興隆伸展のみある歴史である。然も淵源する所遠く神代に存する。之を想ふ時國體の尊さが感得され、日本國民の持つ使命の重大性が領かれる。躍進日本の姿、想ふだに胸が高鳴りする。曠古の盛典に浴し、茲に感激を新にし、益々肇國精神を顯揚し、聖旨を奉體して臣道實踐、以て大政翼賛の實を擧げ、大御心を安んじ奉らん事を堅く心に期する次第である。

盛典參列の感想

本土德衛

紀元二千六百年の式典に參列の御案內狀を拜戴し、恐懼感激の極み、眞耶夢耶實に穩かならず、而して八十四歳の高齡、健康も常態にあらず、隨つて長途多數集會の場所に參加し、万一事故のた

め聖場を汚し、縣團体同僚に煩累を及ぼすことを憂慮、一抹の不安を感じたるも、千載一遇の聖典に列するは空前絶後の光榮たるを思ひ、萬難を排して決意參列、首尾能く光榮を完ふせしは天祐なり。

參列後の感想

地方農林技師　前田將

紀元二千六百年の式典奉祝會に參列の光榮に浴し、十日十一日に亘る御盛儀に參列し、其會場の整然莊嚴なる施設、和氣靄然の間に親しく　龍顏を拜し奉り、其上優渥なる勅語御饌を賜はる、寔に皇恩の宏大無邊なる、只だ感激の涙に咽ぶの外申し樣は御座いません、如斯は我が國体の精華の致すところ、微力なりと雖も率先國威の發揚に献身的に努力し、一層人格を尊重し、　天恩の萬分の一に應へ奉らむこと庶幾ふ次第である。

皇紀二千六百年の曠古の盛典に參列の光榮を賜はりました事は、私一生の又となき光榮でありますと共に、家門の限りなき名譽でありまして、洵に感謝感激の極みでありました。

聖代の有難さ、唯々君恩の萬分の一に酬い奉らむことを深く心に誓ひました。

大君の臨み給へは尊さに唯感激の時そ移れり
玉音を親しく拜し我は唯あすのつとめを誓ひけるかな

萬歳の聲大庭にこたまして鳩のむれとぶ式典の空
畏くも君出てましゝ祝典に今ぞ祈らむとはの榮えを
奉祝の御宴の庭に舞樂映へ壽ぐ御代ぞはてなかるらむ

長崎市桶屋町　正木照子

輝しき皇紀二千六百年の御祝典並に奉祝會に參列致します事を御許し頂きました事は、人世に於て再び得難き光榮と深く感謝致しながら、時刻を待つて、各方面の方々と御式場へ參列致しました處、實に之迄に拜見致しました事の無き御祝典の莊嚴なる御裝飾等に驚愕いたしました。軈て御式が夫々始まりますと君が代の奏樂裡に、　兩陛下出御あらせられ、暫くの後　天皇陛下の玉音玲朗なる御聲にて、世に有難き優渥なる勅語を賜はる。其の御仁慈は最も民草を一子の如く御憐み賜はる御叡旨に外ならず、此時恐懼感激の念で胸一杯となり、何時しか瞼が熱して涙の滲み出るを禁じ得なかつたのでありました。私は此有難き御國に生れ、此有難き御代に廻り逢はさせて頂きました事を此の上も無き喜びとし、皇恩の廣大無邊なるに感奮興起し、譬へ身は老い、体力は衰ふるとも、益々報國の赤誠を捧げて、臣道實踐を誓ひ、永久に皇室の彌榮を御祈り申すと共に、國家の基礎益々堅く、隆昌に赴く樣にと念願して已みません。

皇紀二千六百年記念式典前の一瞬時

縣立長崎圖書館長　増田廉吉

前夜來氣遣はれた天氣はガラリと晴れ渡り、朝來一入の寒さを加へた。空は愈々高く際限もなく擴がつて見える。

今日比谷公園内に集まつた地方參列者の顏は何れも一種云ひ知れぬ感激と昂奮とに光つてゐる。未だ見ぬものを見る喜び、未だ嘗て經驗しないものを經驗せんとするものの好奇心、それと今一つには何と云ふこともなく尊い嚴肅なものの前に進み出る時の衝動（ナーバル、インバール）と云つたやうなもの、それ等が一種鈍調な空氣となつて、凡てのものに壓しかゝつて來るやうな。

愈々定刻となつて式場に向ふ吾々の足どりは鈍くはあるが、嘗てなく强く輕い。和田倉門前、茲には凡てが古代的な裝飾、金銀の鋒芒を閃めかした大小の錦旗、日月星と型とつた大小の萬歲旗が兩側に立ち並んで、重くゆるやかに動いてゐる。今日を奉祝の大門は見あげるやうな杉葉のアーチその基台には今を盛りの菊花が植ゑ付られ、そのまた前方中央には、古代の遺物そのまゝのやうな篝火の台が高く大きく設けられてゐる。

ここより二重橋前まで數十町、要所要所にテントが設けられて、白い腕章をつけた係員が右方左方に忙しさうに急ぎ歩で通る。

その間を式場に運ばれる各國よりの代表が列をなして、左よりするもの右よりするもの、前方より進み出るもの、後方より押し出るものと云つたやうに、恰かも長蛇のやうに、而もそれがうねりうねつて一種の美はしい曲線をなして見える。

暫時目をつぶつてゐると、其所には世のあらゆる高位高官、我が世の戰史を物語るやうな老將軍、陸海軍の諸將星、また我が世の体制を司る各大臣、政治家、外交官、其所には大禮服、エンビ服、此所にはフロック、モーニングが列をなしてゐるかと思ふと、一方にはあらゆる種類の勳功を物語る勳章そのものが列をなしてゐるやうにも見える。また一方にはあらゆる大銀行大會社を代表する實業界の大立物、徹頭徹尾學理を以て固められたやうな大學教授、諸學者研究家、またあらゆる財力そのもの、智力そのものと云つたやうなものが動いて行く。またその間には來るべき時代に「我れこそ樂壇の王者たらん」と云つたやうな希望に滿ち滿ちたやうな音樂學校の男女學生、それに全國各地學校から選ばれた奉祝歌の歌手等は殊に若々しく元氣に通る。

此等の凡ては今の世の世相、日本と云ふ一つの國体のあらゆる要素、それが今目の前に繪卷のやうに展開されて動きつゝあるのである。この動きこそが即ちとりも直さず日本國体そのものであると云つたやうな氣がする。

軈てこれ等の行列は吸ひ込まれるやうに愈々式場に納められる。遙かに正面には紫宸殿造りの式殿が設けられ、周圍には數十町となく幔幕が張り廻はされて、其間粗雜なものではあるが新たらしく設けられたテーブルとベンチが數限りもなく多少の匂配をなして並んでゐる。

場内は何んと云ふことなく張り切れるやうな緊張した雰圍氣、歡喜に充ち〳〵た、それでゐて身動きも出來ないと云つたやうな一種の逼迫に全部がつゝまれてゐるやうな、そうした瞬間、突如として式場整理係の一方から、マイクを通じた聲で

「間もなく　兩陛下宮城御出門と承ります」

この聲が式場一杯に響き渡つた時、また何處からともなく大空を搖がすやうな祝砲が轟いて來た。群衆は同時に一齊に、それは決して言葉で云ひ表はすことの出來ない、また決してそんな性質のものでなく、或る高度の電氣にでも觸れたものゝやうな緊張と、嚴肅と、それでゐて限りなく輝き渡るやうな、華やかさの中に瞳を開いたのである。

これ以上私はあの日の光景を物語ることも出來ないやうな氣がするし、書き表はすことも出來ないのであるが、唯あの式場瞬間の存在こそが、眞に我が日本にのみあり得る尊い存在であり、日本國民のみが釀成し得る絶大の力であることを泌々經驗し得たやうな氣がしたのである。而もその時初めて、この意氣、この熱、この力、これある以上我が日本は大丈夫だと云つたやうな一つの大きな信念を經驗し得ましたことを玆に皆樣の前に一言御傳へする譯であります。

奉祝句

ぬかつけばまた更たなり菊の宴

光榮に浴して

松園良三

紀元二千六百年を迎へ、皇國民として、「御民われ生ける驗あり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば」の大歡喜に加へて、縣民有位者代表の一人として、式典並奉祝會參列の光榮に浴し得る事となつた時、夢ではないかと思ひ、且つ感激に打ちふるへた。神灯を献じて感謝し、香を焚いて祖先に申告し、且つ無事に任を果す事が出來る樣祈念したのであつた。

感謝。五百に及ぶ縣民代表の輸送、のみならず、車中の辨當湯茶の配給、旅館の手配より、東京に於ける行動の計畫等々、到れり盡せりの政府及縣御當局の御苦心、御配慮に對し、深甚の感謝を捧げる次第である。

式典。一天雲なき上々日和、五萬五千の代表は實に秩序整然と參入。これこそ興亞の盟主國々民としての態度であると嬉しく思つた。塵一つなき式典場の清淨さに襟を正し、仰ぐ宮城の神々しさに自ら頭が下り目頭があつくなつた。全場水を打つた樣な靜けさにいやが上に募る嚴肅な氣、かく御待ち申上る中に、　天皇皇后兩陛下出御、遙に御健にましますお英姿を拜した時、たゞ有難く、たゞ嬉しく、いくら堪へようとしても涙がこみあげて來る。何の理窟もない。あらう筈がない。たゞ有難く感激の極のみ。奉唱した「君が代」の莊重さは、今までに經驗した事がないものであつた。

御勅語下賜。　神前に御祓をいたゞくとき、うなだれた頭の上を亘り來ます神威を感ずる氣持であつた。御終了の後、私はしつかりと大地をふんまへたまゝ、硬直にも等しい直立不動であつた事に氣がついた。

萬歳奉唱。　我を忘れて　聖壽の萬歳を唱へ奉つた。大内山にこだまし、世界の果までとゞろいたであらう萬歳の聲に、國民の赤誠を、國民の大信念を開いた。

退場の後、私は神武天皇御東遷の歴史を想ひ、御即位の聖地に奉仕した其の昔の方々の心中が、幾分でもわかつた樣に思つた。奉仕した方々は實に吾々の遠い大祖なのだ。

奉祝會。　高き秋天の下、嚴肅の中に溢るゝ歡喜を犇々と感じた。忝くも高松宮殿下、奉祝の御詞奏上。「臣宣仁謹ミテ言ス」と仰せ遊ばされた時、私の心を強く強く打つたものがあつた。謹みて御詞を拜する中に、堪へ難くなつた涙は、幾條も幾條も頰を傳ひ、果ては嗚咽しさうになつたのを、グツト堪へた。「末の世の末の末まで我國はよろつの國にすぐれたる國」何といふ有難い事か。

開宴。　忝くも　兩陛下に於かせられては、五萬五千の民草に、御歡を賜ひ、御杯を御取り遊ばさるる御樣子を拜んだ。我が國にのみ見る「君臣和樂」有難い事、勿体ない事だ。名も無き私が大御前に罷出づる事を得た事すらが、勿体ない事であり、感激の極であるのに、この　大御前で、御饌を戴くとは尙更の事、勿体ない事であつた。御酒をなみ〳〵とついだ杯を兩手で押し戴きつゝ感泣した。

天皇皇后兩陛下入御。全員謹みて奉送。退場となつても、今暫くこの席でこのまゝに、靜かに昨日今日の盛典の次第を、心の中に、目の前に繰返し、このまゝの感激に浸りつゝけたいと强く念願した。

兩日共好天氣、絶好の奉祝日和であつた。鳩が中天に幾群も舞つた和やかな、又秋天高く鵄が大輪を畫いた稀有の秋日和。御稜威の下、この盛典に好天氣なれかしと祈つた一億國民の至誠が天に通じたのだ。これこそ天祐でなくて何であらう。この一億の至誠こそ未曾有の國難突破の大源動力であると固く信じてゐる。曠古の盛典が滯りなく、目出度終了した事を衷心お喜び申上げた。この曠古の盛典に參列するを得たこの光榮、この感激は、盛典の御模樣と共に永く子々孫々に語り傳へ、拜戴の記念品は家寶として傳へる。思へば聖戰既に四年、未曾有の出帥、又未曾有の國難の中に、かくも盛大に、和やかに擧行された盛典に、彌高き御稜威を仰ぎ、悠久肇國の精神を更に深く深く拜戴し、この國に生れた幸福をつくづく感謝した。と共に固く固く、臣道實踐、職域奉公を誓つた。思へば昨年末病より九死に一生を得た私は、紀元二千六百年を迎へ得た事が人一倍嬉しきに、去る二月十一日には、縣教育會の御盡力により、橿原神宮の大前に、紀元節を祝ぎ奉り。加ふるに曠古の盛典に參列を許され、尙又去る十二月初旬には縣御當局の御配慮により、宮崎市に於ける國民精神支化講習會に出席し、皇祖發祥の地で、御神德にひれ伏し、皇室の御隆昌を祈り奉り、昭代を感謝し得た事を、深く深く感謝し、感泣しつゝ筆を擱く。

佳き年の佳き今日の日や菊盛り
菊の香に悠遠の歴史しのびけり

秋高し日象の玉燦として

壹岐郡武生水町
松本松之亟

輝かしき皇紀二千六百年を迎へ、宮城外苑に於て、莊嚴なる曠古の盛典を擧げらるゝに方り、不肖圖らずも參列の光榮に浴し、感激の極みでありました。二日に亘り、　天皇皇后兩陛下の尊き龍顏を拜し奉りしのみか、其の上に、優渥なる勅語を拜戴し、殊に至尊の御前に於て、祝杯を擧げ、聖壽の萬歲を奉唱した、瞬間の感激は實に筆舌に盡し難き程大なるものがあり、洵に聖代の有難さを痛感し、私共の生涯忘れ得ざる感銘を覺へました。同時に、皇室の彌榮と帝國の發展を祈念し奉り、微力亦覺悟を新にし、一億一心大政翼賛の誠を效し、皇恩の萬分の一に酬ひ奉らんことを心に誓つたのであります。

紀元二千六百年祝典に參列して

馬淵諒吉

紀元二千六百年祝典は十一月十日十一日に決定、私も縣民代表の一人として此の曠古の祝典に參列するの光榮に浴し、縣民代表一行と十一月八日特別列車にて出發、同九日夕着京投宿、十日の式典十一日の奉祝會に參列、大体次の如き行事に臨み、十一月十五日歸縣。

十日式典。朝豫備集合所集合、式場着席、　兩陛下出御、最敬禮、君が代奉唱、首相壽詞奉奏、勅語下賜、萬歲三唱。十一日奉祝會。集合、會場着席、　兩陛下出御、最敬禮、總裁代理宮殿下祝詞、外國使臣代表祝詞、勅語下賜、開宴、舞樂、萬歲三唱。以上の行事中若干の記事と所感を述ぶ。

十日式典當日集合より着席迄は、秩序正しく靜粛にして、流石代表的人物の集團として耻かしからぬものと感ず。式場は係員各位の努力に由り、立派な式殿、裝飾旗、周圍の幔幕、机腰掛、救護所、便所、其他至れり盡せりなりしも、机腰掛物置台等の關係具合宜しからず便所は今少しく假便所增設の必要あり。

此日天氣晴朗にして誠に氣持好く、空に一點の雲なく所謂日本晴にして、一同喜色滿面の景、而して式場内には此の曠古の盛典に當り皇族殿下を初めとして文武百官竝各縣民代表、滿洲朝鮮北中南支那、南洋各代表及外國使臣等參列者總數實に五萬四千八百餘人、滿場着席の晴の姿は眞に天下の壯觀にして、而も今や此の未曾有の東亞竝歐洲の動亂事變の最中、眞に餘裕綽々大に意を强うするものあるを覺ゆ、同時に出動將兵竝英靈に對し感謝の念禁ずる能はず。

午前十時四十八分　兩陛下宮城御出門便殿入御、近衛首相御先導にて　兩陛下式殿中央玉座竝御座に着御、やがて式典開始、　兩陛下立御、參列者一同最敬禮終りて君が代奉唱、此の時の最敬禮君が代こそ、二千六百年來の皇恩を感謝し奉り、皇室の彌榮と聖壽の萬歲を祈り奉り、自ら既往

を顧み現在に善處し精研奮闘を誓ひ、紀元二千七百年に向つて進むの準備と覺悟を要するの念油然として起るを覺へたり。

次に近衛首相御前に進み壽詞を奉奏、その莊重なる一言一句、一億臣民を代表せる此の全詞は參列者一同は勿論全國民に放送され、其光景を現に今見聞せる吾等は感激の涙流出するを禁ずる能はず、爾今益々聖訓を奉戴し、國体の精華を發揮し、以て必ず時艱を克服し、宏大無邊の皇恩に報い奉らざるべからざることを痛感す。

天皇陛下には今日の聖典に當り、玉音朗々優渥なる勅語を賜る。吾等一層肇國の精神を昂揚し、益々國運の隆昌を計り、嚮きの紀元節に賜はりたる聖旨に對へ奉り、愈々皇道を顯揚し以て人類の福祉と萬邦協和に寄與する如く努めざるべからず。

終りに近衛首相は　陛下の御前に參進、恭しく「天皇陛下萬歳」を發聲、全員大地を搖がす如き萬歳を三唱す。此時正に日本國民全般奉祝の時間、陸海國外一億の聲高く强く誠を込めて首相に唱和し聖壽の萬歳を奉唱す、此の聲こそ皇國の中心根源たる皇室の彌榮を祈る所の紀元二千六百年より紀元二千七百年未來永劫を貫く皇威の光被する所皇國臣民の聲にして、此の聲此の響きこの神通こそ國運の隆昌を作る原動力ならむ。

此の頃陸海軍の皇禮砲殷々とし大空に轟くを聞く、此時宮城内外の鳩水禽の群幾百となく飛び起ちて宮城の上空を飛揚し、萬歳の聲に和するが如く舞ひ且護るが如く飛廻る樣は、恰かも飛行機の群をなして飛行するが如く感ぜられ、思ひは何時か歐洲の戰場に走す。今や歐洲は獨英對戰中にして英國内は獨機の爆擊を受け餘す所なく其の又宮殿すら損害尠からずと聞く、我國亦東亞に於て曠古の聖戰を交へ、英米露敵を援けて我を妨害しつゝあるも、未だ嘗て一度もその聲のみ高くして皇居を犯すが如きことなき所以のもの、偏に我御稜威と一億一心盡忠報國の結果に外ならず、然れども世局の激變は國運隆替の以て判るる所、愈々國防國家の確立、物心統一强化を怠らず、不覺を取らぬ樣備ふる所なかるべからず。今此の盛典に參列して皇禮砲を耳にし、宮城附近に安らけく生ける鳥類の群の飛揚するを見て感慨深きものありて感じたる儘を記す。

かくて諸員最敬禮、式典終了、午前十一時三十分諸員奉送裡に天機竝御機嫌麗はしく還幸啓遊ばされ、滯りなく紀元二千六百年の聖典を終り、一同洵に慶祝に堪へず。

十一日奉祝會。會場は前日の姿を一變し、式殿前を飾る裝飾旗は五色旗に、周圍の幔幕は紅白の縱縞に、玉座竝御座も赤地の錦にかへられ、奉祝の舞樂台は式殿前に設けられ美しく典雅な姿を輝かせ、坐席の卓上には記念品野戰料理を含む酒饌等紀元二千六百年を記念する風呂敷に包まれて並べられてゐた。五萬何千人に對しての此の設備、係員の骨折さこそと感謝の念起る。午後一時頃參列者一同入場を終へ、奉祝會總裁代理高松宮殿下同妃殿下御揃にて御參着、各皇族殿下も御參着遊ばされた。一時四十八分　兩陛下宮城御出門、一旦便殿に入御、二時十分頃高松宮殿下の御先導にて玉座竝御座に着かせ給ふ。御左右には皇族殿下二十七方、竹の園生の御榮え慶ばしく、その光景を拜するだに畏き極みなり。只だ秩父宮殿下御不例の爲め妃殿下のみ御臨場遊ばさる、秩父宮殿下の御平癒を祈りてやまず。かくて晴れやかなる慶祝の宴は始めらる　兩陛下立御、一同最敬禮君が

代奉唱、昨十日　龍顏を拜し、今また　天顏に咫尺す、感激益々深しっ昨日は緊縮今日は何となく晴れやかなる心地す。次に總裁宮御代理高松宮殿下　陛下の御前に參進奉祝の詞を奏上遊ばさる、壽ぎ述べさせられる御聲はマイクを通じて場内隈なく又全國に放送、國民の感激愈々深きものありしならむ。御聲の御元氣に滿ち滿ちて又其の御明朗なる實に末御賴母敷感激、兩眼落涙を禁ぜざるものあり、秩父宮殿下も此光景を妃殿下を通じて聞召され御安心御悅びのことならむ。吾等皇國の臣民として皇紀二千六百年の今日ある、偏に國民の中心たる皇室の儼存に由る。皇室は臣民を愛撫し給ひ、臣民亦感激して仕へまつり、幾多の時艱を克服して今日に至る、此念相通じて悠久を效す。やがて東亞より世界を平和に導くものは皇國なることを信じ、益々其本分を勵まざるべからず。

高松宮殿下祝詞奏上を終り給ふや、外國使臣代表グルー米國大使御前に參進祝詞を奏上す。

陛下之を聽召されたる後、再び優渥なる勅語を賜ふ。吾等一同畏れ多くも　陛下と御醼を偕にし其の歡を罄くするの光榮に浴し、此の皇國に生を享けたる大なる歡喜を今更ながら深く肝銘す。尙ほ　陛下には此宴を偕にせらるるにつけても、世界の平和恢復せられ萬邦と俱に其慶に賴らんことを望むと仰せられて居られる聖旨に副ふことを忘れてはならぬ。

開宴に際し舞樂台上奉祝樂「悠久」を奏演され、天覽を賜ひ、陸海軍樂隊の奉祝音樂「大歡喜」「二千六百年頌歌行進曲」吹奏樂「奉祝讃歌」演奏、次に全國學生生徒代表奉祝國民歌「紀元二千六百年」齊唱、賑かに珍らしく歡びの宴を終へ、高松宮殿下舞樂臺上に昇らせられて「天皇陛下萬歲」を御發聲、一同高らかに唱和し奉り、午後三時五分奉祝會終了、一同奉送裡に會場發御天機竝御機嫌殊に麗はしく還幸啓あらせられ、茲に二日間に亘る曠古の祝典は慶祝のうちに目出度終了。今茲に　兩陛下に御別れしても、各代表の感激は永續して、長へに聖旨に副ひ奉るべく、臣民の中核となり其分を盡すことに邁進し、國運は益々隆盛に向ひ皇威は世界に輝き、即ち八紘一宇を實現することになるであらう。

盛典に參列して

目良勝眞

「金鵄輝く日本の榮ある光身にうけて」、仰ぎまつるは　天皇皇后兩陛下の尊き御姿、靑史に不朽の歡喜と光榮のこの一時、全國各地から選ばれて集ままつた五萬有餘の參列者、若人の心をこめて唱和した、奉祝歌「純元二千六百年」の歌聲は豊麗勇壯な旋律となつて、奉祝會の最高潮をまざまざと全國津々浦々に傳へられたのでありました。歌ふもの聞くもの、すべてが感激の一瞬だつた。國をあげての歷史的盛典、しかも聖戰四年のさ中に行はれた、最も意義深きものとして、吾々民草の肝に銘じ、悠久二千六百年寶祚の無躬と萬邦無比なる我が皇國の歷史を顧み、更に未來永劫に發展すべき國運の將來を神明に祈ると共に、私どもは此の忘れ得ぬ光榮と感激とを以つて、肇國の大理想と大政翼贊の眞義をはつきりと認識して、各々其の職分に萬全の御奉公を誓ふものであります。

祝典參列の感想

三栗昌周

去る十一月、皇紀二千六百年記念祝典、曠古の御盛儀に際し、不肖も思ひ掛けなき參列の光榮を忝ふし、終生の面目たるは申す迄もなく、尙ほ且つ一門の名譽として、其の感激の念は言葉に盡し難く、唯だ遙かに窮りなき御聖恩を深く銘肝致す次第であります。

參列の感想を記述する樣にとの御寄託を受けたるも老生々來の無能と殊に文筆の才なく、加ふるに參列當時の實感的心境に於ては、萬感胸に充ちて何物をも云ひ現はす可きことが出來ませぬ。依て取り敢へず今は只だ老生が日誌の更訂とも申す可き一片を記するに過ぎざるのであります。

鄕土長崎を出發してより祝典の當日に至るまで、其の胸中に往來するものは他のことでなく、只だ未だ曾つて逢へることなき前代未聞の這度の御盛儀が如何斗り莊嚴其物であらうか、又自己の態度を如何にして處すべきかなど、種々の假定的想像をのみ描きて時の移るのを忘るゝ斗りで有ります。左れば兩日に涉りて擧行せられたる盛儀に、參列者に伍して式場內の人となるや、何んとなく自から緊張するを覺えましたが、愈々定刻を報ぜられ、諸員と共に恭しく鳳駕を迎へ上つり、やがて嘵々たる奏樂の響きと共に、全員最敬禮を捧げ上り、畏くも　兩陛下の御親臨を忝ふ致しました。謹んで遙に　龍顏を拜し上り、恐惶の極み自から頭の垂るゝを覺へず、敬崇の念禁じがたく御座いました。而かのみならず私共一同に對し、玉音親しく勅語を下ださせられたことは、眞ことに勿体なく、畏れ多き極みであります。更に祝典の當日は、特に破格なる御賜餐の殊遇を忝ふせしことは、是れ實に私共一介の民として畢生忘れ得ざる誇りとして光榮亦た何物か比す可きものが有るでせうか、嗚呼何たる尊き御惠みだらうか、私は此の御恩寵に接せし時、萬感胸に迫つて感激の涙抑へ難く、山海も尙ほ及ばざる此の御仁慈、億兆の民を赤子と思召させ給ひて、無限の愛護を垂れさせ給ふ此の鴻恩に對し、私共は何を以て御酬い申上ぐべきか、萬死を以て赤誠を捧ぐるも尙ほ足れりとは申され難いのであります。目下吾國の狀勢は事變の處理に邁進せられ居り、更に進んで東亞安定の大業を完遂せられんと、國力の全部を提げて賢策を練り、以て其の達成を期せんとせられつゝ有り、此の一大非常時に直面せる私共は、須らく億兆一心、私心を脫却して忠誠に歸一し、和衷協力して、速に理念の達成を期す可く、傳統的吾國民の美德を發揚し、臣道を實踐し、以て御靈意に副ひ上る外は無いと思ふのであります。

◎感激のまゝを

あまりにもふかき惠の身にしみて
　なみたの露に袖はぬれける
海やまもたとへかたなき御めくみに
　はくゝまれにしわれそ幸なれ
いかにせむいそしむわさはつたなくも
　たゝひとすちにそゝくまこゝろ

老のみもなからへたけれ今しはし
　みくににつくす業なはけみて

皇紀二千六百年式典參列の感想

長崎縣神職會理事　水野光太

昭和十五年十一月十日十一日の兩日、皇紀二千六百年の榮えある式典に、私如き者が參列するの光榮に浴しました事は、只々恐懼感激の極みであります。感想は只有り難いと申す外、到底筆紙に盡す事は出來ませんが、畏くも　天皇皇后兩陛下の行幸啓を拜しながら、私共が盃を頂きました事は、一入感涙に咽びました。尙總理大臣の壽詞は大日本帝國の一層力强さを感じました。殊に高松宮殿下の總裁宮御代理として御祝詞を言上遊ばされ、臣宣仁と幾度か力强く御奏上、御音吐御明朗洵に感激の涙で一杯でした。十一日御盃を頂きながら、一句、

二千六百年賜饌拜す日の神酒哉

自然のまゝを申上げます。

二千六百年式典に參列して

三谷熊太郎

一億民草の擧つて皇國の御榮を壽ぎ奉る佳き年、曠古の盛典、紀元二千六百年式典は、十一月十日宮城外苑に於て、畏くも　天皇皇后兩陛下の御臨幸を仰ぎ奉り、いとも莊嚴裡に擧行せらる。其日一點曇りなく、晩秋の霞棚引く大內山の老松水に映じ、式場の入口なる奉祝塔、沿道には紅白の菊花を配し、露霜を含み色麗しく、光榮に輝く五萬四千人の參列者は、午前七時半頃より、各省關係一般參列者と各豫備集合地に參集し、時刻至るを待つ。各員は功績を語る勳章徽章を佩用し、午前九時半頃より、坂下門祝田門馬場先門より、夫々入場を初め、さしもに廣き式場も大方埋め盡し、午前十時より勳一等同夫人等靜々入場、やがて式殿には重臣顯官昇殿者肅然として參入、式場亦肅として聲なく、一同襟を正して御待ち申上げる內、午前十一時、莊嚴なる君が代奏樂裡に兩陛下は出御あらせらる。玉音朗々優渥なる勅語を賜ひたる刹那、眞に感極まり、落涙袖を濡す、申すも畏き極みなり。國民の赤誠を込めて奉祝し奉る近衛首相の壽詞、紀元二千六百年頌歌、大地を搖がす萬歲奉唱、陸海軍の祝砲は大內山の茂み深く轟く。諸員最敬禮裡に入御あらせらる。參列の大集は各々感激と歡喜に滿ち、滅私奉公の誓ひ固く、玉砂利の音も靜かに退場せり。

悠久二千六百年、有史以來の盛典を行はせられ、而も八紘一宇の大理想の下に聖戰既に四年、東

亞建設の途上に、如斯き盛典を行はせらるゝことは、最も意義深く、實祚の無窮と萬邦無比の國体の發展は永劫無限なるを想ひ、吾々國民は職域奉公の誠を效し、益々皇國の隆昌に勉め、鴻恩の萬分の一に報ひ奉る覺悟を更に固めざる可からず。

聖典に參列して

宮川彌十郎

紀元二千六百年奉祝式典參列の光榮に浴しましたことは、臣民として之に過ぎましたる歡びはなく、この盛典を仰ぎ奉り、神國日本に生れました有難さに、感涙にむせびました。

この感激を、いつまでも胸に致しまして、子孫に傳へ、御奉公の道を完ふ致したいと存じ奉ります。

紀元二千六百年奉祝式典參列感想

式見村長森留次郎

今回我々町村長が光輝ある祝元二千六百年記念の盛典に參列し、親しく　兩陛下の御親臨を仰ぎ剰さへ優詔を拜し得たる事は、一代の榮譽として恐懼感激措く所を知らない次第であります。嗚呼誰か連綿たる皇統の尊嚴と宏大無邊なる皇恩とを稱へ奉らない者があらうか、私の心靈の絃には此の刹那、海行かば水漬く屍山行かば草蒸す屍大君の邊にこそ死なめ顧みはせじと、思はず響いたのであります。虔みて皇祖の垂示し給へる肇國の大理想に鑑み、悠遠なる建國の大義を懷ふ時、町村自治の責務更に重大なるを覺ゆるのであります。殊に支那事變勃發以來、我が忠勇なる皇軍將兵は到る處に赫々たる偉勳を樹てて四百餘洲を震憾し、國民亦銃後を護りて忠誠彌固く、團結以て奉公の實を竭すと雖、事變の解決未だ中道にして、聖戰の目的を完遂すること前途遼遠であります。加之歐洲の動亂は益々擴大せられ、世界大戰を捲起さんとして居ります。從つて東洋に於ける國際情勢は我が事變處理の上に一大障害を加へつつあるのであります。されば朝野協力、國家總力を擧げて感奮興起、時艱克服に邁進せねばならない。宜べなるかな、政府は此の難關突破に萬全の策を講じ、新体制を確立し、高度國防の充實を目指して、政治機構を改め國民精神を振作し國家經濟力を旺盛ならしめ、以て萬邦無比の我が國体を彌が上にも光輝あらしむる樣畫策之に努めて居るのであります。之を思へば、我々は此の古今未曾有の秋、玆に二千六百年の歴史的盛世に際會し心氣一轉、尙格段の覺悟を堅持しつつ、滅私奉公公益優先の麗はしい國民精神を一層高揚し、和衷協力各其の天職を完ふして、崇高なる國体の精華を益々鞏固にし、眼前に横はる大東亞共榮圏の確立を期すべく、懸命の奮闘を續けなければならない。思ふに士は己を知る人の爲めに死すと、之れ日本武士道の現はれではないか、歴代我が皇室の叡慮深きを感拜する時、吾等は町村の代表として責務の倍加せるを認識し、粉骨碎身自治の根底に培ひ、以て天業を翼賛し國家無疆の康福を增進し、臣道實踐の實を擧げ、皇恩の萬分の一に酬い奉らんとの覺悟新にした次第であります。

森田健吾

長崎醫科大學判任官總代として、式典參列の光榮を得たのは生涯を通じての無上の感激である。毎日齋戒沐浴の氣持で、尙一層健康に留意して光榮の日を待つた。途上式典參列者專用列車との貼紙が特に目立ち、自分は全國民より選ばれて榮譽の席に列するのだぞといふ誇らしき印象と自覺が深く心に銘ぜられた。

愈々式典の當日十一月十日。何といふ爽かな日本晴だらう。風も穩かで溫かい。誠に是れ天の惠か。文部省に集合の上、宮城外苑の式場に參入。仰げば大內山の松の翠は陽光に彌々色濃く、千代田の城の甍は一際莊嚴に拜された。其間を鳩の群れ飛ぶ樣は、此の聖代の瑞徵を具現したものだ。百一發の皇禮砲と共に嚠喨たる喇叭の響。今し　兩陛下臨御遊ばすのだ。宏莊なる式殿內に遙かに拜する御姿。金屛風の前に黑く浮出でました　陛下の御影。昔ならば鳳輦の御簾內も尙土下座して拜するを得なかつたのに、聖代の有難さは直接我眼に映る　龍顏。何といふ勿体ない事だらう。近衛首相の壽詞奏上の後、畏くも勅語を賜つた。其の玉音朗々御力强き一句一句、特に其中の「……嘉尙ス」「……ヲ期セヨ」の御言葉まで明瞭に拜聽出來たのは唯參列者のみの得た光榮である。ラヂオにも入れぬ玉聲を我耳にてはつきりと聽いたのだ。此の勿体ない感激は私一人ではない。五萬二千の參列者殘らずその氣持に違ひない。かくして莊重嚴肅の裡に式典は終つた。鉾や日輪のついた大旛の立竝べるのも御即位の大典を偲ばれて神々しい。

奉祝會の十一日も前日にまして快晴。朝日うららかに微風は小春日和を思はせる溫かさ。之も神明の加護によるものと只管天に謝する氣持で一杯だ。今日の奉祝會場は昨日の莊嚴に引替えて又何といふ華麗さだ。兩日とも　陛下の御英姿を拜するとは唯有難さに胸迫りて言葉も出ない。

奉祝會總裁御代理高松宮殿下の奉祝詞御朗讀の御元氣に滿ち滿ちた力强き御聲を拜された。殊に其中に「臣宣仁」と仰せられ、又「陛下」と仰せられる事、御直宮にして既に一臣民として、御兄　陛下に對し奉り忠節を御盡し遊ばす範を垂れさせ給ふ。誠に畏れ多き極みである。我等一億の臣民は如何にして之に應へ奉るべきか。唯滅私奉公即ち臣道實踐あるのみ。

陛下と全く同樣の御饌御酒書冊までが我等の卓上にも取揃へてあり、愈々開宴となれば　陛下の御口にし給ふ御饌を勿体なくも我々までが同樣に戴くことが出來るのである。又典雅なる舞樂も奏樂も亦齊しく　陛下のみぞなはす物を自らの眼で視、耳で聽くの光榮に浴せる我々は唯感窮まるばかり。

今大陸には曠古の聖戰に國力を擧げて奮鬪せる秋、帝都には海外同胞及締盟各國代表を招じて此の盛典。思へば帝國の餘裕ある底力の如何に賴母しき事よ。古歌に詠まれた「み民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時に逢へらく思へば」の眞意を始めて体得した者は私一人ではあるまい。何といふ有難い聖代に生れ合せた幸よ。此上は唯本分を盡し今回下し給ひし勅語の聖旨に副ひ奉るべく期する覺悟あるのみ。

拜受した聖德餘光、列聖珠藻の兩書と式典記念章及銚子、盃に至るまで此の千載一遇の光榮と感

激とを子々孫々までも傳ふべく大切に持歸つたのであつた。

曠古の式典に參列して

佐世保新報社支配人　森田輝海

過る昭和十五年十一月十日、十一日の紀元二千六百年式典及奉祝會に參列の恩命に接し、思ひ設けぬ事柄だけに、吾が一家一門の喜びはその頂點に達した。而してこの佳き日の一日も速かならむことを千秋の思で鶴首した。

上京準備全くなり、十一月八日欣喜雀躍特別式典參列々車の一員となつた。何れの人々も誠に曠古の大典、世紀の民族的な盛儀に參列すると言ふ一代の光榮に晴れがましい顏々々。

長崎縣係員の周到なる注意と懇切なる指導によつて、參列員一同洵に愉快な旅を續け、一夜を車中で明し、九日午后七時過ぎ歡喜に渦卷く帝都に一歩を印し、夫々指定の旅館に分宿した。

明れば遂に一億同胞の待ちに待つた聖紀の大典當日とはなつた。我々參列員は早朝起床、旅の疲ものかは、精進潔齋服裝を整へ、豫備集合所たる日比谷公園にそれこそ威儀を正して參集した。各縣民代表も刻々に集合、それより菊花の清香地に滿ち、清澄の秋空の下、常盤の松の綠も濃き宮城外苑の式場に參集した。

申すも畏きことながら、式場正面には　至尊の臨御を仰ぐ古代造りの式殿が嚴かに拜され、左右に皇族各宮殿下並に功臣、大臣等の席が設けられ、其の前面右寄りには舞樂殿及錦の御旗が各八本陽光に照り輝き、更に式場の外側は紅白の色も鮮な天幕を以つて張り廻らされ、莊嚴例ふるに由もなかつた。

これより前、兎角天候が氣遣はれてゐたが、單なる杞憂に過ぎず、朝來天も一億民草の歡喜に應ふるが如く、一點の雲影さへも止めず、瑞雲彼邊に棚引き、彌榮の秋光は燦々と輝き、絕好の聖典日和となつた。

畏くも　天皇皇后兩陛下には定刻文武百官群臣五萬餘の奉迎裡に靜々と式殿に出御遊ばされた。參列の光榮に浴した一同は期せずして最敬禮を爲し、至尊の御姿を拜して身内に熱きものゝ湧然として燃え上るのを禁じ得なかつた。

莊重なる「君が代」の奏樂に續き、參列者一同外國までも響けよと許り「君が代」を奉唱、更に咽喉も裂けよと聖壽の萬歲を稱へ奉つた。

建國以來悠久二千六百年の歷史を想ひ、更に竹の園生の彌榮を目の邊り拜し、昭和の聖代にこの盛典に際會し得た事は我が國民族の最大の歡喜感激でなくてなんであらう。今や國家非常の秋、民族試錬の時に處する新体制の發足に當り、この式典を執り行はせられた事は、我が國體の本義に鑑み意義更に深きものがあり、恐れ多き事ながら、又日本人なりとの光榮と歡喜に胸打ち震はした事は……又日本人なりとの自覺も此時位確然と意識した事せずには居られなかつた。

畏くも式典に當り優渥なる勅語を賜り、玉音を遙に拜するに及び、時局の重大なるを想ひ、愈々頭は垂れ下り、熱涙滂沱拭けども拭けども感涙を止むることが出來なかつた。

近衛公の壽詞も音吐極めて朗々、能く臣道を明にした文言で、一億國民の代表たるに誠に相應しきものであつたが、特に「國體ノ精華ヲ發揮シテ非常ノ時艱ヲ克服シ八紘一宇ノ皇謨ヲ翼贊シテ宏大無邊ノ聖恩ニ奉對センコトヲ期ス」の條文は我等一億民草眞心の誓詞であると痛感した。

仰げば遠き肇國の皇祖が、聖なる畝傍の橿原に擧げさせられた御即位の大禮も斯くやと許り、その盛儀の程が偲ばれて轉た感懷の一入深きを覺えた。

奉祝會の豪華な舞樂や交響樂も君民和樂の標徴であり、力强き民族繁榮の奏でなくてなんであらう。今や國家非常の眞只中に在つて、國を擧げての盛典を行ふが如きは、眞に無限の底力を包藏する我が大日本帝國にして初めて爲し得るところであると肝銘したのも豈微臣のみであつたであらうか。

紀元二千六百年奉祝會總裁御代理高松宮殿下の奉祝詞は殊の外有難く「臣等生ヲ昭代ニ享ケテ此ノ昌期ニ遭ヒ歡天喜地ノ至ニ勝フルナシ」と奏上し給ふや、又しても感泣之を久ふした。

我等一微臣と雖もその責務の重且大なることを痛感した。前古未曾有の盛儀に晴れて參列の光榮を辱ふした、我々各縣代表は鄕に在つては常に教育勅語を胸中に奉體し、國威の發揚、國家興隆の一礎石となるの覺悟を堅持し、飽く迄献身的な御奉公こそ宏大無邊の皇恩の萬分の一にも應へ奉る所以であると確信する次第である。

敢て當日の感激を記述して子々孫々感奮激勵の資となさんとす。

聖典に參列して

陸軍少將　安原瀧藏

萬邦に冠絕する尊嚴なる皇國の國體は、炳乎として日月の如く、玆に悠久紀元二千六百年、一億國民待望の佳き奉祝式典日を迎へた。前日來曇り勝なる天氣もさらりと晴れて清々し、心もいろいろしく、身を淨めて、定刻前式場に參入し、定めの席に着く。見渡せば廣々とした宮城外苑式場の四周には、淺黃紅白の幔幕を廻らし、奉祝の旗高く併立して薫風に靡き、式場內は幾千を數ふる參列者の卓子を以て埋められ、正面にある寢殿造りの莊嚴優美なる式殿の左右には、日月八咫鏡金鵄桐花の紅ひの御旛嚴立し、幽邃なる大內山の翠松と共に、折柄の旭光を浴びて神々しく、瑞氣場內に滿ち、五萬五千の參列者齊しく肅然として行幸啓を待つ。軈て國歌奏樂裡に臨御あらせられ、天皇皇后兩陛下の麗はしき尊顏を咫尺に拜し、近衛首相は恭しく壽詞を奏し、難有勅語を賜はり、一同恐懼感激措く所を知らず。近衛首相の發聲にて天に響けと萬歲を奉唱し、一代の光榮を胸に疊みて退場した。

翌くる奉祝會の日は、前夜來の惡天候を氣遣はれしも、朝來暗雲を拂拭して晴天となり、前日に同じく莊嚴と欽肅裡に、兩陛下の尊顏を拜し、奉祝會總裁宮御代理高松宮殿下の御力强き莊重朗

々たる祝辞奏上を謹聽しては感涙胸に迫り、更に難有勅語を賜はり、陪宴の光榮に浴し、高松宮殿下の御發聲にて聖壽無疆の萬歳を奉唱し、無上の感佩裡に退場した。前日來雨天を氣遣はれたるに關はらず、式典奉祝兩當日の日本晴れは　皇祖天照大御神を始め奉り、八百萬神の神慮とも偲ばれ彌々實祚の無窮と聖戰完遂大東亞の新秩序と共榮圏の確立に幸多く、國運益々隆昌の前兆として、感銘を一層深からしめた。殊に我等草莽の微臣が曠古の聖典に參列し、　天顏を咫尺に仰ぎ、難有勅語を拜するを得たるは、子々孫々に傳ふべき無上の光榮にして、感激言ふ所を知らず。唯此上は一意聖訓を奉戴して、鞠躬淬勵滅私奉公の誠を效し、更に若返りの意氣を以て臣道實踐に邁進し、以て皇猷の恢廓に贊襄し奉らんことを期する次第である。

聖典參列の光榮と感謝

八戸作一

我々日本民族の比類なき榮譽と異常の感激の下に擧行せられました、紀元二千六百年の奉祝記念式典に、不肖長崎縣民代表として參列の光榮に浴しましたことは、寔に畢生の感銘事であります。

遙に聖姿を拜し奉り、畏くも勅語の御下賜に相會ふ、參列者數萬寂として人無きが如く、莊嚴の氣天地に滿ち滿ちたあの一刻の感激は到底筆舌に盡せないものがありました。

此時誰か聖恩の宏大を感じ、國體の尊嚴を思はなかつたものがありませうか。

聖典に參列致しまして、今更乍ら我が皇室の一貫した悠久なる御仁政と、是を基として今日の發展を見ました、我が日本帝國の國體が單なる國民の集團的存在に非ずして、眞に精神的な拔くべからざる連繫を持つものなることを明確に味得出來ました。

時局多端に際會して、此の感激と是の國體觀を堅持し、以て臣道を實踐し萬民輔翼の大任を全ふせねばならないと信じます。

南松支廳長　山口菊衛

曠古の聖典に參列させていたゞきまして、只感激と有難さに終始するの外ありませんでした。就中日本臣民として痛切に感ぜられましたことゞも、二三列擧致させていたゞきまして、感想に代へ度いと思ひます。

其の一は　兩陛下出御前までは、參列員總ての者が首を延ばし脊を高めて御待ち申上げて居た樣で御座いましたが、出御後は皆直立不動となり、頭を傾け身体は投着けにされた樣に硬直してしまつた樣な氣が致しますと共に、現人神として御拜致しますことが、如何にも恐れおほく、目が痛くなるかの樣な氣が致しました。

其の二は、優渥なる勅語を賜はりましたが、其の内に「惟神ノ大道ヲ中外ニ顯揚シ」と昭示せられましたことは、　聖慮宏遠眞に恐懼感激に堪へない所でありまして、私共日夕神明奉仕の神職の

指導監督に當つてをりますものの、其の職責の重大さを自覺致しますと共に、愈々祭祀を嚴修致しまして報本反始の至誠を效し、神祇崇敬の本義に則り、率先して臣道實踐の儀範とならなければならない重大責任あることを痛く感ぜしめられたのであります。

其の三は、高松宮殿下の奉祝詞を奏上遊ばさるゝに際しまして「臣宣仁」と言上遊ばされました時は、不思不知涙がこぼれました。

其の四は、　兩陛下の御前で祝盃を乾して大御代を壽ぎ奉ることを得まして、ひし〳〵と胸に迫るものがありまして、末代に此の榮譽を傳へて、至誠奉公皇謨翼贊の實を擧ぐることを御誓ひ致しました。

尙最後に、私は此聖典を無滯終へさせらるゝと共に、我々縣民代表の恙がなきことを御祈り致しまして、十一月一日から同月十一日まで、毎日潔齋を致し、且つ出發と歸崎に際しましては、國幣中社諏訪の宮に祈願並奉告祭を執り行ひました。總てが何の滯りもなく終了致しましたことは、之偏に我が國體の尊嚴無比にして、我が神國としての天佑神助の所以も其處に歸一するものと、愈々臣民としての誇りと義務を痛切に感じたのであります。

紀元二千六百年奉祝式典參列感想

壹岐郡沼津村　山口末光

畏くも　天皇皇后兩陛下の行幸啓を仰ぎ奉り、榮光燦たる宮城外苑に於て、擧行相成りし曠古の聖紀祝典に、圖らずも縣民代表（縣下防空監視隊代表）として、忝なくも參列の光榮に浴し得たるは我が身生涯は勿論、子々孫々に至る一大記念にして、之に關する感想も到底拙なき筆書を以て盡し得る處には非ざるも、謹みて之を要述致すに、宏大無邊の聖恩に對し奉る一億一心の感謝感激は常時熾烈なるだけに、畏れ多くも愈々至尊の御前に列し、次第に依り恭しく　龍顏を拜したる後、最敬禮を行ひて、　天聽に達する君が代を奉唱し、次いで近衛首相は壽詞、高松宮殿下は奉祝詞の奏上を丁へさせらるるや、百武侍從長捧持の勅語書を御手に玉音朗々と優渥なる勅語を賜はり、剩へ歡喜溢るゝ祝宴の御座を俱に致し、最後に　聖壽の萬歲を壽ぎ奉る等の諸儀式に從ふに、臣下として無上の光榮なるだけに、聖慮の宏遠なるに愈々恐懼感激、我が皇國臣民にのみ與へられたる幸に、只々感泣致せし次第なり。尙之に附隨し壽詞（奉祝詞）に依り宣明せられし如く「益々國體ノ精華ヲ發揮シテ非常ノ時艱ヲ克服シ八紘一宇ノ皇謨ヲ翼贊シテ宏大無邊ノ聖恩ノ萬一ニ報ヒ奉ラン」との固き決意を新に致したると同時に、寶祚の無窮を祈念し奉りし次第なり。其の際更に然らば如何にして此の重責を果すべきやを心密に自問自答致したり。即ちそれは「畏れ多くも上御一人に對し奉り此の身命を捧げる事なり、否それだけにては不可にして、微力乍らも己の本分に向ひては之を最高度に發揚して捧げるに非ずんば、臣道を全くする所以に非ず」と自分自身を勵ませし次第なり。此の感想決意は苛にも參列時のそれとして終らすべきものに非ず、又終らせんとして終るが如き薄弱なるものに非ざることも又當然の次第なりと言ふべし。即ち生涯を通じて課せられたる

光榮ある責務にして、過去現在より將來に通じての一擧一動に至るまでの悉くは畢竟する處之が遂行の一途に歸結致す次第なり。是只參列者のみならず一億同胞に等しく課せられたる光榮あるものなる事今更此處に贅言を要せざる處なり。尙最後に附記し置き度き事は參列前は勿論、參列時より其の後の今日に及び前記の感に加へ痛感に堪へざるの儀にして、それは自己現在の身分を以て即ち若年にして何等なす處無き無位無官の小身を以て右參列の光榮に預り得たるは、一体如何なる理由に依り且如何なる任を負荷せられあるやの次第に有之、是他無く代表せしめたる防空監視隊の任務重大なるためにて、若し之にして左程までに非ざりせば、到底此の榮を賜はるの儀相叶はざりしは今更論を俟たざる次第なり。思ひて此處に至る時、過去に於て本業務に聊か與りし事はさて置き、現下の超非常時局に處せんとする高度國防國家建設のため、國民防空の責務愈々重大なるの感を深くし、之が完璧を期せんがため、日夜心を多大に勞する次第なるも、既に述べし如く至誠盡忠の精神を根本として其の使命に向ひ、全精力を發揮し防空報國に臣道の實踐に一意邁進し、以て本參列の榮譽に應へんことを期して稿を終る次第なり。

山口力麿

曠古の聖典皇紀二千六百年奉祝の式典に參列の光榮に浴したるは、洵に一身一家の光榮、恐惧感激の極みに存じます。

豫て案ぜられたる十、十一日の天候も、兩日とも天氣晴朗一點雲なく、大內山の老松は意味ありげに綠一段と深く靜に水に映じ、宮城外苑の廣大なる式場は莊嚴にして典雅雄大、五萬の參列者は一糸亂れず所定の席に着き、各自歡喜の裡に殿上埒內萬籟寂として聲なく肅然として定刻の到るを待ちつゝあり。やがて君が代の吹奏に次ぎ、兩陛下式場着御、龍顏御麗はしく玉座御座に着御、第一日は近衛首相の壽詞、第二日は高松總裁御代理宮殿下の御祝詞奏上、次で五萬參列者一同の齊唱する萬歲の響は天地に通ずる思あり。畏くも　陛下より下し賜はりし勅語を最敬禮にひれ伏しなから戴く。總員の目には右も左も既に熱き涙を禁じ得ず。其瞬間私の胸中は身も靈もなく、我を忘れて只管聖恩のありがたさに感激あるのみ。

顧るに我國は世界新秩序の建設、東洋永遠の平和確立の爲めに聖戰茲に四年、國を擧げて總力戰の眞最中、一面世界各國は各其勢力爭奪の爲め狂瀾怒濤の如き混亂のさ中に、吾等國民は何の幸ぞ微かの不安疑懼の念もなく、今日の聖典を津々浦々に至るまで、一億一心となりて壽ぐことの喜を想ふとき、三千年來動搖なき、肇國の大精神たる一君萬民八紘一宇の御聖恩に報い奉るべき道は倍職域奉公の信念を堅め、蹇々匪躬臣道の誠を竭くすの外なしと深く胸底に秘めて心の底に御誓を申しました。蓋是は私一人の所感ならず、參列者否一億同胞の誓ひたることを堅く信じます。些式典參列所感の一端を拙き筆に誌し、天地と與に榮えゆく皇運を翼賛し奉り、久遠に迎ふる世紀祝典の礎石たらんことをお祈り申します。

輝かしき悠久皇紀二千六百年に際會することを得ました私は皇國臣民として限りなき光榮を感じ、昭和十五年元旦を迎ふると共に、有凡方面に亘り、記念事業の企畫督勵實行に努めて參りましたが、去る十一月十日宮城外苑に於て行はせられた、皇紀二千六百年記念式典、翌十一日の奉祝會に參列の榮譽を辱ふし、畏くも　兩陛下のいとも御麗はしき　龍顏を拜し奉り、且優渥なる勅語を賜はり、洵に恐懼感激に堪へませんでした。實に　兩陛下の御前に於て、全國各階代表が「君が代」を齊唱致し、聖壽の萬歳を奉唱いたしました。その瞬間の感激、氣持は全く筆舌を以て表現することは出來ません。更に高松宮殿下には奉祝詞奏上の中に「臣宣仁」と御述べ遊ばされ、眞に一君萬民の我國、萬邦無比の我國體、今更のやうに強く強く感銘を深めた次第であります。

僅かに三ヶ年町村自治に關係して居るの故を以て、この曠古の國家的盛典に參列することの出來ましたことは、身に餘る生涯の光榮である許りでなく、鄕黨の榮譽でありまして、この嚴肅莊嚴なる聖典と恩遇感激とを永遠に傳へ、今後更に國家重大世局の秋、鄕黨相率ひ身命を捧げて、大政翼賛の臣道實踐に努め時艱の克服を期し、以て聖恩の萬分の一に報い奉らんことを誓つて歸村いたした次第であります。

今や一億同胞待望の大政翼賛運動は愈々本格的實踐行動へ這入つて參りました。私共は更に此機會に愈々誓を固くし、一億一心職域奉公、以て時局の重大使命の完遂を期する覺悟であります。

壹岐郡石田村長　山口陸左工門

曠古の盛儀に參列の光榮に浴して

軍人援護會長崎縣支部主事　山田熊作

十一月十日十一日の佳き日、畏くも　天皇皇后兩陛下の行幸啓を仰ぎ奉りて擧行された、皇紀二千六百年式典並に奉祝會の輝く盛儀に參列の榮に浴しました事は、無上の光榮でありまして、今も當日の御模樣を思ひ浮べ、今更の樣に新たなる感激を覺える次第であります。秋の空は涯なく高く澄み、菊花香る宮城外苑に集ひし五萬餘の民草は、天壤と共に窮みなき、彌榮の聖代を仰ぎ天皇皇后兩陛下の尊い御姿を目のあたり拜し奉り、玉音高らかに優渥なる勅語を賜りました時の有難さ、畏さ、滿場寂として聲なく、感涙にむせんだのでした。やがて近衛首相の發聲に唱和して「天皇陛下萬歳」を天地に響けとばかり奉唱しつゝ、皇國臣民として、此の大御代に生を享けた歡喜をひし〳〵と感じたので有ります。翌十一日の祝宴當日は、一層間近に　兩陛下を拜し、其の御前に朗々と奏上遊ばされる高松宮殿下の奉祝詞を拜聽し、殿下の莊重なる御聲に和して、心から聖壽萬歳を唱へ奉りました。舞樂「悠久」に肇國の歷史を偲び、御酒饌を戴きます時、皇恩の忝なさに涙の溢れるのを禁じ得なかつたので有ります。そして此の光榮と此の感激とを腦裡に深く刻み至誠奉公、以て皇謨を翼賛し奉らん事を堅く堅くお誓ひ申したので有ります。

和　歌

菊かをる宮居に近き御廣場に
　壽詞申さんと民ら集ひぬ
大君の玉の御言葉仰き奉る
　その尊さに涙あふれつ
現身の幸きはまれり御前に
　聖壽萬歳を唱へまつりて
大御典壽きまつる國民の
　歡喜の聲は天にこたます

世紀の盛典に列して

長崎商工會議所會頭　山田鷹治

悠久紀元二千六百年、天壌無窮の皇運を壽ぎ奉る曠古の盛儀、それは昭和十五年十一月十日、千代田の宮居近く打集ふ一億民草の代表五萬三千の感激更らに新たなる世紀の一大祝典繪卷でありました。

仰げば目近く大内山には瑞雲棚びき、御濠の水は靜かに老松の影を映じて、萬古の翠を湛へてゐました。

式場正面には寢殿造りの典雅な式殿が建てられ、その杉皮葺の屋根は麗はしい曲線を描いて、黄白の丸柱に浮んでゐました。殿内は紫の幔幕を以て繞らされ朱房を以て絞り、白く染抜かれた菊花御紋章は、特に一しほ鮮かに而も豊かに張らんでゐました。また前庭に立てられた萬歳旛、日月象旛は、紺碧の空を渡る爽かな秋風に和やかに靡いて、宛も今日の盛儀を祝福するかの如くでありました。

式殿上を拜すれば仄かに光る金屏風を背に玉座御座、晴れの臨御を御待ち申上ぐるうち、やがて流れ出づる「君が代」の奏樂の音につれて、さつと儀仗隊の捧銃がきらめく。威儀を正して式殿の奥、目のあたり、御軍裝凛々しき　天皇陛下、清楚なる御裝ひの　皇后陛下の畏くも現津御神の有難さを拜して、自ら頭の下るを覺えました。

思ひを遙かに遠く、神武天皇建國創業の昔に馳すれば、何たる感激、何たる光榮でありませう。聲ふるはして奉唱する「君が代」の國歌は一段と壯嚴に響き渡り、一言一語、國民の至誠を籠めて奉る近衛首相の壽詞に對して、　天皇陛下には畏くも玉音朗々神韻を帶びて勅語を賜ふ。眞に世にも嚴肅なる光景でありました。

げに萬世一系、君民一体の神國日本、大東亞共榮圏の指導者たる皇國日本を象徴した一大縮圖でありました。

今更ら萬邦無比の我が國體の有難さに歡天喜地、我れながら叫ぶ萬歳奉唱に思はず溢るゝ感涙、

熱涙、双頰を傳て止めあへぬものがありました。

草莽の臣、此の洪大無邊の皇恩に浴して全身血湧き、期せずして、一億一心、戮力和衷以て時艱を克服し、興亞聖業の達成に向つて全身全靈を捧ぐべく深く決意し、固く祈誓した次第であります。

今や我等は八紘一宇の肇國の大精神に則り國威を四海に宣揚し、以て　聖慮を安んじ奉るべく、身命を賭して、其の職域奉公に邁進せねばならない時であります。

思へば此の日の感激は私の生涯を通じて永久に忘るることの出來ないものであります。また此の日の光榮は深く銘記して子々孫々にまで傳へて、以て家門の譽れとしたい所存であります。

紀元二千六百年奉祝式典奉祝會參列感想

北松浦郡平村　山田辰三郎

昭和十五年十一月十日十一日の兩日、宮城外苑に於て擧行せられたる、曠古の盛典紀元二千六百年奉祝式典並に奉祝會に參列の光榮に浴し、　兩陛下の親臨を仰ぎ奉りて萬歳を奉唱し、あまつさへ優詔を拜し得ましたるは、洵に感激歡喜に堪へざる所で御座いまして、　聖恩の宏大無邊なるに感泣致したる次第であります。私は式場並に會場に於ては、唯々昭和の聖代に生を享けたる事の歡喜と矜持に溢るるのみでありましたが、祝典終了後ひたすら神國大日本の肇國創業の洪漠を瞻仰し、歴朝の聖德を欽仰し奉りますと同時に、益々粉骨碎身臣道實踐の誠を致し、八紘一宇の大理想の下に大政翼賛に微力を致し、以て今日の聖恩の萬分の一にも報い奉らん事を、深く心に御誓ひ申上げた次第であります。

曠古の盛典に列して

西彼杵郡喜々津村長　山本公之

光輝燦然たる悠久二千六百年の奉祝式典に參列するの榮譽に浴し、身に余る光榮と感激に咽ぶのみでありました。

仰げば目近く大内山に瑞雲靉き、御濠の水面には靜かに老松の影を映し、晴れ渡る碧空に爽かな出御より入御まで五萬の民衆関として聲なく、恰も水を打ちたるが如くその森嚴緊張いはん方なく、

山本明

何事のおはしますかは知らねとも
　　忝なさに涙こほるゝ

てふ古歌の眞情を味ひ得たり。

聖天子金屏に拜す晴の秋

秋風吹そよぎ、宛も今日の盛儀を祝福するかの如くでありました。時雨勝なる此季節に二日に亘る此好天氣、通常ならば只奇蹟として片付けるのでありますが、天津日嗣の日の御子の永久に彌榮を壽ぐ今日は、只管至尊の御意の儘なる祝典日和なりとしか思はれませんでした。其宏大無邊の聖德に深く感涙に打たれた次第であります。莊嚴なる式場、敬虔なる雰圍氣漲る中に、畏くも兩陛下の行幸啓を仰ぎ奉り、咫尺に至尊の御姿を拜し、優渥なる勅語を賜はりましたときの有難さ、滿場寂として聲なく、軈て近衛首相の萬歲の奉唱に伴れ、天地に響けとばかり奉唱しましたとき、自から湧出る感涙を如何とも致すことが出來ませんでした。眞に此日の感激は私の生涯を通じて忘るることの出來ないものであります。此皇恩の萬分の一に報ゆる爲め、八紘一宇の大精神に則り、興亞聖業の達成に又高度國防國家の建設に粉骨碎身の誠を盡すべきことを禱誓した次第であります。

式典に參列して

山本安藏

不圖も今、紀元二千六百年奉祝式典並に奉祝會に判任官總代の一員として參列の光榮に浴した。全く十一月十日、十一日の兩日は自分に取つて、否子々孫々に至るまで、忘れることの出來ない日である。前日まで氣遣かはれた天候も、此の兩日はからりと晴れて空に一點の雲も止めぬ日本晴、秋の爽氣身にしみて淨かな兩日であつた。正に寶祚の無窮を卜し、聖紀の彌榮の瑞祥として、神氣を感ぜしめた日であつた。我々地方參列者の盛典は先づ日比谷の豫備集合場から初まつた。各府縣代表五萬、四列に步を起して、馬場先門より宮城外苑の式典場に參入したのであつた。青白二色の幔幕を張廻らした式場內、寢殿造りの莊麗な式殿、遙かに仰げば中央四曲一双の金屏風を御背に、玉座御座が拜された。大內山の翠綠の中に參列者寂として聲なく、唯　天皇皇后兩陛下の臨御を仰ぎ奉つて、曠古の式典を今かとばかり待つた。玉座御座の御左右には高位顯官外國使臣等參列し、更に式殿下左右兩側には陸海軍の儀仗隊の整列す。やがて時刻　兩陛下には君が代奏樂裡に皇族各宮殿下を隨へさせられて、出御あらせられた。御英姿實に神々しき限りであつた。一同君が代奉唱、次で近衛首相一億國民を代表して壽詞を奏し奉る。次で　天皇陛下には優渥なる勅語を下し給ふ。親しく玉音に接して只有難さに胸の迫る思ひであつた。近衛首相恭しく　天皇陛下萬歲を發聲し、全參列諸員は大陸を搖がすばかりに萬歲を三唱したのであつた。時に陸海軍の皇禮砲殷々として轟き嚴肅の極みといふべきであつた。

明くれば皇民一億が歡喜に溢れての慶祝日、莊重一色の外苑の會場も此の日は紅白の幔幕、五色の旗も彩かに、式殿上玉座の御卓の赤地錦も美はしく、皇族殿下方の御卓の白クロースも實に淸々しい。參列の諸員聖紀の記念章を胸に輝やかせて續々入場、一段喜びに滿ちた面持ちであつた。午后一時四十八分、一發の花火がポンと豪快な音を外苑上に轟き、　兩陛下の發御を知らせ奉つた。間もなく、近衛儀仗隊の嘹喨たるラッパ吹奏裡に、御車寄に着御あらせらる。我等代表は重ぬて　龍顏を奉拜するの光榮に浴す。高松宮殿下の奉祝詞、駐邦外國使臣首席の奉祝詞を奏するや、

陛下にはいと御滿足の御模樣に拜され、再び御懇篤なる勅語を下賜あらせらる。

次でこゝに君臣和樂の響宴が開かれた。　兩陛下の御食饌も一般參列者と全く御同樣のものなりと拜承するだに畏き極みである。奉祝舞樂悠久に「するの代の末の末まで我國は萬の國にすくれたる國」と詠唱につれて演舞は舞ひ納められ、次で陸海軍樂隊の大歡喜の吹奏、紀元二千六百年頌歌行進曲、奉祝讃歌、さては全國の大學、專門學校、中等學校、小學校總代三千余の齊唱團が、國民奉祝歌を今こそ祝へと感激して高唱、晴れ渡つた秋空に慶祝の谺を響かせた。次で高松宮殿下には舞樂台中央に進ませ給ひ、　天皇陛下萬歳と奉唱あらせらる。この前例なき皇族殿下の御發聲に床しき君民一体の精華を目のあたりに拜した。我々は感激に咽喉も裂けよとばかり、一億の底力もかくやとばかり萬歳を唱和し奉つたのであつた。

こゝに二日に亘る曠古の盛典は滯りなく終りを告げたのである。實に悠久二千六百年の皇國、此の式典に、而も兩日に亘り、優渥なる勅語を下賜あらせられ、民草の祝意を御嘉賞あらせ給ふ。

謹みて大詔を拜し奉りて、洵に聖慮の深厚なる大御訓に愈々粉骨碎身、臣道實踐の誠を捧げて聖慮に副ひ奉らむことを期する次第である。

現下非常時に際會す、而も聖戰の中に拜する此の歴史的一大盛典の意義の一段深きを思ひ奉り、我等は二千六百年の寶祚の御榮えと万邦に比類なき皇國の歴史を回顧して、未來永劫に彌榮え行く日本の將來を考へる時、今や直面する未曾有の國難を見事突破せんとの感激に燃えさかると同時にひたすら神明に誓ひ奉る次第である。

皇紀二千六百年式典參列感想の辭

三重村長代理　安村近太郎

噫々皇紀二千六百年、昭和十五年十一月十日宮城外苑の大式場に於て、嚴かに擧げられたる二千六百年式典、翌十一日の同奉祝會は眞に曠古の大盛典たり。不肖此の盛典參列の光榮に浴し、感極つて辭なく、筆紙に盡す能はざるも、聊か式典の大要と感想の一端を叙し、以て示す所あらんとす。

此日天氣晴朗、秋色深く一塵の雲なし、朝來五萬餘の參列員一同肅々として式場に入る。軈て定刻に近付けば、嚠喨たる儀仗隊の喇叭「君が代」吹奏裡に、　兩陛下は正面の玉座に着かせ給ひ、其の左右は各宮殿下並各妃殿下を初め文武顯官、外國使臣等着席し、一般代表は前面棋目型の坐席なり。一同最敬禮の後「君が代」を奉唱す。次で近衛首相、玉座の前下に進み、恭しく壽詞を述ぶ、虔誠の言肺腑に徹す。壽詞畢つて首相席を下る。　陛下には侍從長の捧ぐる勅語書を手にし給ひ、玉音朗々優渥なる勅語を賜り、一同感極つて涙を呑む。嗚呼此の感激實に筆舌の盡すべきなし。斯くて軍樂隊の奏樂、音樂學校生徒隊の「紀元二千六百年頌歌」齊唱ありて、首相再び玉座の前下に進み、　天皇陛下萬歳を唱ふ、全員之に和し、續いて百一發の皇禮砲は殷々と天地に轟けり。此に於て全員一同最敬禮を行ひ、首相式終了を奏上す。軈て　兩陛下には　龍顏御麗はしく還御あらせられ、茲に第一日の式典は全く終了し、一同順次退散せり。

翌十一日天氣又清朗一層清澄なり。此日は午後の開式なり。參列者一同は御下賜の記念章を佩用して亭午より入場す、大要前日に異ならず。定刻に至れば、　兩陛下重ねて臨御あらせられ、感激倍々深し。式に入れば奉祝會總裁宮御代理高松宮殿下奉祝の辞を述べ給ひ、次で外國使臣代表として首席グルー米國大使の奉祝辞あり、而して後茲に又優渥なる勅語を賜ふ。續いて開宴の號令に、一同御饌を開き盃を擧ぐ、御饌の傍には奉祝會特別編纂の列聖珠藻、聖德餘光を添へさせられ、子々孫々に至るまで、其の光榮を傳ふべき一家の重寶たらしめらる。饗宴の央、玉座の前方階下舞臺に催さるゝ奉祝舞樂の演奏あり、　陛下には悠々御觀覽あり、又玉盃を擧げさせ給ひて庶衆と歡を偕にし給ふを拜し、一層恐懼感激を深ふせり。噫々此盛儀參列者の光榮何にか如かん。

懷古すれば日本建國の初め、天照大神が皇孫瓊々杵尊に三種の神器と共に神勅を下し賜ひて日本統治の大原を立て給ふ、降りて　神武天皇の御代に至り、御年四十五にして「天業恢弘、天下光宅」を志し御東征を企て給ひ、日向の宮居を出で困苦辛酸六年にして、中州を御平定ありて天業の準備を立て、茲に御勅語を賜ふ、即ち「寶位ニ臨ミ以テ元允ヲ鎮ムヘシ、上ハ則チ乾靈ノ國ヲ援ケ賜フノ德ニ答ヘ、下ハ則チ公孫ノ正ヲ養フノ心ヲ弘メン、然シテ後六合ヲ兼ネテ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ヒテ家トナス亦可ナラスヤ」と詔り賜ふ。越えて二年辛酉春正月朔日橿原の宮に御卽位の禮を擧げ給ふ。萬世一系の皇統連綿として今日に至り、統韻百二十四代、歳啓實に二千六百年、嗚呼又隆なる哉。今や日支干戈を交へて既に四歳、皇帥の嚮ふ所敵なく、國威八紘に振ふ。西歐亦獨伊對英の戰禍あり、その波及する影響甚だ廣く、爲に日獨伊の三國同盟を見るに至り、我帝國を繞る國際情勢更に又多事を加へんとん。一方又支那の新國民政府の樹立に伴ふて日滿支の同盟成り、興亞共榮圏確立の業漸く其の緒に入れりと雖も、世界國勢の推移は依然複雜を極め、其の安定は敢て豫測を容さず、國家の存亡實に此に繫がる。

於是我首相近衛公は、大に意を決するあり、卽ち肇國の精神に則り皇祖の詔勅を體し又古來外冦對局の狀勢に鑑み、　天皇を中心とする國民一體の新体制を立て、大政翼賛會を起して、以て此体勢に當らんとす。而して茲に二千六百年式典を擧げ、全國の代表を會同して愈々君民一體の結合を密にす、眞に前古未曾有の大盛典たり。

噫々皇紀二千六百年、此紀元を劃する百歳一遇の此一年、多事多難の秋に於て、此式を擧げらる特に想起すべきは本年二月十一日紀元節に賜りたる勅語を初め、日獨伊同盟成立に際し、又記念觀艦式、記念觀兵式、教育勅語記念式典、又二千六百年式典等の勅語の總てが和衷戮力、時難の克服を諭させ給ふ大御心の程洵に恐懼感激に堪へざるなり。

噫々皇紀二千六百年、曩には滿洲國皇帝陛下親しく奉祝御訪問の御行禮あり、御歸還の後には建國廟を建て天照大神の御神靈を祭り給ふと聞く。是素より　陛下御賢德の致す處にして、實に東亞の民族をして我神聖の大道に歸一せしむる道程たるべく、將來更に御稜威の輝きは宇内萬邦に光被するに至らん。我等臣民たるもの宜しく祖宗の詔勅を体し、時局を察し、和衷戮力以て大政翼賛の誠を效し、時難を克服して國威の宣揚に努めざるべからず。

噫々燦たり皇紀二千六百年!!

東彼杵郡鈴田村長　吉崎仁右衛門

皇紀二千六百年記念式典に參列するの光榮を得まして、廣大無邊の聖恩に感激し感謝する、國民の感想は誰しも同じだと思ひます。

まのあたり　兩陛下のお姿を拜し「君が代は……」「天皇陛下萬歳」と奉唱する時、今迄体驗したことのない、眞に心の奥底より靈動する樣な有難さと感激とに打たれて、吾知らず、あらん限りの力を出し、強く高唱いたしました時は、熱涙の頰を傳はるのを覺えませんでした。殊に勅語を奉戴いたします時、かすかながらも玉の御聲の耳朶に響いたとき、「みたみわれ生けるしるしあり」の氣持一杯で、外に何の考へもなく、唯暫くの間身の振ひがやみませんでした。

司臣六萬浴光榮
親拜天顏惜漏聲
優詔蹙胸皆感涙
高唱萬歳誓忠誠

式場に於ける感想

長崎縣立島原中學校教諭　吉田惟男

大御稜威かしこき極みあめつちの
今日の佳き日に晴れ渡るかも

昭和十五年十一月十日、曠古の大盛典たる紀元二千六百年式典を擧げさせらるる此の日、大空は一翳さへもとゞめぬ紺碧の色に澄み渡り、旭光は燦々と輝いて天地にあまねし。靈峯富士の勇姿も全く雲に閉されて、仰ぎ見るを得なかつた昨日の雨模樣の空を憶ふとき、誰か今朝のこの快晴を豫想したらうか。一億民草の只管の祈りと、遙かに偉大なる力卽神力、渾然と一体に融流せる絶對力を感じて、心は新たなる感動に打ち慄へて居る。

大内山の老松も彌々綠深く、降り注ぐ陽光は大天地に充ちて、その崇高なる樣は皇國の悠久にして光輝ある過去を誇り、更に將來に向つて久遠無疆の彌榮を象徴してゐるかの樣に思はれる。すがすがしく清められた宮城外苑の式場に臨み、御紋章燦たる紫の幔幕に張り繞らされたる寢殿造りの式殿を拜し、神々しき玉座及び御座を仰ぎ拜して心は感激にどよめいて居る。この聖紀の式典に參列の光榮を負ひ、宏大無邊の皇恩に感泣の涙を催して、滿身の血唯盡忠報國の一念に沸きたぎつのを覺ゆるのである。

すめろぎの國の精神にそはましと
ひたすら燃ゆれ生きらむ極み

式場に設けられた席に居並ぶ五萬の參列者、襟を整へ威儀を正し、感激の瞳は涙に輝いて、自ら赤誠の氣場内に溢れ、肅然たる樣は益々心を緊張に驅つて、一萬數千坪の式場唯崇重の氣に滿ちて

ゐる。式殿前の日月、八咫鏡、金鵄、桐花の紅旛が一きは瑞光に映ゆる頃、儀仗隊の嘹喨たる喇叭の響場内に轟けば、敬虔の念に自ら首垂るゝを覺ゆる。

大天地かぎろひたちて出御に
み民われ等のたかぶる心

玉座を仰ぎ拜すれば、　天皇陛下には龍顏いとも御麗はしく、陸軍御軍裝の御英姿は畏くも御輝かしき極みであり、御座には　皇后陛下の御美はしき御洋裝の御麗姿を拜し奉り、御左右に御並列遊ばさるゝ各皇族殿下を仰ぎ奉つて、誰か莊嚴さに感激し恐懼しない者があらうか。感極つて嗚咽の聲さへ聞え、止めどなく溢るゝ涙は頰を傳つて流るるをも覺えず、感激の至誠は凝つて地にひれ伏して慟哭したき衝動にさへ驅らるゝのを覺ゆる。何に例へんこの感激。聖代に生をうけ聖恩に浴し、正に肇國以來の盛典に參列の光榮を得て、鴻毛の身茲に固き決意なくて何の赤子ぞ。

君が代を八千代にとこそほぎまつれ
一途の聲のふるへやますも

折柄靜かにも嚴かに鳴り渡る君が代の奏樂、聲高らかに天にも響け地にも轟けと、熱誠こめて壽ぎ奉らんとして亢奮は胸に迫りて聲とはなり得ず、唱へ奉る歌は恐懼に慄へて涙のみ滂沱と流るゝ。この感激の極致こそ御民我等遠く父祖より受け繼ぎ來れる魂の眞髓なのである。立御遊ばさるゝ至尊の神々しき御姿を拜して、滾々と湧き出づる赤誠こそ「明き淨き直き誠の心」卽ち淸明心と言ふのであらう。

あめのしたとゞろき渡れみ民らの
一ついきほひの萬歳の聲

此の皇土は申すまでもなく、海外同胞も時を同うして、近衛首相の音頭に合せて唱へ奉ると言ふ萬歳の聲は茲に奉祝者五萬の赤誠の迸りとなりて日本晴れの秋空に融け込んで行く。萬葉に「御民吾生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば」と謳歌してある心が卽今の我が心であり、我等一億同胞の歡喜なのである。

天皇陛下、皇后陛下には入御あらせられ、式の終了を告げられても感激と興奮は醒めやらず、皇禮砲の餘韻深き轟きに合はすが如く低く又高く夢の如くにも感じ、又激しき輝きに餘すなく追憶致されもする。

此の式典に畏くも優渥なる勅語を下し賜ひ、有難き聖旨を拜して、我等一億同胞は宏大無邊の御稜威のもとに、誓つて大御心を奉體し、惟神の天業を翼賛し奉らむ決意に固められたのである。

今や內外多事多難にして、世界の混亂歸趨はその波濤を大東亞の圏內に何時及ぼすか測知出來ない秋である。國運の隆替に深く御軫念あらせらるゝ御聖思を拜し、我等恐懼に禁へず、皇祖の肇國の大精神を奉體し、神武天皇の八紘一宇の御鴻業に應へまつるべく、聖訓を服膺し至誠以て扶翼し奉らむ事をこの曠古の祝典に當り深く心に決したのである。

曠古の盛典に參列しての感想

面高村長　吉田寅太郎

光輝ある紀元二千六百年の歴史的式典並に奉祝會に參列の光榮に浴しましたことは終生忘るゝことと能はざる恐懼感激の極みであります。

宮城外苑、廣大にして森嚴極りなき式場に、茫然自失敬虔なる思ひに滿たさる中に、畏くも天皇皇后兩陛下御臨御あらせられ、尊き御英姿を目前に拜し奉り、玉音朗々と賜はりし優渥なる勅語を拜聽し、やがて近衛首相に唱和して、　天皇陛下萬歳を奉唱せる時は、餘りにも有難く、只々暗涙に咽び身に顫を感じ、筆舌に盡すことは出來ません。此宏大なる御稜威の下、微力ながら、誓て大御訓を服膺し、聖恩の萬分の一に應へ奉らんと強き決意を堅くした次第であります。

二日目の奉祝會にも、　兩陛下の御英姿を目前に拜しながら、御饌御神酒を頂戴、五萬五千の參列者と悠久の舞を拜し、別して高松宮殿下の御力強き奉祝詞を奏上遊ばされし時は、只々有難く感極つて暗涙の外はありません。此二日に亘る盛儀に參列致しまして、世界に誇る國體を今更ながら感銘、七生報國の念を深くした次第であります。

皇紀二千六百年記念式典に參列して

吉村安次郎

微臣の身を以て、昭和十五年十一月十日及十一日、宮城外苑に於て催されたる、皇紀二千六百年記念式典に參列の光榮に浴し、第一日には朗々たる近衛内閣總理大臣の壽詞を奏上の後、畏くも聖上陛下の勅語を拜するや、滿場寂として水を打ちたるが如く、處々に感涙の聲さへ洩るゝを聞けり。第二日には生々潑剌たる高松宮殿下の御祝詞を拜し又もや畏くも　聖上陛下の勅語を拜し、感激言語に絶するものあり。元來勅語なるものは國務大臣に賜はり、夫れを臣民に諭達せらるるものなるにや聞き及び居たりしが、二日間の式典に二日共勅語を賜はりたることは、有史以來曾てなき特典なりと感激せり。老生は是迄數限りなく君が代を奉唱し又數限りなく　聖上陛下の萬歳を奉唱し來りたるが、今度び親しく　兩陛下の御前に於て、五萬餘名の參列者が一團となり、心から君が代と　陛下の萬歳を奉唱したるときは從來とは全く異りたる感に打たれ、萬邦無比なる皇國に生を享けたることの幸福を痛感したり。特に二日間の祝典が天候に惠まれたることは不思議に堪へず、東京で十一月の時候で、而かも其の直前にも直後にも雨氣を催し居れるに拘らず、祝典が二日が二日共快晴で、一片の雲影だになき日本晴れであつたことは全く奇蹟で、天祐だと思ひます。私は日本の前途は晴れだと云ふことを直感しました。夫れは私丈けではなく、參列した友人の均しく抱いた直感でした。

紀元二千六百年奉祝式並奉祝會參列所感

嚴原町長　若槻長三郎

草莽一介の微臣　長三郎乏を承けて、僻遠海隅の町村長の員に列する故を以て、今次皇國曠古の奉祝式典並奉祝會參列の光榮を荷ひ、萬感切に至り言ふ所を知らず、而して之を摘綴すれば、往古天平年間犬養宿禰　天皇の詔に應へ奉りたる和歌、御民吾　生有驗在　天地之　榮時爾　相樂念者の一首に歸着し、此絶代の名歌は正に今日體驗する如實の表現と云ふを得べく、他に縷々の言を要せず、只感泣ある而已　然れども此感を抱いて歸來し、之を町民に告げ、天恩の優渥宏大なるを周知せしめ、以て誠歡誠喜の衷情を分たんとし、蕪辭を綴りて少しく狀況を述べ、聊か蛇足を添へんと欲す。

昭和十五年十一月十日、一天恰も拭ふが如し。數萬の參列者は進んで式場に入り、整然と各指定の位置に就く。次で警衛の陸海軍儀仗隊進行し來つて殿前に整列す。十一時若干分前　兩陛下には側近重臣等を從へ鹵簿肅々二重橋外に出御、頓て式殿に着御、先づ一旦奥深く便殿に入御。十一時を過ぐる數分陸海軍々樂隊の國歌吹奏の中に　皇后陛下は皇族各妃殿下を從へ、皇后宮太夫女官長扈從式殿に台臨遊ばさる、　天皇陛下は宮内大臣、侍從長、侍從武官長供奉、各皇族殿下を御後に正面玉座に着かせ給ひ、玉座の左右には各宮各妃殿下恰かも綺羅星の如く並列あらせらる。此時近衛首相は式殿の階を下りて　兩陛下に對し奉り、敬虔の態度を以て、式典開始の旨を奏上し、全員最敬禮を行ひ、次で感激を籠めて全員國歌君が代を齊唱すれば、　兩陛下出御之を受けさせらる。此刹那　陛下は正に建國創業當時に於ける　神武天皇惟神の顯現を拜し奉るが如く、微臣等至誠の赤心は恰かも天上に昇るが如し、而して遠祖高天原民族の敬虔なる奉仕も斯くや有りけんと神秘的の感頻に胸裏に徂徠す。近衛首相正面階段を昇り恭しく御前に進み、謹んで聖紀の壽詞を奏し奉れば　陛下は天機一入御麗はしく侍從長の奉ずる勅語書を御手に、玉音朗々「人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアランコトヲ期セヨ」と宣給へる有難き勅語を賜はるを拜聽するの間、滿場宛かも水を打ちたるが如く、衆員寂として頭を垂れ、深き感動に咽ばぬ者なし。次で湧くが如き二千六百年頌歌の調べ、莊重なる歡聲に胸を打たる。此時十一時廿五分、首相は再び階を下り正面に向ひ、肅然兩手を擧げて　天皇陛下萬歲を奉唱し、總員萬歲々々と歡喜に顫へつゝ雷音の如く三度唱和し是にて式の終了を見たるが、僻遠對馬の我嚴原町民も今や縣社嚴原八幡宮神社前に、ラヂオ放送を待得て、有明山の峰も谺すべく唱和に至誠を捧げたるならんと、私かに想遣るも喜しかりき。御式後、　兩陛下の還御を奉送し式場を退出したるに、場外及街頭の盛なる奉祝氣分は實に空前の賑ひなりき。

次の日、前日と同所に於て、擧行せられたる奉祝會、滿場燦然花の如く、清楚善美を盡せる御宴の設備及狀況に就ては之を省略す。只時局柄此祝典に於て戰時氣分を味ふ可く用意せしめ給ひたる聖慮を畏しこみ、當局の盡瘁を感謝す。

謹んで惟ふに、此祝典の席に　兩陛下臨御玉杯を擧げさせらるゝや、至仁至慈なる　聖慮の顯現にして誰か感泣せざらん。頌歌及舞樂等の御催し亦大に清興を添へ、和氣靄然泰平の象蔚爾たるを見る。顧つて思ふに、方今廣く世界を見るに、從來帝王の尊を誇りたる人、遠き國外に流離苦艱を嘗むるあり、或は國破れて山河のみ在するの土あり、然るに我金甌無缺の皇國は二千六百年の長きに亘り、萬世一系の　天皇の御稜威愈隆に、茲に曠古の大祝典を擧げさせらる、彼我の懸隔何ぞ甚しきや。況んや多年興亞の聖戰振旅し、八紘一宇大業の完遂期して待つ可きをや、嗚呼偉大なる哉。

紀元二千六百年　皇運無窮熙八紘
皇統連綿千古到　聖慈宏遠感天恩

佐世保稅務署長　池邊怡熊

紀元二千六百年式典並奉祝會參列の光榮に浴して

宇土藤作

○東上の途中にて

嬉しさは何にたとへん二千あまり六百年ののりにめされて

よろこひは胸にあまりて山河の眺めさやけき汽車の窓かな

駿河路は雨雲低くたれこめて富士の姿は見られさりけり

富士見えぬうらみはあれとそれよりも明日の日和の氣つかはれつゝ

○式典に參列して

氣つかひし日和は晴れて天地はたゝよろこひに充ちわたりつゝ

神さひて仰くもかしこしすめらきの宮居したまふ大內の山

大御幸今かも仰く君か代の樂こそひゝけ二重橋の邊

大君の御影をろかむかしこさにたゝせきあへぬ涙のみして

畏くも下したまへる大みこと肝にきさみてはけまさらめや

奏したまふ近衛大臣のほきことは實に一億の民の聲なり

むらきものま心こめて唱へけり君か代の歌君か萬歳

親も子も共にみのりの場にたつほまれは家のほまれなりなりけり

○奉祝會に參列して

大御ゆき今日も仰きて天地のきはみなき代を祝ふかしこさ

畏くも臣となのらす高松の宮のみことは胸にせまりつ

大君も豊御酒くませたまひけり戰のにはをしのふみあへに

君と臣なこみたのしむこのうたけ外つ國人もあふき見るらん

箸とらんことをかしこみ賜はりしみあへこと〳〵家つとにして
大君もうつなひまさん一億の民のさゝくる赤き心は
今さらに何かおもはん身にあまる今日のみあへにあへらく思へは
天地をとよもすはかり今日もまた君をことほく萬歳の聲

○西下の途中にて

降る雪の白髪までもなからへてみ代の光をあみしうれしさ
み民われ生けるしるしあり此のおもひたゝわか胸に湧きかへりつゝ
呉竹のよしや老ゆとも臣の道はけまさらめやたゝならぬ時
身の幸もみあへものせて歸るさの心たらへる汽車の中かな

紀元二千六百年奉祝式典並奉祝會に參列して

長崎市立長崎幼稚園保姆　浦　菊　代

遙かに式場を拜して

ひるがへる錦のみはた薫る菊千代田の松に祝ひむすびて

式場入場の折

賤が身の光榮の極みに涙する父祖のおもかげ我はこびゆく

式場で

秋の空氣は澄み渡り菊かほる神の惠みに祝ふ今日かも

臨御を仰ぎて

君が代の樂の音清くみち渡る式場にこゑなく臣等ひれふす
大君ををろがみまつり畏くもよろこび滿ちて涙こぼるゝ

勅語を拜して

尊さよたまのみこゑの大詔肝にきざまんをみなわれらも

萬歳奉唱

涙して彌榮唱へ奉る誓のまこと聲につゝみて

式典を終へて

靖國の宮居にねむる敎へ子に先づや告げなん國の榮えを

記念章をいたゞきて

御紋章おしいたゞきてしのぶかな敎への庭の子等のおもかげ

再び　龍顏を拜す

大君のみゆき仰ぎて今日もまた二千六百祝ふもろびと

高松宮殿下奉祝詞を奏したまふ中に

宮様は臣宣仁とおほせらるこの時われらの胸はふるへり

祝宴の折

くみかはす神酒のかほりに織りなして千代をことほぐ悠久の舞

萬歳三唱

日の本の光あまねく大亞細亞今ぞとゞろく萬歳のこゑ

祝典を終へて

ふるさとの人にわかたん賜はりし今日のみあへの神酒におさかな

天地の神の守りに大御典つゝがもなくてをふるうれしさ

歸途の汽車にて

わが光榮を祝ひて窓に金の波墨繪の舟に十五夜の月

紀元二千六百年奉祝式典に召されて

大場榮三郎謹詠

祈るかなあまつひつきの彌榮え千代萬代のするのするまて

外國にたくひまれなる菊の花千代萬代もかほるみ國に

紀元二千六百年式典に列りて

長崎醫大教授　古屋野宏平

あさみどり晴れ渡りたる大内山に御幸しらする喇叭ひびけり

夢かあらじ現人神の大前に世紀壽ぐ御民われはも

此感激肝にきざみて一すぢに世の新しき秩序を建てん

奉祝盛典

北松浦郡生月町　近藤平重

菊日和瑞雲こむる大八洲

奉祝塔菊花さかりぬ馥郁と

秋光や大内山は濃みどりに

秋日燦紅旛儼と立ちならぶ

空高し聖紀讃ふる大萬歳

一億の萬歳唱和秋うらら

奉頌歌融けゆく御空高々と
禮砲は殷々として空澄めり
秋の庭五萬の民はたゞ咽ぶ
宮の御聲澄む蒼穹に御朗々
永久の皇國聖紀は菊と薫らなむ

皇紀二千六百年奉祝式典參列の感想

壹岐郡沼津村　白川助太郎

ふく風も枝をならさぬけふの日は壽女良みことの惠みなりけり
皇神の御孫そろはを出てませしみ壽かたあふき涙こほれし
九重の池のみきはの鶴亀はけふの祝ひに舞ふて居るかな
千萬代にゆるかぬ國の日の本は富士の高根のすかたなりけり

紀元二千六百年式典に參列して

柚木村長　杉村誠一（潮東）

秋光や金屏に拜す　兩陛下

聲なき萬歲

紀元二千六百年式典及紀元二千六百年
奉祝會に參列の恩命に浴して

島原市秩父ヶ浦公園　平富重

行幸啓仰ぎまつりつかしこさよいまそ祝きまつる二千六百年
兩陛下のおん前にして歌ひまつる國歌は聲に出てすかしこき
まのあたり仰きまつれは大君や現人神とまことおぼほゆ
み民われら何の光榮そもこのよき日行幸啓仰ぎよき歲を祝ぐ
うやうやしく近衛首相かたてまつる壽詞きこしつつ立ちておはすも
おほみこと宣らすみこゑのかしこさやかうべふかく垂れてわれは泣きつゝ
弟宮の高唱へます萬歲にわか和しまつることのかしこさ
聖壽萬歲となへまつりつつをろがめば玉座に立たせたまふかしこさ
國あげて祝ぎたてまつるこのよき日野戰料理をとらせたまふか

今しいま君民一體のこのさまをとつ國びとに見せまくぞほる
みづくかばね草むすかばね大君に命さゝげしみ民そわれら
還幸啓おくりまつるとあめつちにとどろきわたる皇禮砲の音
國こぞりことほぎまつるあかるさよ聖戰下けふの二千六百年祭

歸途伊勢神宮に參拜す

わかいのち何をしからむ五十鈴なる皇大神にちかひまつりぬ

橿原神宮及畝傍御陵に參拜

悠遠の昔しのびつつ橿原の宮ゐの秋を伏しをがむなり

紀元二千六百年奉祝式典並奉祝會に參列して

長崎醫科大學教授　竹内清

奉祝列車

たとへにも江戸長崎と云ひしなる五百里の道ひたかけり行く
長崎の果てよりあすの式典を祝はむ列車轟々と行く

場内風景

童心に歸りしやらむ今日の日は老いしも壯もにこやかに笑む

たゞ見れば頭の海に秋の日は斜に映えて御旗さらめく

聖上出御

擴聲は止みて一しほ靜かなり五萬の頭たゞあなたのみ向く
君が代の奏樂ひゞさまのあたり貴き　みすがた今ぞ拜する

學生奉祝歌唱

今こそは　君の御前ぞ高らかに聲をかぎりに天までうたへ
若き子等今こそ唱へ大空にさえぎる雲の一つだになき

感激

大君のあげさせたまふ盃を拜しつ我も五万の人も
とゞめんとすれど涙は眼の内に押し出しけりとなりの人も

紀元二千六百年式典に參列し奉りて

橋五代謹詠

思ひきやかくもかしこきおめしをはかすならぬみにうけまつるとは
立ちならふみはたの光いとゝなほ高くあほきぬきくのかをりを
心からたふとかりけりのりのにはかたしけなさにことのはもなし

ふしをかむひしりのきみのみまへにてちかひまつりぬおのかつとめを
いかにしてむくいまつらんかしこくもはえあるけふのこのみめくみに

紀元二千六百年奉祝式典竝奉祝會に參列して

長崎市今町五十五番地　堤　牧　太

虔み參入る奉祝門や菊薫る
君民の今日の和樂に秋晴るゝ
み民われ今日の佳き日に菊の杯

佐世保市大宮町三七三　中尾榮太郎

大宮のおほちにあふれ流れつゝみ民壽く二千六百年
秋晴れやみゆき待つまの民心
宣らすらむみ姿のみもおろかみつ大御心のまゝとそかしこ
菊の香や悠久の舞みそなはす
おと宮の「臣宣仁」と壽詞めす後はえきかずたゞ涙のむ

列紀元二千六百年式典有感

大村町長　福田伊五郎

皇祖基神籌肇國　（皇祖神籌ニ基ツキ國ヲ肇メ）
烈聖相承慈四海　（烈聖相承ケ四海ヲ慈シミ給フ）
億兆一心答君恩　（億兆心ヲ一ニシテ君恩ニ答（奉ル））
國體之優冠宇内　（國體ノ優ナル宇内ニ冠タリ）
悠久二千六百年　（悠久二千六百年）
瑞雲靄々繞宸闕　（瑞雲靄々トシテ宸闕ヲ繞ル）
今茲列聖典感新　（今茲ニ聖典ニ列シ感新タナリ）
唯期滅私報君國　（唯期ス私ヲ滅シテ君國ニ報ゼン）

皇紀二千六百年式典參列の光榮に浴して

佐世保　福田英四郎

御前に列る民の目に肩に感激の見ゆ式典の苑
秋晴の御苑に滿つる神威かな

紀元二千六百年式典に參列して

三浦順太郎

ためしなき祝のにはにつらなりて皇國人のさちおもふかな
おほけなやいさをなき身もなからへて今日のめくみにあふそうれしき

二千六百年式典並奉祝會參列感想和歌

北松浦郡神浦村　山田甚平

大御典現に拜す老の身はわか返りして君にさゝけん
御民われ生けるかひありいてましのラッパを聞きてかしこさに泣く
萬歳をとなへる時はおのつからおひの目頭あつくなりけり
賜はりし御酒恐みて持ち歸りふる里人といたゝきにけり

北松浦郡大野小學校長　吉村德一

一統無窮二十六の世紀秋晴るゝ
胸躍らせて仰ぐ殿上に靈鵄舞ふ
只尊うと只おほけなく玉座仰ぐ
斯くてこそ世を掩ふ光は東より
明日を信ずる一億の民の幸多き

脇岬村長　渡部高市

いさり火をたく賤の男も百年の御式典の庭におろかみまつりぬ
村人に代りてうけしさきはへを代々につたへてつとめはけまむ

幸運と感謝

長崎縣廳振興課　柴田正明

皇紀二千六百年の奉祝會參列の光榮に浴した感激は私の生涯忘るゝことの出來ない強き深き思出となるであらう。肇國以來二千六百年、萬世一系の皇室を戴き、生生發展未だ嘗て外國の侮を受け

た事のない皇國に生を享け、平安にその生を營むことの出來るのは何と云ふ幸福であらう。感謝せずには居られない。それだけでもよくぞ日本に生れたりと云ふ歡喜を覺えるのにこの度は又何と云ふ幸運であらう。菊花馥郁として咲き薫る、晩秋の佳き日宮城外苑に於て、畏くも　兩陛下の臨御を仰ぎ催されたる紀元二千六百年奉祝の盛宴に列する事が出來たのである。この奉祝式典及び奉祝會に召されたる人々の數は五萬餘とは云へいづれも内外各種各階層の代表者であるのに、私はたゞ僅に紀元二千六百年奉祝會の仕事に關係して居た爲めに圖らずも特別會員として身にあまる厚遇を受け參列の光榮に浴したのであるから全く感謝せずには居られなかつた。又過去三十餘年の私生活を顧りみるに時に不遇あり、時に暗影ありしに、今日この光榮に浴した事に付ては實に感謝一入なるものを覺えた。

歡喜と感激

紀元まさに二千六百年肇國のその日以來繼ぎ繼ぎて今日に至る、聖戰四年にして迎へたるこの年この歡喜を祝ふ世紀の日、けふ十一月十一日はかくて我等一億同胞の上に榮光と共に齎された。空に一點の雲もなき日本晴、晩秋の爽氣身に泌みて淨らかなるこの日、宮城外苑の會場は瑞祥に滿ち五萬餘の參列者を容れて、背後に仰ぐ大内山の翠綠に對し寂として靜まつてゐた。參列者はたゞ天皇皇后兩陛下の臨御を仰ぎ奉つて擧行される曠古の祝典開始を今や遲しと待つてゐたのである。五萬餘の參列者の卓子の上には、この日を祝ふ冷酒、盃、食饌及奉祝會記念圖書が白布に包まれて配置されてある。やがて午後一時四十八分、一發の號砲大空に轟きて　兩陛下宮城御出門の時刻を報ずる。場内アナウンスが「間もなく陛下には着御あらせられます」と報ずるや諸員一齊に起立、これと同時に止水の如き靜寂を破りて遙かに遠く微風に乘つて君が代の喇叭吹奏の音が流れ、大内山の綠濃きうちより、鹵簿肅々として進ませ給ふ御模樣を拜し、赤子の瞼は凝然として動かなかつた。

着御時刻午後一時五十分、一旦着席した諸員は君が代奏樂とともに再び硬直して起立した。兩陛下の御出ましである。御先導は奉祝會總裁御代理高松宮殿下であらせられる。遙かに仰ぎ奉りて畏くも御眼鏡のきらりと光るを拜して恐懼肅然、只胸躍るを覺えた。

かくて近衛會長中央階下に參進し奉祝會開始の旨を奏上、こゝに晴れやかな慶祝の典は始められた。　兩陛下には立御、諸員最敬禮、君が代を奉唱してより　總裁御代理高松宮殿下には　陛下の御前に御參進、奉祝の詞を奏上遊ばされた。畏き御聲はマイクを通じて場内隈なく、また全國津々浦々まで放送されて、國民の感激はいよいよ高潮したのであつた。

しかも御言葉の中に御自身の御事を「臣」と仰せられるのを承つたのであるが、御弟の宮であらせられながら「臣」と仰せらるゝことの忝けなさ、誠に一君萬民の國體の尊嚴なる姿をまのあたりに拜して今更ながら感激の新なるものがあつた。

次いで駐日外國使臣首席グルー米國大使御前に參進、奉祝詞を奏上、　陛下にはこれを聽召されたのち勅語書を御手に執らせられ優渥なる勅語を賜はつたのであつたが此間參列者の胸は感激に高

鳴り日の本の國に生を享けた大なる歡喜を今更ながら深く深く銘記したのである。それより御膳並に御酒を奉つて開宴、畏くも　兩陛下に全國民と慶びを偕にせさせ給ふ思召から供御は全く參列者のものと御同樣の野戰食を主としたものであらせられたと洩れ承る。舞台上には奉祝舞樂「悠久」陸海軍樂隊奉祝音樂「大歡喜」「紀元二千六百年頌歌行進曲」「吹奏樂奉祝讃歌」等つぎつぎに演奏され、最後に全國學生生徒代表三千餘名の奉祝國民歌「紀元二千六百年」齊唱があつて歡びの宴を終へ、總裁御代理高松宮殿下には舞樂舞台上に昇らせられて萬歳を御發聲、諸員高らかに唱和し奉つた。かくて近衛會長御前に奉祝會終了の旨を奏上、　兩陛下には一旦便殿に入御、同三時五分諸員奉送裡に會場發御、天機並に御機嫌御麗しく還幸啓あらせられ、こゝに二日間に亘る曠古の式祝典は擧國慶祝のうちに目出度く終了したのであつたが今更考へて見ても當時の光景がはつきりと眼前に浮び眼頭の熱くなるのを覺えるのである。

殊に至尊の御前に於て「君が代」を奉唱した時程敬虔な氣持で歌つた事はなかつた。全身只これ緊張、感極まつて湧き出る涙を禁じ得なかつたのである。又遙かに　兩陛下を拜しつゝ、誠に萬國に比類なき和やかな君臣和樂の大盛宴に御饌御酒を戴きたる時の光榮と歡喜の情は筆舌には徹底表現し得られない感激であつた。やがて高松宮殿下の御發聲による、　陛下の萬歳奉唱に聲をかぎりに御唱和申し上げたあの力强き叫び、一億臣民のすべてが至尊に歸一し八紘一宇の御理想實現に天業恢弘に國民的赤誠を誓ひ奉つた次第で暫しはたゞ茫然たるばかりであつた。

鳴呼あの日の光榮と感激永く胸裡に藏して永へに廣大無邊の皇恩に感謝し臣道實踐に微力を捧げて萬分の一に酬い奉らんことを深く深く祈念してゐるものである。

再び光榮に浴して

十一月十一日宮城外苑に於て擧行された紀元二千六百年奉祝會に參列しその感激未だ醒めやらぬのに同月二十五日には神都宮崎市で擧行せられた、宮崎神宮境域擴張整備工事竣工奉獻式に參列するの機會を得、重なる光榮に只々感謝の外はなかつた。宮崎神宮は、人皇第一代神武天皇を御祠した由緒極めて古く、上下の尊崇を鍾められたる名社であるにかゝはらず、神域の狹隘なりしは恐懼に禁へず、これが擴張整備は全國民の永き念願であつた。紀元二千六百年奉祝會に於てはこの輝かしき嘉歳を迎ふるに當り奉祝記念事業の一として巨費を奉獻し、境域擴張整備、徵古館改築を計畫せられたのであるが、昭和十三年十一月工を起してより滿二ヶ年、赤誠の日向御民をはじめ全國より奉齊の汗の結晶は神々しさ彌ます雄大なる聖域となつて皇祖の大御前に奉献されるやうになつたのである。此の日奉献式並に奉告祭は畏くも　高松宮殿下の台臨を仰ぎ奉り午前十時からおごそかに執り行はれ、さらに午後一時十分からは肇國の大理想を顯現して威容成つた八紘の基柱竣工式が秩父宮殿下御使今村別當臨場のもとに擧行されたのであるが、式場に於ては間近に高松宮樣を拜し殊に直會に於ては咫尺の間に拜して御酒並に高杯の山野幸海川幸を戴くの光榮に浴し和やかなる酒宴の中にも云ひ知れぬ感謝の情を禁ずる事が出來なかつた。次にこの感激を永く記念するために式次第等を記する事にする。

宮崎神宮境域擴張整備工事竣工奉獻式次第

日時　昭和十五年十一月二十五日(月曜日)午前十時
場所　宮崎市　官幣大社　宮崎神宮境内

午前九時三十分マデニ參列員所定ノ席ニ著ク

次　宮崎神宮參拜　會長以下役職員
次　總裁宮殿下御臨場(全員起立敬禮)奏樂「君か代」　吹奏樂團
次　開ノ會辭
次　宮城遙拜
次　國歌「君か代」　全員起立
次　式辭
次　工事經過報告
次　紀元二千六百年奉祝會長奉獻目錄ヲ宮崎神宮宮司ニ手交ス
次　宮崎神宮宮司挨拶　內閣總理大臣　宮內大臣　內務大臣　宮崎縣知事
次　祝辭
次　閉會ノ辭
次　總裁宮殿下御退場(全員起立敬禮)奏樂「君か代」　吹奏樂團
次　參列員退出

宮崎神宮境域擴張整備工事竣工奉獻奉告祭式次第

日時　昭和十五年十一月二十五日(月曜日)午前十一時二十分
場所　宮崎市　官幣大社　宮崎神宮

午前十一時參列員參進所定ノ座ニ著ク

午前十一時五分ヨリ宮司以下神職參進

(是ヨリ先手水及修祓ノ儀アリ)

次　宮司以下神職所定ノ座ニ著ク
次　紀元二千六百年奉祝會總裁宮殿下御參進拜所所定ノ座ニ　役員隨從
　　御著(是ヨリ先御手水及御修祓ノ儀アリ)
次　宮司御扉ヲ開キ畢リテ側ニ候ス　此ノ間奏樂一同磬折
次　禰宜以下神饌ヲ供ス　此ノ間奏樂
次　宮司祝詞ヲ奏ス　一同磬折

次　紀元二千六百年奉祝會總裁宮殿下玉串ヲ奉リテ御拜禮　一同起立

次　宮司玉串ヲ奉リテ拜禮

次　紀元二千六百年奉祝會長玉串ヲ奉リテ拜禮

次　內閣總理大臣玉串ヲ奉リテ拜禮

次　宮內大臣玉串ヲ奉リテ拜禮

次　內務大臣玉串ヲ奉リテ拜禮

次　宮崎縣知事玉串ヲ奉リテ拜禮

次　參列員總代玉串ヲ奉リテ拜禮

次　禰宜以下神饌ヲ撤ス

次　宮司御扉ヲ閉チ畢リテ本座ニ復ス

次　紀元二千六百年奉祝會總裁宮殿下御退下

次　宮司以下退出

次　參列員退出

直會式次第

時刻參列員一同着席

參列員一同自座列拜

此ノ間奏樂

此ノ間奏樂一同磬折

役員隨從

高松宮殿下台臨　一同起立敬禮　奏樂「君ガ代」吹奏樂團

次　紀元二千六百年奉祝會長挨拶

次　神職正面ニ進ミ甕ヲ執ル

是ヨリ先諸員饗膳ノ上覆ヲ取ル

次　諸員起立盃ヲ執ル

次　神職諸員ニ向ヒ一揖シ神酒ヲ注グ

此時諸員神酒ヲ拜戴シ　畢リテ盃ヲ置キ　一拍手

次　直會

高松宮殿下御退場　一同起立敬禮　奏樂「君ガ代」吹奏樂團

次　諸員退出

宮崎神宮境域擴張整備工事竣工奉獻奉告祭直會

御料理獻立並御器の御說明

高坏には紀元二千六百年の感激に輝く「日向」の山野海川の種々の幸を盛り合せ、折には赤飯の外に「つきいれ」を供へました。

御料理の下には古式に則り「みみつばい」の葉を敷きまして、床しい　いにしへぶりを偲びました。

高坏盛合御獻立

山野幸　椎茸（鼈甲煮）　勝栗（甘露煮）　山芋（白煮）　蜜柑●

海川幸　蓮根（八寶煮）　午蒡（日向酢）　人蔘（眞砂煮）　鶉卵（塩蒸）

高坏　鯛（酒蒸）　海老（寶來煮）　蛤（酒蒸）　卷昆布（甘煮）

酒器　結鰯●燒鮎（飴煮）　鴨（時雨煮）

御器に就て

本器は上古祭祀の砌神饌を盛るに用ゐました器を模したものであります。原品は帝室博物館にありまして、表面には朱彩を施し洵に華麗なもので、考古學上彌生式土器に屬し、熱田神宮附近から出土致しましたものであります。

本器は十一月十一日宮城外苑に於ける紀元二千六百年奉祝會の際供へましたものと同型の品であります。

紀元二千六百年奉祝會

昭和十六年五月十日印刷
昭和十六年五月二十五日發行　（非賣品）

發行所　長崎縣振興課内
財團法人紀元二千六百年奉祝會
長崎縣支部

印刷者　長崎市江戸町二六
堀清二

印刷所　長崎市江戸町二六
堀印刷所
電話三二五六番

411
298

終